
東方双界伝

~ Another Fantastic World.

白米

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方双界伝 } Another Fantastic World .

【Nコード】

N9845V

【作者名】

白米

【あらすじ】

幻想郷上空に突如現れた謎の島。それは別世界に存在する『もう一つの幻想郷』であった。二つの世界を舞台に、霊夢達の冒険が始まる……………。

私、白米の

最初のシリアス系小説。オリキャラの数が半端ないので、注意。

第一話 序盤『謎の浮遊島』（前書き）

はじめに

私は実は東方のゲームをやっておりません。勿論、購入してプレイしようと思いましたが、私の住んでいる地域では入手が困難な為に断念。

そこで公式資料集やファンブック、インターネット、動画、他のユーザー様の東方小説を調べ、漁り、東方の事を理解しようとする努力致しました。

ですので、東方キャラに対する指摘があればお願いします。こちらにも公式設定を主軸に二次設定を少し加えて東方キャラを書いていきます。

誤字脱字報告やアドバイスもしてくださると有り難いです。

なお、前書きにあった通り、この小説では白米のオリキャラ達が多数登場致します。ご注意を。

という事で、以下に該当する方はお引き取り下さい。

- ・『東方厨死ねや』な人
- ・『オリキャラを出すな、キモい』な人

- ・『東方を汚すな馬鹿』な人
- ・『荒らしに来ました』な人
- ・『駄作。読んで不快。消える』な人
- ・『パクリに来ました』な人

これだけ書いているのにルールを守れない方は、管理人に通報致します。

それでは、長くなりましたが『東方双界伝』を連載開始致します。

ゆっくりしていいね!!

第一話 序盤『謎の浮遊島』

幻想郷

それは周囲を博麗大結界で囲み、外界の常識から隔離された世界。その中では外界から空想の産物と切り捨てられ、忘れ去られていくもの達が独自の文化で繁栄していた。

人間、獣、妖怪、妖精、幽霊、そして神。種族関係なく全てを受け入れ、共存するその世界は、まさに理想郷と呼ぶに相応しかった。

過去、吸血鬼が放った紅霧が幻想郷中に広がった『紅霧異変』、春が来ずに雪が降り続いた『春雪異変』、とある二人組によって永遠に夜が続いた『永夜異変』等、様々な異変が幻想郷に起こっていた。

しかし、そんな異変も博麗の巫女や普通の魔法使いを初めとする幻想郷の住民によって解決され、幻想郷の平穏は保たれていった……。

命蓮寺の騒動から一年後、それは起こった。

ヴヴウン……

前触れも無く突然空が歪み、幻想の上空に謎の島が現れた。

四方を水に囲まれ、太陽の動きに合わせて西から北、そして東へ動くその島に、幻想郷の住民達は度肝を抜いた。日の入りと共に消え、日の出と共に西から現れる謎の島は幻想郷中の注目を集めた。

後に操作に向かった天狗達によると、空に浮かぶ島は博麗大結界に映った虚像だという事だとわかった。

しかし、肝心の島の居場所は依然として判明されなかった。

あの島は一体何なのか。

幻想郷の中に存在するものなのか、はたまた外界に存在するものなのか。

様々な憶測が時間と共に流れた。

浮遊島出現から二週間後、

幻想郷最東端 博麗神社。

今日もまた、幻想郷の空に浮かぶ島を見上げ、ため息を吐く一人の少女がいた。

頭に大きな赤いリボン。肩の部分が無く、下は袴ではなく赤いスカートの巫女の衣装を彷彿させる服。博麗神社の巫女、博麗^{はくれいれいむ}霊夢である。

「まいったわねえ」

縁側に座り、島を眺めながらお茶をすする霊夢。

「まいったねえ」

その隣、オレンジ色髪で鎖と分銅を取り付けた幼女が俯せに寝そべりながら瓢箪の中身を飲む。伊吹萃香いぶきすいか、こう見えても上級妖怪 鬼である。頭から生えているねじ曲がった二本角が人外の証である。ちなみに瓢箪の中身は酒である。

何？未成年飲酒だと？

こう見えて成人等超えているから問題無い。

「おーい、霊夢ー」

そんな2人の下に、1人の少女が箒に跨がりながら空を飛んでやって来た。

黒を基本とした魔女をイメージした服に白いエプロンを身につけた金髪の少女、霧雨魔理沙きりこめまりさである。

「遊びに来てやったぜ」

自分からやって来たくせに偉そうな態度の魔理沙に気にも止めず、お茶をすする霊夢。こういったやり取りは日常茶飯事であるからだ。

しかし、今日の来訪者は彼女達だけではなかった。

「号外〜。号外だよ〜!」

新聞をばらまきながら、超高速で空を飛び回る少女。少女は霊夢達

を見付けると、霊夢達の下に急降下する。
その際突風が巻き起こるが、霊夢達は慌てず帽子とスカートを押さえる。

「毎度どうも、清く正しい射命丸文です！あ、これは本日の号外です。よろしければどうぞ」

頭に頭巾、会社員をイメージした服、背中からは黒い翼。妖怪の山に住む烏天狗、射命丸文しゃめいまるあやが敬礼しながら名乗り、笑顔で霊夢に自分が書いた新聞『文々ぶんぶんまるしんぶん。新聞』を差し出す。

霊夢は新聞を受け取り、暫く眺める。

「『鍵山雛氏、目眩で倒れる』……。これの何処が号外なんだぜ？」

「……最近新聞に書くネタが無くなって来まして。浮遊島のネタは一週間前にもう尽きてしまいましたので……」

一面を読んですぐに新聞を後方に投げ捨てる霊夢。投げ捨てられた新聞は見事にゴミ箱に入った。

横から新聞を見ていた魔理沙のツッコミに、文も自覚してるのか、目を反らして濁いた笑いをする。

だが、次の瞬間ペンと手帖『文花帖』を手に、霊夢に意気揚々と取材を申し込んだ。

「そこで霊夢さん、あの浮遊島について何か対策とかありませんか？」

「対策？いつもプカプカ浮いているだけの島でしょ？そんなに危険なものでも無さそうだし、ほっとけばいいのよ」

「面倒くさいだけじゃないの？」
そんな文にしかめっ面をしながら軽くあしらおうとする霊夢。そんな霊夢に萃香が横槍をいれる。

「あやややや？よろしいのですか、霊夢さん？」

「何よ」

「そんな事言つてたら私、新聞に何を書くか分かりませんよ？」

幻想郷中を恐怖に陥れる謎の浮遊島。しかし、博麗の巫女はそれを傍観するという無責任な行動をとるのみ……。

次回の号外は『幻想郷壊滅の危機！？博麗の巫女が職務ボイコット宣言』で決まりですね（ ） 「 」

「あー……これは減るな、お賽銭」

文の脅迫と魔理沙の呟きに、霊夢はギクリと顔を強張らせる。知っている方もいるだろうが、博麗神社には参拝客があまり来ない。神社の場所は幻想郷の最東、周囲には妖怪が出る森、更に霊夢の人間・妖怪問わずに惹きつける性格に惹かれた妖怪達が度々神社を訪れるという悪循環により、博麗神社に参拝しにくる人間が激減してしまっている。しかも里の人間達は「博麗神社は妖怪に乗っ取られた」と噂しており、ますます参拝客がなくなってしまったという。最も、博麗神社で宴会が開かれる場合は人間の客も来るのだが……。

賽銭は神社の経済力と信仰の証。巫女である霊夢は、どうにか賽銭を得て神社の信仰を得ようと模索していた。…最も守矢神社の風祝こちやむなえ東風谷早苗に営業停止を命じられるまであまり気にしてなかったみたいだが……。

更に最近では守矢神社や命蓮寺等、営業ライバルが出現したので霊夢はかなり焦っていた。

霊夢としても自分に神社の不利になる事を新聞に書かれる事は避けたい。特に守矢神社の面々に知られたくない。

しかし、

「だからって、あの島の場所が分からないから対処しようが無いじゃない!！」

「…まあ、確かに」

「ですよねー……………」

まさかの霊夢の逆ギレに若干引きながら同意する魔理沙と文。

このまま怒らせると流石にヤバいと感じた二人は、必死に霊夢を慰めにかかったという。

「つまり霊夢さんは、浮遊島が結界に映った虚像と分かったときから島の場所を搜索していたんですね」

「うん。昨日ここに来た時、霊夢が凄く疲れた顔して帰ってきたからビックリしたよ」

「何だよ。それならそうと言ってくれればいいのに」

「……………うるさい」

縁側に座りながら雑談する文、萃香、魔理沙。

魔理沙の言葉にふて腐れながら竹箒を持って掃除に勤しむ霊夢。

「はあ……………それでは私がここに来た意味がないですね……………」

そう言っつて、荷物を運ぶ一人の少女。

霊夢と同じ脇のない白と青の巫女服、緑色の髪に付けているカエルとヘビの髪留め。守矢神社の風祝、東風谷早苗である。

彼女がここにいる理由は、守矢神社に祀られている二柱の山の神、やどかかな八坂神奈子ともじやすわ洩矢諏訪子に浮遊島の異変の解決を命じられたからである。早苗は意気揚々と出発したはいいが、浮遊島へ行く方法が分からず困っていた。そこで、おそらく異変に乗り出しているであろう霊夢の下に訪ねて、力を貸してもらおうと考えたのだった。ちなみに、神奈子と諏訪子が早苗に異変解決を命じたのは、早苗が異変を解決する事で守矢神社に信仰を集める目論見からである。

「異変解決のプロである霊夢さんもお手上げなら仕方ないですね」

「あんだ、私の事を過大評価してない？」

仕方ないと苦笑する早苗に冷汗を流しながら注意する霊夢。

ため息を吐き、霊夢は竹箒を置くと早苗や魔理沙達の前に立ち、発言する。

「それに方法がもう無い訳じゃないわ」

「あー？何か対策が思いついたのか？」

「…あまり使いたく無かったんだけどね……」

魔理沙の疑問に腕を広げやれやれといったポーズを取りながら答える霊夢。

「紫を呼ぶわ」

第一話 序盤『謎の浮遊島』（後書き）

八雲紫を呼ぶ。

彼女を呼ぶ事で、何故、浮遊島異変の解決になるのか？

そして八雲紫の口から語られる、浮遊島の真実。

刻一刻と迫る新たな物語の開幕。

博麗の巫女達は、異世界へと旅立つ。

次回、東方双界伝 〈 Another Fantastic
World 〉

夢幻『もう一つの幻想郷』

白米「サブタイトルはスペルカード風にします」

霊夢「ところで、私達の名前にルビを入れたのは何故？」

魔理沙「そうだけ、付けなくても別に大丈夫だろ？」

白米「……いやね、YouTubeでニコニコRPGの実況プレイ
動画を見たんですけどね……」

全員、東方キャラの名前を間違えまくってやがった……。紫を
『むらさき』って名前だと勘違いした人が特に」（汗）

霊夢「それで私達の名前にルビを？別にいいでしょ、そんな事」

白米「皆、霊夢の事を『悪夢』と間違えたんだけど？」
あくむ

魔理沙「どんな間違いだよ！？そいつら目が悪いのか!？」

霊夢「……ねえ、白米。そのYouTubeユーザーの事、詳しく
教えてくれない？」（ゴゴゴゴゴ）

魔理沙「ヤバい!!霊夢が鬼巫女になりかけている」（汗）

白米「それでは質問等あれば可能な限り全てお答えします。

ただし、ユーザーお一人様につき一つまでです。

それでは、また次回。退避イイイイイイイイ!!!!」（
滝汗）

霊夢「『夢想天生』!!!!」（怒）

ドカーン

第二話 夢幻『もう一つの幻想郷』（前書き）

霊夢「待つていたって声があつた割には評価が乏しいわねえ」

魔理沙「前回の前書きのせいじゃないのか？」

早苗「白米さん、何て事を!？」

白米「そ、そんな事は無い!!」

「と思いたい」（ズーン）

霊夢「東方ファンの中には『ゲームしてない奴は東方を語るな』と考えている人がいるのよ」

魔理沙「嫌われたな、白米」

白米「うるせえエエエエエエエエ!!!」

私の住んでる所はド田舎だから同人が手に入りにくいんじゃない
ああああああああ!!! 私とて東方ゲームやりたいんじゃない
ああああああ!!!」（血涙）

霊夢「ゴメン、言い過ぎた…」（汗）

魔理沙「お前も苦労してんだな…」（汗）

早苗「本音の叫びですね…」（汗）

マジで東方ゲーム全部プレイしたい今日この頃。

第二話 夢幻『もう一つの幻想郷』

「紫を呼ぶ、だあ？」

霊夢の提案に魔理沙は疑問の声を上げる。文も早苗も声に出さないうち、首を傾げている。

「なるほど。すきまの力が……」

萃香はいち早く理解したのか、納得したように呟く。

その呟きに霊夢の提案の意味を理解した魔理沙、早苗、文は同時に手を叩く。

やくもゆかり
八雲紫。

境界を操る程度の能力を持っており、幻想郷誕生に関わった大妖怪である。彼女はすきまと呼ばれる空間の裂け目を使い、自在に出入りしているため神出鬼没である。

彼女の境界を操る程度の能力は物理的な境目だけでなく、常識と非常識、夢と現実、二次元と三次元等との概念的な境目も操る。その力は万物の創造と破壊を司る、まさしく神に匹敵する能力である。すなわち、彼女のすきまの力ならば浮遊島の場所を突き止める事ができ、そこに向かう事が出来るかもしれないということだ。

「でもよ霊夢、どうやって紫を呼ぶんだ？」

魔理沙の指摘通り、紫は神出鬼没で何処にいるかも分からない。まともに捜そうとすれば何年も掛かりそうである。

しかし、その指摘に対し霊夢はとんでもない答えを出す。

「まあね。だからちょっとだけ博麗大結界を緩めるのよ」

「……ええっ!?!」

霊夢の発言に魔理沙達は思わず声を上げる。

博麗大結界は外界から幻想郷を遮断し、尚且つ外界からの人間の侵入を防ぐ重要なものである。…最も、稀に外界から幻想郷に迷い込む外来人がいるし、早苗は神奈子によつて外界から守矢神社ごと幻想郷にやってきている。

とにかく、幻想郷に無くてはならないその博麗大結界を緩めて良いのであるつか……ましてや、結界を管理する筈の博麗の巫女自身が……。

「だから、ちょっとだけ、ちよ……っただけ結界を緩めるのよ」

「まあ、紫を呼ぶにはそれしか方法無いしね……」

魔理沙達の心配そうな眼差しに、霊夢は『ちよ……っただけ』を強調して魔理沙達に念を押す。

紫の友人である萃香もそれしかないと嫌々理解しているのか、顰めっ面をしながらも賛同する。

紫は普段飄々として掴み所が無い性格だが、幻想郷を誰よりもあいしている妖怪である。以前、博麗神社を乗っ取るうと目論んだとある天人に対し怒りをあらわにした事がある。

その為、霊夢は博麗大結界を少し弄れば紫が慌てて駆け付けるのではないかと考えている。

「さて、やりますか」

「…大丈夫なんですか？」

「だからあまり使いたくないのよ」

「まあ、そりゃそうだな」

「仕方ないですね……」

「えええ……」

早速博麗大結界の下に向かおうとする霊夢。未だに納得できない早苗だが、紫の事に関しては早苗よりはよく知る魔理沙と文が霊夢のやや疲労した発言に苦々しく賛同する。まさか自分しか反対する者がいなくなってしまうことに戸惑ってしまう早苗。

そして、霊夢が再び博麗大結界に向かって歩み始めた。

その瞬間、

「わざわざ私を呼ぶ為だけに結界を緩めないで頂戴」

「うひゃう！？」

「」「」「うおわっ！？」

突如霊夢の背後に現れた六十四卦の「萃」が描かれた服を着た女性が、霊夢の肩を掴んで結界へ向かうのを止める。

突然の事に霊夢は妙な悲鳴を上げてビックリし、他四名も大声を上げて驚く。

この女性こそ霊夢達が呼ぼうとした妖怪、八雲紫その人である。

「全く、少し目を離すとんでもない事するのね、霊夢」

「連絡つかないあんたも非があるでしょ」

傘を差し、すきまに腰掛けて霊夢を窘める紫。しかし霊夢は反省するどころか、神出鬼没な紫も非がある事を指摘する。

魔理沙達もうんうんと頷く。

そんな霊夢達の行動にため息を吐く紫。だが、すぐに真面目な顔をする。すると霊夢に尋ねる。

「私を呼んだって事は、あの島の事を知りたいのね？」

「やっぱり何か知ってたのね」

「ええ、勿論。そしてその在り処も」

紫の発言に霊夢達は確信し、文はメモを取りにかかる。

「あの島は幻想郷にも、ましてや外界にも存在しない。

あれは異世界に存在するもう一つの幻想郷と言ったところかしら？」

紫の発言にポカンと放心する霊夢達。次の瞬間、彼女達は紫に次々と質問を出した。

「ちょ、もう一つの幻想郷!?何なのよそれ!?!」

「異世界って、魔界や冥界みたいなものなのか!?!」

「パラレルワールド!?限りなく近く、遠い世界ですか!?!」

「そこってどんな所なんですか!?!何がいるんですか!?!」

「どうやってそこに行けるんだ!?!」

「ちょっと待ちなさい!一遍に訊かれても困りますわ。私は聖徳太子ではないのよ」

東方Project第13弾『東方神霊廟』 Ten Desires.』をよろしく。

え?何でここで販促するのか、て?

さあ、何故でしょう……。

とにかく、紫は霊夢達を落ち着かせて、浮遊島の秘密を説明し始めた。

それは幻想郷が誕生し間もない頃、幻想郷は外の世界から今では『空想』・『迷信』と認識された者達が集まり繁栄していった。しかし、幻想郷を維持する為には、人間と妖怪の数や勢力のバランスが必要だった。均等に増えすぎた人間と妖怪の数に幻想郷は崩壊の危機に陥った。しかし、かと言って人間や妖怪を殺す訳には行かず紫は悩んでいた。

そこで紫は当時の博麗の巫女とある妖怪に相談を持ち掛けた。実は幻想郷誕生の際、紫に力を貸していた紫の幼なじみと言うべき大妖怪がいた。その妖怪はある提案をした。

「何処かにもう一つの幻想郷を作り、今の幻想郷の人間と妖怪の大多数を移住させる」

紫と博麗の巫女はそれに賛同。紫はすきまを使い、もう一つの幻想郷を創るに相応しい世界を捜し出した。大妖怪はその世界に人間の住家と妖怪の住む場所を創り出す。そして、博麗の巫女の説得で異世界に移住する人間と妖怪を集めた。

こうして幻想郷の大多数の人間と妖怪は異世界に住み着き、幻想郷の崩壊は阻止された。

それがもう一つの幻想郷、『むげんかい夢幻界』の誕生である。

その後、二つの世界を同時に管理する事は困難な為、大妖怪は異世界の守護者として、紫と博麗の巫女は幻想郷の守護者としてそれぞれの世界を管理する事にした。

紫は幻想郷の住民に異世界に別れた者達の未練を断ち切る為、記憶の境界を操って忘れさせ、歴史書の記録を行う稗田家にも口外・記録しないよう口止めした。

こうして幻想郷と夢幻界は独立し、幻想郷は現在までにその存在を維持して来たのであった。

） * ）

「幻想郷にそんな事が…」

「てか、阿求の奴は知ってたのか？あの島の正体を」

ひえだあきゅう
稗田阿求。

現在の稗田家の当主である。

「知っていても喋らないわ。私から口止めされていたもの。

まあ、夢幻界が博麗大結界に映し出されたからには、そろそろ口外してもいい頃ね」

「そうよ、まだ訊きたい事があったわ！何で今頃になって博麗大結界にその夢幻界が？」

浮遊島、いや夢幻界の虚像を見て眩く紫に霊夢は今回の異変の原因について問い詰めた。

「それについてはまだ分からないわ。もしかしたら夢幻界に何か異変があつたかもしれない」

そう答えて苦々しい顔をする紫。萃香は心配そうに紫に尋ねた。

「なあ紫、お前の幼なじみの大妖怪って強いのか？」

「強いわ。おそらく、私よりも強い」

紫の発言に霊夢達は驚く。妖怪の中でもかなりの実力者である紫が謙虚する程となると、その大妖怪とは何者であろうか。

「霊夢。今回の異変は今までと比べものにならないと思うわ。それでも、貴女は夢幻界に行く覚悟はある？」

霊夢を真っ直ぐ見て真剣に問い掛ける紫。

霊夢も紫の目を見据え、口を開く。

「何を今更。異変解決は巫女の使命よ」

霊夢は不敵に笑ってお祓い棒を持つと、夢幻界を差し宣言する。

「夢幻界だか何だか知らないけど、異変を起こす奴がいるなら退治するまでよ!!」

「おいおい、抜け駆けはダメだぜ」

「そうですよ。覚悟なら私達にもあります」

霊夢の宣言に火が付いたのか、魔理沙は帽子を被り直しながら箒を掴み、早苗は棒に札を刺したようなお被い棒を持ち、立ち上がる。

「異世界つてのには興味があるしな。私も行くぜ、その夢幻界つての」

「妖怪退治なら私に任せてください　一匹も逃しませんよ!」

それぞれの武器を構えて宣言する二人。

一瞬呆気にとられるも、紫はクスリと笑って鳥居の方に移動すると鳥居の中に巨大なすきまを出現させた。

「貴女達の覚悟は分かったわ。

「このすきまを通れば夢幻界に行けるわ。気をつけて行きなさい」

そう言うと、紫はすきまを出して去って行った。

「さて、行くわよ二人共」

「お」

「はい」

「萃香、悪いけど留守番を頼んだわよ」

「おお、任せろ!何かあったらそっちに駆け付けるからな!」

「分かったわ。

「で、あんたはどつするの?」

意気揚々と張り切る萃香に苦笑し、霊夢は文に尋ねる。

「私は霊夢さんと一緒に行きますよ。記事のネタになりそうですし」
「！」

「あんならそう言うと思ったわ……いいわ、好きにきなさい」

「ありがとうございます！」

「それじゃあ行くわよ。

いざ、夢幻界へ！」

こうして、博麗の巫女、普通の魔法使い、守矢の風祝、そして最速のブン屋が巨大なすきまの門を抜け、夢幻界に向かう。

果して、夢幻界で彼女達を待つ者とは……。

おまけ

幻想郷唯一の山、妖怪の山。

轟々と流れる滝の側で、将棋をしている妖怪が二人。

一人は白い衣を纏い、頭に犬耳……訂正、狼耳が生えた白髪の少女。
白狼天狗の犬走杖。

もう一人は、青い髪のお下げに緑の帽子と青い作業服を着た少女。
河童の河城かわしろにとり。

「はい、これで詰みね」

「シヨボーン……」

にとりの一手により負けてしまい、うなだれる椀。

「く、まだです！もう一勝負！」

「え、まだやるの？」

「まだです！……おや？」

椀が両手を上げてリベンジを申し上げるが、一羽のカラスがこちらに向かっているのに気づく。

「あれは、文様の伝書ガラス！」

「鳩じゃないの？別にいいけど……」

「何でしょう？」

「……うえっ！？」

カラスの足に付いている手紙を読み、椀は悲鳴を上げる。

「どづしたの？」

「いや……浮遊島の正体は『夢幻界』という異世界の島だって事と、

それを今日中に新聞に書いて配れと……」

「異世界？ふん……」

異世界という言葉聞き、何かを考えているにとり。

椛は無視しようかと考えたが、追記に『出来なければ椛の恥ずかしい写真を幻想郷中にばらまくわよ』と書かれていた為、涙を流して落ち込んでいた。

「うっ……にとりさん、手伝ってくれませんか？」

「あ、ゴメン。用事があるから帰るね」

「ちよっ！？にとりさん!？」

薄情者おっ!!!!」

椛は潤んだ目にとりに助けを求めるが、にとりは光学迷彩を使って逃走してしまう。

そして、にとりが走る先は自分の家ではなく、博麗神社の方向だった……。

第二話 夢幻『もう一つの幻想郷』（後書き）

すきまの中を進む霊夢達の目の前に、巨大な門が現れた。

そこは夢幻界への入口、『白亜の大門』。

構わず突破しようとする霊夢達の行く手に、壁の妖怪共を引き連れた少年が立ちはだかる。

次回、東方双界伝 \ Another Fantastic
World .

門番『迫り来る白壁』

白米「紫先生、東方がしたいです……」（血涙）

紫「諦めたら、そこで試合終了よ」（なでなで）

霊夢「まだ引きずってる……」（汗）

魔理沙「白米の代わりに言うが、次回はいよいよ白米のオリジナルキャラが出るらしいぜ」

早苗「それでは引き続き感想・質問・指摘をお待ちしております。

次回も見てください、絶対許早苗」

第三話 番人『迫り来る白壁』（前書き）

白米「東方ゲーム、体験版を少しやってみた感想。

あれをミスらずにクリアした人を私は尊敬します」

ゆっくりれいむ「ふふふ。もっと崇めなさい。敬いなさい!」

白米「ただしゆっくり、てめえは駄目だ」

ゆっくりれいむ「な、何い!?!」

白米「凄いのはお前じゃない。お前を編集した中の人だ!」

ゆっくりれいむ「orz」

第三話 番人『迫り来る白壁』

冥界。

閻魔から転生や成仏を命じられた幽霊が駐留する場所であり、現世とは結界で隔てられていた。昔、何者かが幻想郷から春を盗み、幻想郷に春が来ず雪が降り続く『春雪異変』が起きた。その異変の後、何故か八雲紫が幽明結界を張り直さなかった為幻想郷に幽霊が出没する様になってしまった。

ただし、夏に幽霊を捕まえては冷房代わりに使っている者もいる。幻想郷の住民はたくましいな。

その冥界に広大な日本屋敷、白玉楼があった。巨大な妖怪桜、西行さいぎやう妖を所有するその屋敷に、対談する妖怪と亡霊がいた。

妖怪の方は霊夢達を夢幻界に導いた八雲紫。

亡霊の方は桃色の髪をした水色の着物を着た女性。白玉楼の主にして『春雪異変』の黒幕、西行寺幽々子さいぎやうじゆうしである。

「そう、やっぱりあれは夢幻界だったのね」

幽々子は屋敷の外を見ながら確信したように呟く。紫から夢幻界が浮遊島の正体だという事を聞いて、最初は驚いたが幽々子も浮遊島の正体を薄々気付いていた為それ程衝撃では無かったようだ。

「それで？夢幻界の事を公表する事にしたの？」

「ええ。阿求や慧音にも夢幻界誕生の歴史を解放していいと言っておいたわ。『文々。新聞』のブン屋の天狗も自分の部下を使って新

聞を書かせて配らせているみたいだし。

もう、隠す必要も無くなったわね」

「人間達を悲しませない為とはいえ、紫も悪者みたいな事しちゃったしね」

そう、紫が夢幻界誕生の後に幻想郷の住民の記憶を操作したのは、人間達への配慮である。

妖怪達は精神が強い為、親しい者との別れも乗り越えられる。しかし、人間はそうでは無い。親しい者との別れに悲しみ、未練が残っていた者が多かった。

このまま人間達を幻想郷に暮らせる事は酷だと判断した紫は、苦渋の作として人間達の記憶から別れた者の記憶を消したのだ。生前の幽々子が自分の死を持って西行妖を封印し、彼女が亡霊として白玉楼の主となる数年間、親しい人と永遠に別れてしまう悲しさを知った紫。

しかし、人々の未練により人間が増え幻想郷のバランスを崩さない為にも、人間達に新たな生活をしていける為にも、異世界に別れた人の事を忘れてもらうしか無かったのだ。稗田家に口止めたのは、記録した歴史から辛い過去を思い出してしまう可能性があったからである。

だから、紫は夢幻界の存在を隠し続けた。例え、真実を知った人間達から恨みを一身に受けてしまう結末になるとしても……。

「それにしても……」

外の景色から目を離し、紫の目をジッと見つめる幽々子。気のせい
か、普段のホワホワしている雰囲気からキリッとした雰囲気へと変

わった様だ。

「……………ご飯はまだかしら」

…訂正、いつものホワホワな幽々子だった……。
急にグダアとだらけてハングリー宣言する幽々子に、流石の紫もガクツとコケかけた。

「妖夢。ごごはん……!!」

「は、はい!! ただいま!!」

幽々子のオーダーに白玉楼の庭師、魂魄妖夢こんぱくようむの慌てた声とドタバタした物音がした。

「藍、手伝いなさい」

「わ、わかりました」

そんな幽々子に呆れながら、紫は後ろに立っている自分の式神に命令を与えた。式神、九本の尾を持つ狐の妖獣八雲藍やくもらんは慌てて妖夢の共に厨房へ向かった。

「緊張感が無いわね」

「ご飯食べないと頭が回らないのよ」

ちなみに物を噛むと脳に刺激が入って頭が良くなるらしい……確か。

「今日のおかずはなにかしら。鶏肉が良いわね」

その頃、夢幻界へと続くすきまの中。

「!？」

「文?どうかしたの?」

「いえ、何やら変な寒気が……」

「風邪か?」

「無理しないほうが良いのでは?」

「いや、今幻想郷に行ったらヤバい気がします。特に冥界」

「ピンポイントねえ……」

何か不吉な雰囲気を感じて自分を抱きしめ、当たりを見回す文。幻想郷でも、どこかの夜雀や核の力を操る鳥が文と同じポーズを取ったとか…。

そんなやり取りを行い、すきまの中を進んでいく霊夢達。そして、ある程度進んだ時に早苗がある変化に気付いた。

「前に何かが見えます」

見ると、沢山の目や手など『幻想郷を外界から見たイメージ』といわれるすきまの空間から一変、真っ白な石畳に白い柱と古代ローマを彷彿とした風景が広がった。最も、空は不気味なすきまの空間だったが。

その先に、数百メートルぐらいはありそうな巨大な白い門が現れた。イメージとしてはロダンの『地獄の門』。あれの真っ白くしたようなものである。

え？ロダンって誰だって？

『考える人』の像の作者ですよ。

それってミケランジェロではないのかって？

偉大なる芸術家の皆様に謝れ、愚か者。

話を戻して、その門を見上げ圧倒される霊夢達。傍ら、観光客の如く写真を撮りつづける文。

「でっけえ〜」

思わず口笛を吹いて感心する魔理沙。

「何でしょうかこの大きな門は？」

「私が知る訳無いでしょ。にしても大きいわねえ……」

「『白亜はくあの大門たいもん』。夢幻界の入口で、そこを抜けると夢幻界へ入る事が出来るよ」

「誰!?!」

後ろから自分達の疑問に答える声が聞こえ、戦闘体勢を取る霊夢達。すると、一人の少女がクルクルと回転しながら地面に着地する。その少女に霊夢達は見覚えがあった。

「貴女は、紫の式神の……」

「そう、橙だよ!」

見た目は、赤い洋服に緑の帽子を被った幼女。しかし、頭にはピョコッと猫耳が生えており、黒い猫の尻尾が臀部から二本生えている。化け猫の妖獣ちまね、橙である。

「正しくは、八雲藍様の式神だ!」

「似たようなものでしょ?」

「違う!」

橙の指摘通り、彼女は八雲藍の式神である。即ち、紫にとって橙は『式神の式神』である。

ちなみに、彼女の名前は『八雲橙』ではなく『橙』である。よく問

「違う人がいるが……。」

それはともかく、魔理沙は橙にここに来た質問をした。

「何でお前がここにいるんだ？」

「私は皆さんのガイド役として夢幻界を案内するんだよ」

「ええっ！？大丈夫なんですか！？」

「うん！藍様と紫様から地図とメモを貰ったから大丈夫！」

「（あの親バカ共め……）」

八雲藍は自分の式神の橙を溺愛しているという噂がある。かの『春雪異変』にて橙が霊夢達にやられた事を知ると、報復として襲い掛かった事がある。その後、勝手に霊夢達と戦った事で紫に式神失格としてお仕置きを受け、その様子を射命丸文により『動物虐待』として『文々。新聞』の記事になった事がある。

詳しくはゲーム『東方妖々夢』、書籍『東方文花帖』で。

「まあいいわ。危なくなったら物陰に隠れてなさい。あんたが傷付くと九尾の狐が煩いし」

「む。馬鹿にするな！私は藍様の式神、戦えるもん！」

「はいはい。じゃあ、この門をぶっ壊すわよ」

「えええ！！！！壊すんですか！？」

「まあ先に進むためだ。ちょっと勿体ないが仕方が無い」

役に立てると必死にアピールする橙を軽くあしらい、霊夢は白亜の大門を破壊するべく袖の中を漁る。その発言に早苗は驚くが魔理沙も加勢するかの如く、三二八卦炉を取り出す。

「陰陽鬼神…」

「マスター…」

『WARNING!!WARNING!!WARNING!!WARNING!!WARNING!!』

「な!?!」

「うおっなんだこりゃ!?!」

「これは、警報!?!」

門を破壊しようとする霊夢と魔理沙が構えるとサイレン音と共に警告アラウンド音が鳴り響く。

すると石畳の石が光り、石から壁が競り上がる。その壁に手足が生え、眼が開く。

「ぬりかべだと!?!」

「かなりの数ですよ!?!」

「とか言いながら写真を取ってる場合ですか、文さん!!」

魔理沙と文の言う通り、出現したのはぬりかべと呼ばれる壁の妖怪。しかもその数は五十体はあった。

「気をつけて!こいつらは多分、ぬりかへけいびたい塗壁警備隊。白亜の大門を守る衛兵だよ!」

「名前に捻りが全く無いな!？」

ぬりかべ達は霊夢を睨みつけながら、じりじりと迫って来る。

「白亜の大門を破壊させはしない!」

その場に声が響いたかと思うと、白亜の大門が開いて門の向こうから一人の少年がやってくる。ぬりかべ達は霊夢達に少年の姿をよく見せるかの様に、左右に分かれる。犬の耳を模したような茶色い髪型、額には第三の眼。顔は童顔で、小柄な体系が相俟って幼く見える。白い軽装の鎧を身につけており、手には赤い文字で『十戦』と書かれている巨大な白い長方形の盾を携えている。

まるで、騎士の様な姿をした少年は霊夢達を見据え、問い掛ける。

「女五人だけで、ここに何しに来た?」

「何って観光てとこかな」

「嘘をつくな。この次元の間に普通の人間が来れるはずも無い!」

魔理沙の嘘に惑わされず、少年は霊夢達の目的を言い当てる。

「お前達の目的は、この門を超えて夢幻界に行くつもりだろう」

「あやややや。バレましたか」

「やっぱり。ここを突破しようと思んだ者は皆そうだったからね」

そう言つて少年が右手を挙げるとぬりかべ達が構える。

「掛かれ！」

少年の号令により、ぬりかべ達は一斉に霊夢達に襲い掛かる。

しかし、

「神技『八方鬼縛陣』！！」

「魔符『スターダストレヴァリエ』！！」

「秘法『九字刺し』！！」

「疾風『風神少女』！！」

「鬼神『飛翔韃天』！！」

「な…！？」

しかし霊夢が放った結界、星の弾幕、格子状のレーザー、高速移動

する二人によりぬりかべ軍団は一気に破れ去った。

「呆気ないものね」

「次はあのヘタレっぽい奴だな」

「誰がヘタレか!？」

霊夢達は手を叩き、魔理沙は少年を指差してヘタレ呼ばわりする。ヘタレ呼ばわりされた時、少年の頭に犬耳、尻に尻尾が生えた気がするが気のせいだろう。

「あまり僕を舐めるな！」

壁符『ウォールプレッシャー』!!」

少年が地面に右手を叩き付けると霊夢達の左右に巨大な壁が出現した。

「!?!?皆、この場から離れて!?!」

霊夢の叫びに全員壁の間から離れた次の瞬間、二つの壁がぶつかり合い粉々に崩れて行った。あのまま壁の間に行ったら潰されていた所だった。

「お前達にここを通すわけには行かない!!」『塗壁警備隊』の隊長、まかへしつ真壁剛の名にかけてお前達を倒す!!」

「霊夢、あいつ……」

「ええ。スペルカードを使った」

スペルカードは『妖怪は幻想郷の人間を襲ってはいけない』というルールが出来てから力を失う可能性に危惧した妖怪達の提案により博麗霊夢が定めた『妖怪が人間を襲い易く、人間が妖怪を退治し易く、同時に人間の数も妖怪の数も減らさずに済む平和的な決闘ルール』、スペルカードルールの際用いる宣言札である。人間や妖怪はこの札で次に行う技を宣言し、自身の能力を用いた弾幕を放つのである。

ちなみに技を宣言する為に使う札なので、スペルカード自体には力はない。霊夢が魔理沙の『恋符』のカードを使ってもマスタースパークを撃てないのと同じである。

能力にもよるが、殺すための弾幕ではないので先程霊夢達に倒されたぬりかべ達は生きている。念の為。

それはさておき、『紅霧異変』より以前に霊夢が定めたスペルカードルールを夢幻界の少年が使ったのである。疑問に思った霊夢は少年に問い掛ける。

「あなた、何でスペルカードが使えるの？」

「……本来なら不審者に話す事は無いけど、仕方ない。」

このスペルカードというものは、一年前に夢幻界にやってきたあの女性が広めたんだ」

「ある女性？」

「うん。名前は確か……」

魅魔：だったかな？」

「っ!？」

真壁が言った女性の名前に魔理沙は驚きを隠せなかった。

数年前に突然姿を消した自分の魔法の師匠が、夢幻界に来ていた事を……………。

おまけ

冥界、白玉楼

「本日の昼食は和風ローストチキンでございます」

「わお」

妖夢の発言に文を始めとした鳥の妖怪達にまたもや悪寒が広まったとか。

第三話 番人「迫り来る白壁」(後書き)

壁が 壁が 壁が迫って来る。

壁を次々と作り出す真壁の猛攻に、霊夢達は追い詰められていく…。果して、霊夢達は真壁を倒すことが出来るのか？

次回、東方双界伝 Another Fantastic World.

『白壁の守護者』

霊夢「白米、何であつちもスペルカードを使えるようにしたの？」

白米「自分と相手と同じ条件で戦えないとフェアでは無いでしょ。例えるならカービィに剣を渡すメタナイトみたいな」

魔理沙「でもあれ、作品によっては無視できるけど……」

白米「細かい事は気にするな、旧作の貴女のように」

魔理沙「ファイナルスパーク!!!」(怒)

白米「ぎゃあああああああ!!!」

霊夢「他人の黒歴史に触れるから……」

早苗「今回、最初の白米さんのオリキャラが登場しましたね」

霊夢「ああ、あのヘタレね」

真壁「誰がヘタレか!」

霊夢「ん」(原稿を)

真壁「何これ?」

霊夢「オリキャラ集に載せる予定のあんたの設定(執筆途中)」

真壁「……」(愕然)

霊夢「これを見ても自分がヘタレじゃないとでも?」

真壁「orz」

霊夢「しかもイメージCVが碇シンジの中の人。もはやレミリア抜きでも運命としか言いようが無いわ」

真壁「うわあああああ!!!」(泣)

早苗「虐め過ぎでは……」(汗)

霊夢「やり過ぎた……」(汗)

魔理沙「ぜえ、ぜえ、全く……」。

と、引き続き感想・質問・指摘を待ってるぜ。ただし荒らし、てめえはダメだ。

次回を見てくれないと、お前の大切な物を私が死ぬまで借りてくぜ」

第四話 『白壁の守護者』(前書き)

真壁との弾幕勝負に決着がつきます。

そして、いよいよ白米オリキャラ五人衆の1人が最後に登場します。

それでは、本編をどうぞ。

第四話 『白壁の守護者』

「お前、今『魅魔』って言わなかったか!？」

魔理沙は珍しく取り乱し、真壁に質問攻めをする。

「そいつは今何をしている!?!今も夢幻界にいるのか!?!」

「魔理沙、危ない!！」

霊夢が魔理沙を引き寄せると、魔理沙がいた場所に壁が挟まって来た。

「もうお前達と話す事はない。一気に終わらせてやる!」

そう言っつて真壁はスペルカードを取り出す。

「壁符『連続版ウォールプレッシャー』!！」

「うおおおお!?!」

魔理沙は真壁の押し潰し攻撃を避け続けた。

逃げた先に新たな壁が作り出されて押し潰しに来る為、安住の地が無いに等しかった。

真壁が魔理沙に集中している間に、霊夢が壁の合間を縫うように飛び狙いを定める。

「そこ!！」

「甘い!!」

霊夢は隙を見つけ、真壁に向かって札を飛ばす。真壁はそれに気づき、壁を出してそれを防ごうとする。

しかし、札は壁を避けるように飛行し再び真壁を襲う。真壁は持っていた『十戦とおせんノ盾のたて』で札を防ぐ。

「誘導式か!? 厄介な」

冷汗をかき、真壁は霊夢を警戒する。

「『飛翔韋駄天』!!」

その隙を突くべく、橙が突貫してきた。しかし真壁が作り出した壁に阻まれてしまい、真壁は更に文の周囲にかべを作って閉じ込めてしまう。

「にゃっ!?!」

「壁符『八方塞がり』」

「あややや!?!でも、見切った!?!」

そついうと文は上に向かって飛ぶ。

「所詮は壁。上から飛び越せば……へぶっ!?!」

勝ち誇った様な文の台詞が鈍い音と共に遮られ、文が閉じ込められ

た壁の中から何かが落ちる音がした。

「壁から壁を作り出すことも出来る。つまりは天井だけどね」

見ると、四方を塞いだ壁から天井が作られていた。壁が崩れると、中から頭にたん瘤を作って気絶した文がいた。

「（あれは飛ばなかったら避けれたわね）」

霊夢は呆れながら、真壁のスペルカードの攻略をする。

弾幕勝負では相手が絶対避けられない弾幕を撃つのは暗黙の了解で禁じてになっている。紅魔館の主であっても、白玉楼の亡霊であっても、閻魔であっても撃つ弾幕に回避方法がある。

真壁の壁符『八方塞がり』は霊夢の言う通り、壁の中でじっとしていれば壁が崩れて脱出出来る様になる。無理矢理出ようとすれば、文の様に天井に頭をぶつけてしまうのだ。

「だああああ！！まどろっこしい！！！」

そう言つて魔理沙は懐からミニ八卦炉を取り出すと、壁の向こうにいる真壁に向ける。

「こんな壁、こいつで吹き飛ばす！！！」

八卦炉に魔力が溜まり出し、真壁はそれに気付く。

「あの魔力、あれを受けたらヤバイ！！！」

真壁は魔理沙の次の技に対抗するべく、自分と魔理沙の間に大量の壁を敷き詰める様に作り出す。

「行くぜ！！恋の魔砲、恋符『マスタースパーク』！！！」

次の瞬間、八卦炉から極太のレーザー光線が発射され、壁を貫きながら真壁に迫る。

「くっ、防ぎきれない!？」

最後の壁が破壊されると同時に、咄嗟の判断から十戦ノ盾でマスタースパークを防ぐ真壁。

「ぐっ……うわあああっ!？」

しかし、防げたのは最初の数秒まで。あまりの威力に真壁は吹き飛ばされる。マスタースパークはそのまま白亜の大門に直撃し、門の扉が全開になる。

「へへっ……どんなもんだい！」

「相変わらず無茶するわね……。まあ良いわ、門も開いた事だし通るとしましょう」

「結局、私達何もしてないですね」

「弾幕勝負中出番が無かった私に比べれば、お二人共まだ良い方で

すよ……」

「じゃあ……」

目のハイライトが無くなり、嘆く文。その文のたん瘤を手当てしながらも、黒いオーラが全身から出ている早苗。

そんな二人を見て、ただ鳴き声しか言えなくなった橙であった。

その頃、マスタースパークに吹き飛ばされた真壁は。

「そんな……十戦ノ盾が……」

マスタースパークに耐えられなかったのか、見事に破壊された盾を見て絶望する真壁。

見ると霊夢達は文と早苗を慰め、白亜の大門を通ろうとしている。

あのままでは見す見す霊夢達を夢幻界へ通してしまう。

「冗談じゃない……このまま彼女達を通したら、刃が……」

真壁の脳裏に黒い忍装束を着込んだ人物の姿が浮かんだ。

『真壁、拙者が到着するまで白亜の門を頼んだぞ』

その忍者がそう言ったのを思い出し、立ち上がる真壁。

そう、霊夢達を閉じ込めた壁は迷路の様に入り組んでいた。しかも御丁寧には足元には迷路の地図があった。

「舐めてるのかしら…こんなものどこが弾幕よ」

「紅魔館にこんな弾幕を撃つ奴がいるんだがな……」

魔理沙の台詞に、どこぞの吸血鬼が可愛らしいくしゃみをしたとか。

「馬鹿馬鹿しい。のんびり出口を捜しましょう」

「……そうのんびり出来ないみたいですよ？」

危機感が無い霊夢に早苗は後ろを見て否定する。

見ると、背後からトゲの付いた壁が迫って来ていた。

「……逃げろおおお！！！」

魔理沙の悲鳴を合図に走り出す霊夢達。しかし、この迷路は霊夢達が角を曲がる度に新たなトゲの壁が現れ、再び迫って来る様になっている。

「ねえ、これって行き止まりにぶつかったらアウトだよね!？」

「怖い事言わないで下さいよ橙さん!!一瞬想像してしまっただじゃないですか!？」

最悪の結末を予感する橙に文は顔面を蒼白させる。

「魔理沙さん、またマスターパークでこの迷路を壊してくださいよー!!」

「チャージしてる間に串刺しになるわ!!
なあ霊夢、そっちで合ってるのか!? 頼むぞ、行き止まりになつてたら一生恨むぞ!!」

「何よ!! 疑うなら別の道を選びなさい、魔理沙だけ!!」

「運が良くて勘が当たりやすい霊夢だからこそ頼りにしてんだよ!!」

「だったら何も言わずについて来なさいよ!!」

よくもこの状況で喧嘩できる二人だ。

早苗はそう思い、汗をかいた。

霊夢の勘が働いているのか今のところ行き止まりに当たっていない。しかし、何時までも走りつづけては埒が明かない。出口を見付けなければ、何時かはトゲの壁の餌食となってしまう。魔理沙達は、異変をも察知してしまう。霊夢の勘に賭けてひたすら霊夢の後を追った。

そして遂に

「出口だー!!」

「何っ!?!」

何と本当に勘だけで迷路を突破してしまった霊夢達。

まさか突破されるとは思わず、愕然する真壁。それが一瞬の隙を生んでしまった。

「宝具『陰陽鬼神玉』！！」

真壁は霊夢が放った巨大な陰陽玉により、壁を作る暇も無く吹き飛ばされてしまった。

「とんだ足止めを食らったわ……全く」

真壁が気絶している事を確認し、安堵して悪態をつく霊夢。

「なあ、この先にこいつみたいにスペルカードを使う奴がいるのかも知れないな」

「しかし、こちらとしても都合いいですよ。いつも通りに戦えば良いのですから」

爪先で真壁を蹴りながら魔理沙は門の向こうを見る。文はその様子を撮影する。真壁、哀れ……。

不憫な扱いされている真壁に心の中で合掌しつつ、早苗は橙に質問する

「……橙さん、門を抜ければ何があるんですか？」

「紫様の話が正しければ、この先には海があるらしいよ」

「「「海!?!」」」

「うん。夢幻界には海があつて、結界に映っている島に行くには海の上に建てられた石橋を渡って行かなければならないんだって」

橙の言葉に霊夢や魔理沙、文は声を上げる。幻想郷には海が無いため、3人は初めて見るかも知れない海に心を踊らせる。

「さて、門番も倒した事だし、このまま異変を解決させるわよ!」

そう言つて霊夢達は白亜の大門を抜け、その向こうにある光に向かって突き進む。

「いざ、夢幻界へ!」

おまけ

「真壁がやられたか……相手は相当の手練れの様だな」

白亜の門の上に、先程の戦いの一部始終を見ていた人物がいた。全身を黒装束で身に纏い、顔を包帯で隠した忍者が門を抜けていく。霊夢達を見届けた。

「案ずるな真壁、後は拙者に任せて暫し休息するがよい」

忍者は両手に鎌を持ち、姿勢を低くする。

「かきなりやいば風鳴刃、これより任務を開始する」

次の瞬間、忍者の姿は一陣の風と共に消えていた。

第四話 『白壁の守護者』（後書き）

すきまを抜けると、そこには広大な海が広がっていた。

潮風に心地よい気分になりながら、大陸を目指す霊夢達を襲つ一陣の風。

刹那に閃く凶刃に、霊夢は勝つ事ができるのか。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

風刃『風を切り裂く者』

白米「かなり強引に終わらせてしまった感がありますが、今の私の技術ではこれが精一杯……」

霊夢「ねえ、大丈夫なの？ちゃんと完結させられるの、これ？」

白米「微妙……」

魔理沙「駄目だこりゃ……」

刃「次回、拙者が登場するにも関わらず、肝心の作者がこの気力では先が思いやられる……」

真壁「そうなの？」

刃「白米の返事に『微妙』が出たら、危険地帯の一步手前に来た合図だからな」

真壁「ちょ、まだ序盤何だけど!？」

刃「見切り発射が裏目に出たな……」

魔理沙「と、とにかく引き続き感想・質問・指摘、作者への応援等を待ってるぜ!!」(汗)

第五話 風刃『風を切り裂く者』（前書き）

東方双界伝での弾幕勝負のルール

- ・被弾して相手がノックアウトしたら勝ち。
- ・被弾しても相手が健在ならバトル続行
- ・ギブアップあり

白米「何度も言いますが、これは東方の二次創作小説です。原作と違うところがあるのは表現の為、目をつむってください。私はZU N氏では無いのですから」

第五話 風刃『風を切り裂く者』

白亜の大門の門番、ぬりかべの真壁を退けた霊夢達。

白亜の大門を抜け、彼女達の目の前に飛び込んで来たのは

青く輝く広大な海と地平線の向こうに見える目的地の島だった。

「ひゃー、すげえ。これが海か」

「私も実際に見るのは初めてですね。霧の湖より広いです……」

初めて見る海に魔理沙と文ははしゃいでいた。ご存知の通り幻想郷には海が無い為、森や山で育った彼女達には珍しい光景かもしれない。

「塩の香りがするわね。これが全部塩水なのかしら」

「あーそういえば。焼き魚が食べなくなっちゃった……」

「んー。幻想郷に来てからというもの、何か懐かしく思えてしまいます」

知っている方もいるだろうが、東風谷早苗は外界から幻想郷にやって来たので、当然ながら海に来た事はあるのだろう。

「私も紫様の力で藍様と一緒に来た事があるよ。
まあ、水に濡れると式が外れるから泳がなかったけど……」

そもそも、猫科の動物は元々水が苦手である。虎は平気みただが。

「はっくちゅん！」

「ご主人、風邪か？」

「うう…それよりナズーリン、宝塔は見付かりました？」

「山梨名物の『ほうとう』なら……」

「うーまーいーぞー」

って、駄目でしょコレ！ニコニコ動画ネタではないですか！？しかも違いますしー！「

「ご主人、メタ発言……」

以上、命蓮寺の虎と鼠のやり取りであった。

所変わって夢幻界の海の上。

霊夢達は、地平線の向こうに見える目的地に向かって進んでいた。

「しかし、入口に警備があるからここにも見張りや番人がいると思
ってましたが、そんな事はありませんでしたね」

「まあ、無いなら無いで進みやすくなっているからいいけど」

進みながらそんな会話を交わす文と魔理沙。

実は橋の床にもぬりかべが隠れているのだが、何分隊長を倒してし
まった侵入者である。敵わないと思っ出て来ないのである。
部下誰一人も敵討ちに来ないとは、真壁剛、ますます哀れである。
死んでないが。

しかし、

「ん？」

「どうした、文？」

「いえ、何か風が……」

微妙な空気を感じて文が立ち止まり振り向く。

その時、一陣の風が霊夢達を襲う。

「「「きゃああっ!?!」「」「」

「うー。何よ今の風」

……つて、えっ!？」

霊夢は驚く。彼女の服が、まるで刃物を当てられたかのように切られていたことに。よく見ると、魔理沙達他の4人もそうだった。

「なんじゃこりゃー!！」

某殉職刑事のような叫び声を出す魔理沙。

ちなみに言っておくが、切られたのは主に服の袖、肩、背中であり、スカートは数ミリスリットが入っただけである。
エロい有様を想像しない様に、悪しからず。

そんな彼女達の行く手に疾風と共に黒い影が現れた。

「……」

黒い短髪。顔を包帯で隠しており唯一露出している黄色い眼が霊夢達を睨み付けていた。

鎖帷子の上に、闇に溶け込むかのような黒装束を身に纏い、肌を一切露出させてない。

その姿はまさに、日本が誇る暗殺・スパイのプロフェッショナル、忍者と呼ぶに相応しい姿であった。

いきなりの忍者の登場に驚く霊夢達。
…中にはそうでない者が約2名

「な、こいついつの間…!?!」

「おいおい……騎士の次は忍者かよ。次は紫の龍騎士か？」

「わあゝ。私、初めて見ましたよ本物の忍者！」

「喜んでいる場合じゃないよ早苗さん!!多分さっきの風はこの忍者の仕業だよ！」

「おお、汚い。流石忍者汚い」

「……」

そんな霊夢達に対し、無言で立ちはだかる忍者。一切喋らない分かって不気味である。

そんな沈黙に痺れを切らした霊夢は忍者に問い掛ける。

「あんた、ここの番人？」

「……」

「…私達の服を切り裂いたのは、あんた？
だとしたら変わった趣味してるじゃないのよ、このドスケベ」

「……………」

「…私達に何か様があるの？
無かったら、そこを通して欲しいんだけど…」

「……………」

「…何か言いなさいよ……………」

「……………」

「……………」

ピキツ、と沈黙を貫く忍者に堪忍袋の緒が切れた霊夢は、袖の中から陰陽玉を取り出すと、それをまるで某スポ魂野球アニメの様な全力投球フォームで忍者に向かって投げ付けた。

しかしスパツと一閃が閃くと、陰陽玉は忍者の目の前で真っ二つになつて忍者の脇をすり抜けていつてしまった。

「な、ええええ！？」

余りの出来事に驚く霊夢。後ろの方で魔理沙達がざわざわ言い出す。

「おい、今の見えたか？」

「いえ、霊夢さんの陰陽玉が突然真っ二つになつた所以外は何も……………」

「…じゃあ……………」

「…一瞬でしたが、見えました」

そう何時になく真剣な表情で文が呟く。

「あの忍者はとてつもない早さで、手にした鎌で霊夢さんの陰陽玉を両断したのです」

文の言葉によりよく見ると、確かに忍者の手には草刈りに使用されるような鎌が握られていた。いつの間に手にしたのであるうか……。

「あの鎌で私達の服を切り裂いたんですか!？」

「でも、だったら何でさつき私達を斬らなかつたんだろっ…」

橙が指摘した様に、侵入者を撃退するのならば服だけでなく霊夢の身体も傷付けた方がいいはずである。

「…さつきの警告だ」

「うわっ、やっと喋った…」

橙の疑問に答える様、漸く口を開いた忍者。

「名乗りが遅れたな。

拙者は風鳴刃^{かざなりやいば}。ある者に雇われ、ここにやって来る不屈き者を始末しに来た」

忍者、風鳴刃は名乗りを終えるとスペルカードを取り出す。

「忍符『颯手裏劍』」

スペルカードを宣言し、何処からともなく大量の手裏剣を真横に向かつて投げ付けた。

スカカカッ

「ひゅいつ!?!」

すると何も無かった空間から悲鳴と共に少女の姿が現れた。青い作業着に緑の帽子を被り、背中にリュックサックを背負った青い髪の少女。それは妖怪の山に住む河童、河城にとりであった。

「な、何で分かったの!? 光学迷彩で見えない筈なのに」

「如何に姿が見えずとも、気配で分かる」

自慢の光学迷彩が見破られて姿を現したにとりに、霊夢は驚いて尋ねる。

「にとり!? 何であんたが此処に?」

「あ、霊夢。いやあ、文が椀に渡した夢幻界の記事を見て、夢幻界の技術がどんなものか見てみたかったもんで……」

「にとりらしいな……」

「と言うより文さん、いつの間に……」

にとりの回答に魔理沙と霊夢が苦笑し早苗は文に冷たい視線を送る。それに対してウザい顔をして目を逸らす文。

そんな霊夢達に向けて、刃は新しいスペルカードを宣言する。

「暗器『苦無時雨』」

今度は両手にクナイを持つと、その場で高速回転しながら飛行する刃。すると霊夢達に向かつて大量のクナイが雨の様に降ってきた。

「「「ぎゃあああああ!?!?」「」」

霊夢達は悲鳴を上げながらクナイの雨から逃げ続けた。時折、地面に当たって跳ね返って来るクナイもある為、かなり危険だった。

反撃として霊夢が封魔針、魔理沙がスターダストレヴァリエ、にとりがお化けキューカンバーを撃つが、回転する刃に全て弾き返されてしまった。

「だあああ!?!?埒が明かねえ!?!?」

魔理沙はミニ八卦炉を取り出し、魔力を集中させる。

「マスタースパーク!?!?」

ミニ八卦炉から発射された極太のレーザーが刃を捕らえた

かに見えた。

カランツと音を立て、黒焦げた丸太が落ちてきた。

刃の姿が見えなくなっている。

「な！？あいつは何処に……？」

「忍符『飛驒の魔風神』」

魔理沙は後ろに気配を感じて振り返るが、

「遅い！」

「ぐあっ！？」

直後に突風と共に閃く鎌が魔理沙を襲った。

余りの速さに対処出来なかった魔理沙の身体から鮮血が飛び散る。

「魔理沙さん……！」

「うぐっ……卑怯過ぎるだろ変わり身の術なんて……」

早苗は慌てて魔理沙を治療し、魔理沙は刃に悪態をつく。

「拙者は忍びの者。影に隠れて敵を討つ、当然の事だ」

そう言うと刃はある物を見せた。

「敵の武器を奪うのもまた、造作もない事」

「つて、あー！？私のミニ八卦炉！？」

刃は上に放り投げてキャッチするとミニ八卦炉を魔理沙に向ける。

「…ふむ。私には使えないようだな」

そう言うと刃はミニ八卦炉を懐にしまう。

「つて、返せよ使えないなら！！泥棒！！」

「断る。敵に武器を返す程、拙者は愚かではない。
寧ろ、貴様の方が何故か泥棒の臭いが漂う」

「」「まあ、それは確かに……」「」

「おいこらお前ら！？」

魔理沙は即座に詰め寄るが刃が正論(?)を言い、霊夢達はそれに共感してしまう。

「いいから返せ」

そうやって魔理沙は刃の胸倉を掴もうとした。

「つて………?」

しかし刃の胸辺りを触った瞬間、魔理沙の動きが止まった。

「え？え？え？」

魔理沙は信じられない様な驚愕した顔で刃の顔と胸を交互に見る魔理沙。当の刃は（包帯してわかりにくい）無表情だが……。

「え？お前、まさか……」

「……刃符『居合千裂斬』」

魔理沙が恐る恐る訊こうとするが、刃は新しいスペルカードを宣言し、魔理沙に鎌による高速の居合斬りを繰り返す。

「ぎゃあああああ！！？」

咄嗟に回避するが、何回か掠ったのかまた鮮血が飛び散る。

「ど、どうしたのよ魔理沙。貴女らしくもない」

「いやー、何て言うかその……」

霊夢達の下に滑り込みながら逃げてきた魔理沙は、とんでもない事を口走る。

「あいつ、女じゃね？」

「「「はあああああああああああああああ！！？」「「「

魔理沙の発言に霊夢達は一斉にシャウトした。
そして文は魔理沙に問い掛ける。

「え？なんで女だと思ったんですか？」

「さっき胸倉掴もうとして胸触っちゃったら、すげえ柔らかかった……」

魔理沙の発言に、霊夢達は一斉に刃の方を見る。

「如何にも、拙者は女だ」

アツサリと認めた刃は未だに霊夢達が信じられないと言つような顔を見て、怪訝な表情を浮かべる（包帯で顔が見えないが）。

「信じられないのなら、これを見よ」

そう言つて刃は自分の胸元を掴むと、

バツ

と、広げて自身の大いなる実りをさらけ出した。

突然の行動に霊夢達は顔を真っ赤にして吹き出してしまふ。

「くくぶー！！？」

「ちよ、あんた何やってんの！？／／／」

「うわ…藍様より大きい……／／／」

「子供は見ないで下さい／＼」

「これは写真……撮ってもいいのでしょうか？／＼」

「撮っちゃダメだから、文！／＼」

「何ならば、此処も見せるが？」

「待てえええ！？そこは18禁の領域だあああ！！！／＼」

「誰かー！！あいつを押さえなさい！！！！／＼」

まさに、少女混沌中。

「そこまでよ！！」

「どうしたのですか、パチユリー様？」

「いや、何故かこう言わなきゃいけないような気がして……」

以上、紅魔館地下大図書館の魔女と小悪魔のやり取りであった。

場面を戻し、服装を直す刃にせえせえと息を荒くしている霊夢達。

「何やら誤解を招きそうな場面だな」

「……誰のせいだと思ってる！！！！」

人事の様にボソリと呟く刃に一齐にツツコミをいれる霊夢達。

「改めて名乗ろう、拙者は風鳴刃。雇われの忍をやっている鎌鼬だ」

刃の正体を知り、早苗は驚き、霊夢は納得した。

「鎌鼬って、つむじ風と共に現れて鎌で人を切り付ける妖怪ですよ
ね……」

「成る程、居合の要領で鎌から斬撃を飛ばして来たのね」

「左様。拙者の能力は『真空波を起こす程度の能力』。

鎌から放たれる真空の太刀を貴様らは見抜けるかな？」

そう言つて刃は新しいスペルカードを取り出し、宣言する。

「怪奇『青梅の首斬り暗殺者』」

発動した瞬間、刃は霊夢の目の前に瞬間移動し、首筋を狙って鎌を振り下ろす。

しかし霊夢は札を盾にして結界を張り、鎌を防いで刃を吹き飛ばす。

「…よく防いだな」

「スペルカードの名前で首を狙った攻撃だと分かったわよ。ちよつと危なかつたけど……」

霊夢は冷汗をかいて首を押さえる。よく見ると首にかすり傷ができています。

「ならばこれはどうかな？

□寄せ『吸血飯綱』！！」

刃は包帯を緩めてスペルカードをくわえて宣言し、両手に巻物を持って突き出す。開かれた巻物から二匹の鎌をくわえた魃の妖怪が出現し、霊夢達に斬り掛かる。

「水符『河童のポロツカ』！！」

「鬼符『赤鬼青鬼』！！」

しかし、魃達はにとりと橙の弾幕によって撃ち落とされる。刃は包帯を巻き直し、次のスペルカードを取り出す。

「くそつ！攻撃したいが相手の方が早過ぎる！！

私もミニ八卦炉を盗られたからな」

歯痒そうに自分の掌を見つめる魔理沙。

「刃符『居合千裂斬』！！」

先程魔理沙に使用したスペルカードだが、今回は刃が鎌を振る度に真空波が霊夢達に向かって飛んで来る様になっている。霊夢達は攻撃を中断し、回避に専念する。

「む?」

ここで刃はある事に気付く。

「（巫女が二人に魔法使い、化け猫に河童……。もう一人は何処に……）

!?!?!まさか!?!」

文がない事に気づき上を見上げる刃。

「『風神少女』!?!」

「うごああっ!?!」

高速移動した文の攻撃に初めて被弾した刃。地面に叩き付けられ、思わず声を上げる。

「文!?!」

「霊夢さん、ここは私に任せて下さい!」

霊夢達の前に文が立ち上がる。

「素早い相手なら、私の出番です!」

「そうか！幻想郷一の素早さを誇る文なら、あの忍者に対抗出来るかもしれない」

「文、大丈夫？」

「平気ですよ。もしこの戦いが終わりましたら最高の新聞をお届けします！」

「文さん、それ死亡フラグー！！！」

「不安だ……」

「じゃあ……」

一抹の不安を醸しつつ、刃と対峙する文。
刃はヨロヨロと立ち上がり、文に名前を訊く。

「拙者に一撃を与えるとは……」。

問おう。貴様の名は何と申す？」

「幻想郷の最速ブン屋、清く正しい射命丸文です。種族は烏天狗」

「…成る程、風を操る天狗の一員か。

相手にとって不足なし！！」

文の名乗りを聞き、不敵に笑う刃。お互いに構え、相手を見据える。

「いざ、参る……」

こうして、幻想郷の烏天狗と夢幻界の鎌鼬が激突した。

果して高速の果てに勝つのはどちらか。

第五話 風刃『風を切り裂く者』（後書き）

片や、幻想郷一の最速ブン屋、射命丸文。

片や、夢幻界を駆ける黒い疾風、風鳴刃。

風を操る二人の妖怪が対決する。果して勝つのはどちらか。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World.

旋風『烏天狗 対 鎌鼬』

魔理沙「前半ギャグと思いきや、後半マジシリアスって何だこの落差!？」

白米「刃はマジになるとこれだけ恐ろしい事を表現する為とはいえ、流石の私もこれはひどい」

霊夢「書いてんのは、あんたでしょ!！」

白米「許してヒヤシンス」

早苗「日常……」（汗）

白米「なお、早苗が回復役になっているのは同人ゲーム『東方蒼神縁起』の影響です。

原作の早苗は回復技は使えません、多分」

第六話 旋風『烏天狗 対 鎌鼬』（前書き）

最初に。

この小説では、アリス・マーガトロイドと旧作のアリスを同一人物とします。

また、スペルカードの表現が原作と違う場面がありますが、それは同じスペルカードでも作品によっては形状が違う事が原作でもあるという事を頭に入れて下さい。

例えば魔理沙のスターダストレヴアリエが、『萃夢想』や『緋想天』といった黄昏の方では箒に乗って突撃する様になっている。そういう感じでスペルカードの表現が原作と違っていると御理解して、広い心で読んでくださるとありがたいです。

それでは本編をどうぞ。

第六話 旋風『烏天狗 対 鎌鼬』

冥界 白玉楼

妖夢が運んできた食事を食べる幽々子と静かに茶を啜る紫。
そこへ、藍が紫の元に現れる。

「紫様に会いたいと、お客様が現れました」

「私に？」

藍が傍に避けるとある人物が入ってきた。

銀色の髪をアホ毛の様に縛り、赤い服を着た女性が穏やかな笑みを
浮かべていた。

「あら。これはこれは、魔界の神様が冥界に何のご用かしら？」

そう、彼女は魔界出身の神、神綺しんきである。かつて魔界から魔物が幻想郷に送られて来る異変が起きた時、霊夢達と戦った事がある。最も、その時の異変とは全く関係なかったが……。

「あら、神が冥界に来てはいけないと誰が決めたのかしら？」

「確かにね。最近じゃ、守矢神社の神達もよくお花見にやってくるし」

神綺の発言に幽々子は苦笑して肯定する。

「本当は私なんかが出向く事じゃないんだけど、ある人から伝言を預かってね」

「伝言？」

「ええ。」

夢幻界の守護者、黄麒おうきからね

「!？」

神綺が告げた名前に、紫は顔色を変える。

「紫。黄麒おうきって、夢幻界で別れた貴女の幼なじみの名前じゃない」
幽々子の発言に妖夢と藍は驚く。

黄麒。

それこそが夢幻界の創造の際に、紫と当時の博麗の巫女と協力した大妖怪の名前である。

柄にも無く、驚愕に青ざめて身体を震わせた紫だったが、深呼吸して落ち着かせると神綺に尋ねる。

「……黄麒は、何て？」

「『約束の時、まもなく来たる』って言ってたわ……。
私には何の事だか分からないけど」

「『約束の時』……?」

最初は首を傾げた紫だったが、思い出したかの様にハッと頭を上げる。

「…だとしたら、今の霊夢達では荷が重いわね……」

「紫様？」

「藍、ついて来なさい」

紫は立ち上がってすきまを開き、入っていく。藍は慌てて後に続く。

「あの慌てよう、どうやらただ事じゃなさそうね」

「確かに」

「妖夢」

「は、はい！」

紫の行動に、ただならぬ雰囲気を感じた幽々子は妖夢を呼ぶ。

「博麗神社に夢幻界に向かえるすきまがあるわ。夢幻界に行つて博麗の巫女の手助けをしなさい」

「わ、分かりました」

そう言つて身支度をしようとする妖夢に、神綺が声をかけた。

「行くのなら、入口でアリスを待たせてあるわ。彼女も連れていっ

「てあげてね」

「はい！」

こうして、新たに夢幻界へ向かう少女がまた二人現れた。

夢幻界

海の上に建てられた石橋でぶつかり合う二つの風があった。

一方は天狗の扇を持ち、高速に飛び回りながら弾幕を発射する烏天狗。幻想郷のブン屋、射命丸文。

もう一方は両手に鎌を持ち、忍具や居合斬りで文に迫る鎌鼬。夢幻界の雇われ忍者、風鳴刃。

風を操る二人の最速がぶつかり合い、周囲に嵐が巻き起こる。

その様子を下から見守る霊夢達。

「文さん、大丈夫でしょうか？」

「さあな。相手は文にも負けない程のスピードの持ち主だ。もしかしたら…」

「大丈夫よ」

文の事を心配する早苗と魔理沙に、霊夢は座布団に座ってお茶を啜りながら諭す。

「文はあんな奴に遅れをとる程弱くはないわ。私達がそれをよく分かっているじゃない」

「そうだよ。私は信じているさ、文の勝利を」

にとりも霊夢の隣で同じくお茶を啜り、文の勝利を信じる。

「文さんが自分から任せてくれたこの勝負。今私達ができるのは文が勝利するのを待つだけだよ」

橙は弾幕勝負で起こった風に、帽子が飛ばないように押さえながら上空の勝負を見守る。

「……そうだな。風を操る文が、鎌鼬に負けるはずが無いな」

「ええ、私も文さんを信じましょう」

霊夢達の文に対する信頼に、魔理沙と早苗も信じて待つ事を決心した。

「ところで、何処から出した座布団と湯飲み」

「シッコミが遅いわよ」

上空

「岐符『天の八衢』！！」

「正面ががら空きだ！！」

刃は文に向かって手裏剣やクナイを飛ばすが、文は高速飛行でそれを躲す。また文は弾幕を刃に向かって撃つが、刃の鎌で弾幕は打ち消されてしまう。

「鎌風『殺人扇風』」

刃はスペルカードを宣言し、両手に鎌を持ち高速回転して文に迫る。

「ならば、風符『風神一扇』！！」

文もスペルカードを宣言し、天狗の扇を取り出して大きく扇ぐ。扇がれた風は強風となり、刃を襲う。この風により、刃は体勢を崩してしまう。

「甘い！刃符『くふうのおおかま颯風の大鎌』！！」

しかし刃は体勢を立て直し、鎌を振って巨大な真空波を放つ。真空波は強風を切り裂き、文に向かって飛んで来る。

「風神『風神木の葉隠れ』！！」

文は大量の木の葉を出して姿を晦ます。

このスペルカードは本来、広範囲に撒き散らした木の葉を相手に当てる弾幕であり、発動した文自身は姿まる見えである。

今回は刃が放った真空波を避ける為に回避用となっている。所謂、喰らいボムの様なものである。

原作東方をプレイした事がある読者の皆様、「本来と使い方が違うぞ馬鹿が!!」と怒ってはいけない。霊夢も魔理沙も、同じスペルカードでも作品によっては違う弾幕の放ち方をする。それと同じである。

「ならば、暗器『外道鎖鎌』!!」

刃は新しいスペルカードを宣言すると両手に鎖鎌を二本持ち、

分銅の部分を持って振り回した。

「って、うひゃあぁっ!？」

まさかの攻撃に呆気に取られた文は、鎌に当たりそうになって慌てて回避する。

「ちよ!? 鎖鎌ってそんな使い方しないでしょ!!」

「大丈夫だ、問題無い」

「何処のイーノックですか、貴女は!？」

良い子やいい年した大人は、絶対に真似をしてはいけない。下手したら自分の首が飛ぶぞ。

「いや、多分誰も真似しないと思いますけど!？」

「分からねえぞ、早苗。世界にはスケボーで階段の手すりを滑り降りようとして、失敗して股間を強打した外国人もいるぜ」

「あゝ。そんな事をする人、大体アメリカの人なんだよね。ある研究で『スターになれるなら何でもやる人』と思われるらしいから」

「そのうち、違う意味でお星様になってしまっくんじゃ?」

「橙、誰がうまい事を言えと…」

「ちなみに日本人は『他の人がやっていたら行動する人』と思われるているらしいですよ。余り間違っでないのが悔しいですが…」

「貴女達、何の話してるの…」

以上、傍観組の会話である。

場面を戻って、上空。

弾幕を撃ち合い、互いに疲れた表情を見せる文と刃。

「て、天狗以外で私の速さについて来れる妖怪がいたとは……。体力的に、宣言できるスペルカードは正直後1枚です…」

「……安心しろ。拙者も次に使う札で最後だ…」

互いに最後のスペルカードを取り出す文と刃。

ここで、文が意外な事を提案する。

「先に宣言してもいいですよ」

文の言葉に耳を疑う刃。

「何？」

「お先にラストスペルを使っても良いと言っているんですよ」

自信満々な文に、怪訝な表情を浮かべる刃。

「いいのか？拙者の次の弾幕は、反撃の手（喰らいボムの事）を使う暇も無いぞ？」

刃は念を押すが、態度を変えない文を見てスペルカードを構え直す。

「ならば特と見よ、拙者の『らすとすべる』を……」

刃がスペルカードに力を込めると、周りの風景がモノクロと化す。

「
惨劇『鎌鼬の夜』」

「!?!」

次の瞬間、刃は様々な暗器を取り出して文に向かって飛ばす。
文はそれを旋回して回避するが、合間に刃が放った真空波が飛んで来る。

「く!うっ!」

「お、おい。文の奴、大丈夫なのか?」

「さ、流石に不安になってきた……」

必死に回避に専念する文。それを見て、ハラハラしだす魔理沙達。

そして、霊夢はある事に気付く。

「！

文、後ろ！！」

霊夢の叫びに振り返った文に、刃が放った真空波が迫る。

「しまっ…！！？」

流血

真空波が直撃し、文は海へ落ちていく。

「油断が貴様の敗因だ……」

それを見届け、鎌をしまって背を向ける刃。

「「文——！！！」

海上の石橋で仲間達の悲鳴が木霊した。

第六話 旋風『烏天狗 対 鎌鼬』（後書き）

文が負けた！？

衝撃を受ける霊夢達に刃が迫る。

果して、文は本当に負けてしまったのであろうか？

次回、東方双界伝 〈 Another Fantastic
World 〉

友情『決着は風と共に』

魔理沙「おいしいiiii！？文が負けちまったぞ！？

また、東方信者から苦情が来るぞ！？」

霊夢「落ち着きなさい魔理沙。次回を見てないのにいきり立たないの」

早苗「今回、前書きと本文で同じ注意書きを書きましたけど……」

白米「『大事な事なので二回言いました』みたいなの？」

前書きや後書きを読まない輩もいるので、念の為に」

霊夢「人によつてはクドイと言われるわよ？」

白米「ニコ動でも、作者コメントの注意書きを読まずにクレーム付ける人を何度も見たので……」

霊夢「なら、仕方ないわね」

橙「それでは、引き続き感想・質問を受け付けます。また、感想は自分のオリキャラを喋らせる以外は、『敬語』でお願いします。初めての方は挨拶を冒頭に入れてくださいね。

それでは、次回も見てニヤン」

第七話 友情『決着は風と共に』

幻想郷

「う、号外です…」

幻想郷中を飛び回り、新聞を配る妖怪が一人。
白狼天狗の犬走椛である。

夢幻界へ旅立った文から、夢幻界の事を新聞に書いて配達する様に命令され、新聞を書き終えて今配達している所である。

無視してもよかったのだが、文から『出来なければ椛の恥ずかしい写真を幻想郷中にはらまくわよ（ ）』と脅された為、言う事を聞かねばならなくなってしまった。哀れ。

何分、休みなく書き続けた事と幻想郷中を飛び回らなければならぬ
い事があり、椛は疲労困憊であった。

「つ、疲れた…少し休憩しよう…」

椛は休憩の為に、地面に降りようとした、その時。

「おっと!?!?」

椛の高下駄の鼻緒が切れて、椛はコケそうになる。

「まだ、買い換えたばかりなのに…」

下駄を見て椛は、何やら嫌な予感を感じた。

「文様は無事だろうか……」

普段、仲が悪いとはいえ、同じ天狗の仲間として椛は文の事を心配した。

余談だが椛が配達した新聞が、新たな弾幕使いを夢幻界に向かわせる事になるのは後の話。

「そんな!!」

「文が負けた!？」

「嘘だろ!？」

落ちていく文を見てショックを受ける霊夢達。

普段はふざけている時があるが、文は幻想郷の中ではかなりの実力者である。

それを知っているからこそ、霊夢達は文の敗北が信じられないのだ。

そんな霊夢達の前に刃が着地し、鎌を向ける。

「拙者の切り札、『鎌鼬の夜』は数多の凶刃を相手に向かって放ち、逃げ場を失わせて仕留める必殺の弾幕……」

一歩一歩、霊夢達に近づく刃。

心なしか、鎌が命を削ぎ落とそうとするかの様にギラリと光る。

「後に残るは、血で赤く染まった哀れな骸のみ」

近づく刃に、霊夢達は思わず構える。

「故に『惨劇』。

これぞ、拙者の『らすとすべる』」

「くっ……」

「この弾幕勝負は拙者が勝った。諦めて墜ちた仲間と共に去るがい
い」

そう言う刃は鎌をしまい、霊夢達に背を向けて歩き出す。

屈辱的な敗北に魔理沙達はやり切れない表情を浮かべる。

しかし、霊夢だけは違った。

「……待ちなさい。まだ勝負は終わってないわよ」

「む？」

霊夢の発言に刃は思わず立ち止まる。

「だって、まだ文は負けてはいないのだから」

「それはどづいっ」

「『幻想風靡』!!」

「!?!?」

突如スperlカード宣言が響き、下から突風が吹き上がる。

「(馬鹿な!?)『鎌鼬の夜』をまともに喰らって、まだ戦えるのか!?!?」

包帯で隠された刃の顔に驚愕の色が表れる。

突風の正体は何と、撃墜したと思われた文であった。

空中を高速で飛び回り、弾幕を広範囲にばらまく。それは勝利を確信し、油断していた刃を追い詰めるのには十分だった。

「ぐっ、うおわああっ!!!?」

あっという間に弾幕に囲まれた刃は呆気なく被弾してしまい、橋に叩き付けられて動かなくなった。

「流石に今回はヤバいと思いましたよ」

刃が気絶したのを確認して、文は額の汗を拭って霊夢達の下に降りていく。

「文さん、無事で良かった……て、大丈夫ですか!? 血が出てますよ!?!」

安堵する早苗だが、文の服の大半に付着した赤い染みを見て悲鳴をあげる。

「あ、大丈夫ですよ。ただのトマトジュースですから」

「いや、なんで持ってんですか!?!」

両断されたトマトジュースのパックを見せながら笑う文に、呆れと怒りを込めてツッコミを入れる早苗。

という事は前回の血は、実はトマトジュースだったという事になる。

紛らわしい。

そんな文に苦笑しながら、魔理沙は霊夢に問い掛ける。

「しかし霊夢、よく文が勝つ事を分かったな」

「簡単よ。文が撃墜されてから着水した音がしなかったから、もしかしてと思ってね」

そう、文が落ちていったのは海。本当に文が気絶等したなら、海に落ちた時の着水音が聞こえる筈である。

それが無いのであれば、文は海に落ちる前に体勢を立て直したという事である。

刃は文が落ちていく様子を見ただけで、実際に文が海に落ちたところは見えていない。逆に油断していたのは、刃の方であったのだ。

「ともあれ、これで私の勝ちですね」

得意げに胸を反らす文。

その時。

「…驚いたな」

「」「うわああ!!?」「」

気絶した筈の刃が突然ガバツと起き上がり口を開いた為、霊夢達は悲鳴をあげる。

それはもう、何事もなかったかの様にあっさり起き上がったのである。驚くのも無理はない。

「ま、まだ戦う気ですか!？」

冷汗を流しながら刃に警戒する文。殺されかけたのだから仕方の無い事だろう。

しかし、刃は首を横に振る。

「いや、この勝負は拙者の負けだ」

あっさり自分の敗北を認める刃に安堵する霊夢達。刃は文の方を向き、しみじみと呟く。

「拙者の『鎌鼬の夜』を受けて、無傷でいられるとはな……」

「あ、それはこれのお陰です」

「……写真機？」

文が取り出したカメラを見て、疑問を浮かべる刃。

「このカメラは弾幕を打ち消す機能がありまして、さっきの弾幕のいくつかはこれで消し去りました」

「…そのような代物があったとはな……」

文の写真機は河童が製作したものであり弾幕を打ち消してしまう機能がある。つまり、文は刃が放った真空波のいくつかを写真機打ち消し、残りを急降下で回避したのである。

感心する刃に霊夢は問い掛ける。

「そういえば雇われて私達と戦うように言われたと言ったわね？誰の差し金？」

「契約の関係で、それは言えぬ」

「…シバき足りないのかしら？」

「言うくらいなら死を選ぶ」

白状しない刃に脅しをかける霊夢だが、喉に鎌を突き立てて自決宣言する刃の潔さに諦めざるを得なかった。

「簡単に命を賭けるんだな……」

「自分の故郷を守る為、不審者を撃退するのだ。当然の事」

呆れる魔理沙に意志の強さを見せ付ける刃。

そんな刃に、霊夢は更に問い掛ける。

「じゃあ、異変の事は知ってるの？」

霊夢の質問に、刃は怪訝な表情を浮かべる。

「異変？何のことだ？」

） 少女説明中 ）

「そのような事が……なるほど、貴様らが必死になる訳だ」

「知らなかったみたいね」

霊夢から幻想郷に起こっている異変について聞いた刃は納得し、霊夢は呆れた様に肩を竦める。

ちなみに刃は顔の包帯を外し、素顔を露にしている。

右眉から左の頬まで横断する切り傷があるが、それでも美人の分類に入る顔であった。

え？どんな顔なんだって？

各自の想像にお任せします。

「それにしても、貴女が幻想郷の事を知ってたなんてね……」

「実際に行った事はないが、夢幻界に弾幕勝負を広めた女から話は聞いていた。

最初は信じていなかったが……」

「……魅魔様か」

刃の回答に、魔理沙は数年前に夢幻界にスペルカードルールを広めた自分の師を思い浮かべる。

「ま、いいわ。　　橙、この先には何があるの？」

「ご、ごめん。夢幻界への道のりは聞いてたけど、夢幻界の地理は専門外……」

「使えねえ……」

気を取り直して橙に尋ねる霊夢だが、橙は申し訳なさそうに謝る。魔理沙の発言に涙目になって落ち込む橙。後が怖いぞ。

その時、刃が霊夢にあるものを渡す。

「これを持っていけ」

「これは？」

「この世界の地図だ」

「何でそんなものを持ってんのよ……」
霊夢さん、ツツコンではいけませんよ。

「橋を渡って真っ直ぐ歩けば人間の町、ミッドガルドに着く」

地図を参照に刃は霊夢達に道案内する。

「しかし、今ミッドガルドは他所の世界から来た貴様らに警戒して機兵達が警備している。」

容易には入る事が出来ない」

「待ってくれ。『機兵』って何だ？」

「幻想郷には存在しないのか？」

所謂、『ろぼっと』と呼ばれるもの達だ」

魔理沙の質問に対しての刃の回答に、早苗とにとりが目を輝かせて迫る。

「何いいい！？夢幻界にはロボットがいるのか！？」

「う、うむ」

「どんなロボットがいるんですか！？」

「大体人間と同じ大きさのものが多数」

「変形とか合体はできるのか！？」

「まあ…中には……」

「はいはい、関係ない質問攻めはそこまで」

ロボット好きの二人の熱意に若干タジタジになっていた刃は、二人の暴走を止めた霊夢に心の中で感謝した。

「でも、この世界の住民の貴女が証言してくれば、ミッドガルド
つて所に入れるのでは？」

「拙者は忍者だ。裏切り者として処分されるのがオチだ」

「だろうな」

文の提案を首を振って却下する刃に、魔理沙も同意する。

「ただ……一人、貴様らの身の潔白を証明する事ができる者がいる」

「本当か！？」

「うむ。頭の固い機兵達も、その者が証言したと知れば納得してくれるだろう」

「なんか胡散臭いわね。」

「大丈夫なの？」

疑う霊夢に、刃は自信満々な表情を浮かべる。

「問題無い。『ある理由』で、夢幻界の人々から信用されている者だからな」

「『ある理由』って、何ですか？」

「会えば分かる」

そう言っつて刃は立ち上がる。霊夢達は刃の言葉の意味が分からず、顔を見合わせる。

「その者が住むのは橋を渡りきって向かって左、ミッドガルド北西に存在する『妖精の森』だ。」

拙者が道案内しよう」

刃の提案に霊夢達は再度顔を見合わせ、霊夢が代表として返事をする。

「じゃあ、お願いしようかしらね」

「うむ。」

それでは前金として、幾らか払って貰おうか」

「いや、金払うのかよ!!!?!」

右手を差し出し支払い要求する刃に、霊夢達はずつこける。そして、魔理沙がツツコミをいれる。

「当然。」

拙者も生活にかかっているからな。一銭も負けないぞ」

「さつき私との弾幕勝負に負けたではないですか!?!」

「それはそれ、これはこれ」

「汚い…。流石忍者やっぱり汚い……」

こうして、霊夢達は刃に道案内代を払う羽目になり、妖精の森へ針路をとるのであった。

おまけ

「ほう。射命丸殿は新聞記者をやっているのか」

「はい！幻想郷でも一番有名な新聞だと自負しております。
よろしければ、お読みになりますか？」

「む。折角だから貰おうか」

「ありがとうございます！！」

「なんか……あの二人仲良くなってない？」

「数分前、死闘を繰り広げた者とは思えないねえ……」

何故か、仲良くなっている最速コンピの会話に、霊夢にとりては冷汗をかきながら密談する。

「あ、そうだ。」

刃！私のミニ八卦炉をそろそろ返せよ！」

「む。そうだった」

そう言って刃は懐からミニ八卦炉を取り出すと、魔理沙に向かって投げ渡す。

「うわっ……何か生暖かい………」

「寒くないよう、懐で温めておいた」

「何処の秀吉だお前は!？」

無表情で某猿顔の戦国武将の有名な台詞を彷彿させる一言を呟く刃に、魔理沙はツッコミをいれる。

「『普通の魔法使い、鎌鼬のプロポーションに嫉妬』……と」

「おい待てブン屋！誰がこんな男女の体型なんか嫉妬するかよ！」

「語尾に『だぜ』を付けている奴に言われたくはない。

しかも、先程拙者の胸を見て落ち込んでいた癖に何を抜かす」

「ギクッ！

な、何を証拠に」

「む」

しらばっくれる魔理沙にある写真を差し出す刃。

そこには、浮かない顔して自分の胸を触る魔理沙の姿が写されていた。

「いつの間にもいいいいいい！！？／／／」

顔を真っ赤にしてシャウトする魔理沙。
本当にいつの間に撮影したんだか……。

「刃さん！」

……その写真、私に売ってくれませんか？」

「一枚に付き千円」

「ノープロブレム」

ウザい顔して交渉する文と、ちゃっかり請求する刃に、魔理沙のツッコミがその場一帯に響いた。

「お前ら、いい加減にしるおおおお！！！！／／／」

「最悪な二人が手を組んじゃったわね……」

「魔理沙さん、哀れ……」

第七話 友情『決着は風と共に』（後書き）

新たに鎌鼬の刃を一行に加えた霊夢達は、夢幻界北西の『妖精の森』に向かう。

悪戯好きの妖精達の襲来を軽く退ける霊夢達。

そして、彼女達はある少女に出会うのであった。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World.

『フェアリーフォレスト』

霊夢「漸く夢幻界に入れる様になったわね」

白米「ちなみに夢幻界の人間の町ミッドガルドは、北欧神話に出て来る人間の国が元ネタです」

魔理沙「某『少し頭を冷やそうか』な魔法少女の舞台もそんな名前じゃなかったっけ？」

白米「それはミッドチルダね」

霊夢「というか、パパラッチと盗撮魔が手を組んじゃったわよ」

魔理沙「まさか、サブタイトルの『友情』ってコレの事か!?!」

白米「まあ、二人とも風使いで素早い訳なので……」。

それに、死闘を繰り広げた者同士が友情を深め合うのはよくある事なので」

霊夢「たださえパパラッチに迷惑してるのに……」(orz)

文「おお、酷い酷い」(ウザい顔)

白米「さて、今回は白米オリキャラ五人衆の二人目が登場します」

霊夢「次は誰が出るのよ」

白米「『妖精』、『純粹』」。

私の事を知っている殆どの方は、これで誰かは分かります」

霊夢「……ああ、あの娘ね……」

文「引き続き、感想・質問を受け付けております」

刃「基本的に白米は質問には全部答えるつもりだが、流石に今後のネタバレになり得るものは答えられない為、注意してくれ」

文「それでは次回もあややと一緒には？」

刃「『れりーず』」

第八話 『フェアリーフォレスト』

雇われの忍、風鳴刃との弾幕勝負に勝利して夢幻界に踏み込んだ霊夢達は、自分達が信用できる者だとミッドガルドの機兵達に証明する為に夢幻界の北西にある妖精の森に向かった。

道案内として刃が同行する事になったが、霊夢はある不信感を持っていた。

「でも、あっさり私達の話信じたいんだけど、いいの？」

「こちら側でもあの様な異変が起これば、信じざるおえないのでな」
そう言って刃は上空を指差す。釣られて上を向いた霊夢達は絶句した。

何と、夢幻界の上空に幻想郷と同じ様に島が浮いていたのだった。

「わー、ここにも浮遊島が……」

「何ででしょうか…私、あの山に見覚えがありませんが…」

「……」

「霊夢、あれってまさか……」

「多分、幻想郷だわ……」

夢幻界に浮かぶ浮遊島を見て、脱力してしまう霊夢達。

「て、何であんな事があつた事を言わなかつたのよ!？」

「今言つた」

「遅いわ!！」

しれつと言うつ刃に霊夢はお札を投げ付けてつつこむ。
それをひよいと軽く躲す刃。

「それより向こうに見える森が目的地の妖精の森だ」

刃が前方を指差すと、そこには蛍の様な緑色の光が宙に浮いている
幻想的な森が見えた。

「にや〜、綺麗だ〜」

その美しさに橙は感嘆し、霊夢達も見取れてしまう。

「この光は何なの?」

霊夢は宙に浮いている緑色の光を突きながら刃に訊く。

「それは妖精光まじせいらつ。この森の木や地面から放出される、魔力の様なもの
のだ。

普通の人間は、この妖精光に触れただけで気を失い、妖精の森に
入る事すらもできない」

「でも、私や霊夢、早苗が触っても何ともないぜ?」

「妖怪と渡り合える力を持っている者なら平気だ。」

特に、拙者に殺されずに済んだ貴様らには、な」

「怖い事言つな、お前も……」

刃の物騒な発言に魔理沙は引いてしまう。

気を取り直し、妖精の森を進む霊夢達。
ここで魔理沙はある事を刃に尋ねた。

「ところで、妖精の森って事はここには妖精がいっぱいいるのか？」

「うむ」

「どんな妖精がいるんだ？」

幻想郷には人間より非力だけど、悪戯好きで馬鹿な妖精達がわん
さかいたが……」

幻想郷の妖精は『一つの事しか考えられない』性格であり、例えば
簡単なクイズを出せば襲われても逃げる事ができる。

何処かの氷精をよく『馬鹿』、『？』と呼ぶ人がいるが、本当は妖
精が皆馬鹿なだけである。氷精の付き添いの緑髪ですら、原作では
同じ『？』なのだ……。

「へぷちんっ!!」

「あれ？チルノちゃん、風邪？」

「そんな事ない!!アタイはさいきよーだから風邪なんかひかないつて、竹林のウサギが言つてたもん」

「（それつて、遠回しに『馬鹿は風邪をひかない』つて言われたんじゃ……）」

ちなみに、幻想郷の妖精は自然現象の一部の様なものなので、死んでも体がバラバラになつても元通りに生き返るらしい。
ある意味、不死身である。

「で、夢幻界ユメミでは妖精はどうなつてんだ？」

「ふむ、そうだな……」

例外があるが、基本的に幻想郷のものと同じだ。
そろそろ来るな」

そう言つて刃が上空を見上げると、羽虫の様な羽が背中から生えた少女達が弾幕を放ちながら襲い掛かつてきた。

「あれは、幻想郷にもよく見かける奴だな」

「拙者達夢幻界の者は、あの様な妖精を『ピクシー』と呼んでいる」

「『あの様な』って、他にもいるの？」

弾幕を躲しながら、にとりと刃、橙が会話を交わす。

すると突然木の枝が動き出し、霊夢達に掴みかかって来た。霊夢達はそれを避けるが、今度は地面から木の根が襲い掛かって来る。見ると木に同化した女性が、こちらを見てクスクスと笑っている。

「あやや！？木の中に誰かいますよ!？」

「あれは『ドリアート』だな。木と同化して悪さをする妖精の一種だ」

「そういえば、紅魔館から盗み…借りた本の中に、そんな妖精がいると書いてあったな……」

「最も、同化している木から離ればそれ程脅威ではないが……如何せん、囲まれてしまったな……」

よくよく見ると、霊夢達の周りを包囲するようにピクシーとドリアート達が取り囲んでいた。

霊夢達は背中合わせになって逃走経路を探すが、逃げ場などない。逃げたら『しかし、まわりこまれてしまった』と表示されるであろう状況である。

何の話かって？ドラゴンクエストをやれば分かりますよ。

「刃、貴女はこの世界の住民でしょ。何とか出来ないの？」

「逆に訊くが、幻想郷の妖精は話し合いで見逃してくれるものなのか？」

「……………無理ね」

霊夢はため息を吐き、お札を数枚前方に飛ばした。

お札にぶつかつた妖精は、気絶して地面に落ちて目を回す。

魔理沙はスカートの中からキノコアイテムを取り出して、ドリアートに向かつて投げ付けた。着弾した途端に爆発し、木に火が着いたのを見たドリアート達はパニックになる。

魔理沙が投げた爆発物を見てしかめつつらになりながらも、飛び回る妖精を手裏剣で仕留める刃。何気に百発百中で、全部眉間に命中している。

この三人で十分と思ったのか、真ん中で座って応援する早苗、文、にとり、橙。

「頑張ってください！」

「刃さん、ナイスコントロール！」

「頑張れ盟友！」

「じゃあ！」

「って、あんたらも戦わんかい！！！」

しかし、霊夢につっこまれて渋々妖精撃退に付き合わされてしまった。ま、当然である。

数分後。

「ぎゃー!!」

「やーらーれーたー!!」

「覚えてろー!!」

それぞれ捨て台詞を吐きながら、逃げていく妖精達。
やれやれと首を振りながら呆れる霊夢に刃が声をかける。

「全く、何処の世界でも厄介な奴らね、妖精つてものは……」

「今のうちに先を急ぐぞ。一々相手にしていたら日が暮れる」

「それもそうね。」

「じゃ、引き続き道案内よろしく」

「うむ」

その後、何度か妖精の襲撃を受けたが軽くあしらい、霊夢達は漸く目的地に到着した。

既に夕暮れになっていたが。

「着いたぞ。ここが私の友人が住む家だ」

刃が指差す先には、巨大な切り株で出来た家が建っていた。ちなみに二階建て。

扉をノックしようとする刃に、早苗はある事を訊く。

「ところで刃さん、貴女の友人ってもしかして妖精ですか？」

「うむ」

「おいおい大丈夫なのか？今までみたいに、いきなり襲い掛かって来るのは無しだぜ？」

今まで妖精達と戦ってきたからか、異様に警戒する魔理沙。そんな魔理沙に、刃は苦笑する。

「案ずるな。彼女は他の妖精と違い、物分かりはいいからな」

そう言つて刃は扉をノックし、切り株ハウスの中にいる筈の家主を呼び掛ける。

「マリア。

マリア・リュミエール、いるか？」

「はい？」

中から聞こえてきた声はかなり若い女の声で、恐らく霊夢か早苗ぐらいの歳の女の子なのだろう。

しばらくして扉が開き、家主が姿を現す。

家主の姿に魔理沙と早苗は驚く。

「どなたですか？」

て、刃さんじゃありませんか！どうしたのですか？」

「な！？」

「え！？」

二人が驚くのも無理はない。

その少女は腰まである長い金髪で、宝石の様な綺麗な青い瞳を持っている。緑色の服を纏い、刃程ではないが中々のスタイルを持っている。

そして、何より目が行くのは耳である。長く先の尖った耳は、少女が人間ではない事を示していた。そしてこの耳は、少女のリアクシ

ヨンに合わせてピコピコ動いている。
似た特徴を持つ嫉妬深い地底の橋姫、水橋パルスイとは違い、純粹な雰囲気を醸し出すこの少女。ファンタジーものを知っている人が見たら、誰もがこう思うだろう。

「え、エルフ!?」

魔理沙と早苗が叫んだように、ファンタジーものではお馴染みの妖精、エルフの女の子がそこにいた。

「?

刃さん、そちらの方々は?」

「幻想郷から来た客人だ」

「幻想……郷?」

聞き慣れない単語にマリアというエルフの少女は首を傾げる。

「まあ、詳しい話は後だ。

一晩泊まらせてくれないか?」

「あ、はい。分かりました。

それでは、そちらの皆様も中へどうぞ」

「あ、うん。それじゃあ……」

あっさり宿泊許可を出すマリアの笑顔に、霊夢達は居心地の悪さを感じ取り家の中に入る。

「？」

刃も家の中に入ろうとするが、何者かの視線を感じて立ち止まる。

「……………気のせいかな」

しばらくして、何処か腑に落ちない表情をしながらもマリアの家に入るのであった。

この時、刃が感じた視線の正体が判明するのは、後の事である。

おまけ

幻想郷 妖怪の山の麓、霧の湖にある紅魔館。

その地下にある大図書館で、本を読む紫色の魔女が一人。

火水木金土日月の七種類の属性の魔法を操る七曜の魔女、パチュリ

ー・ノーレッジである。

「パチユリー様、何を呼んでいらっしやるのですか？」

そこへ赤い髪に頭に蝙蝠の羽を付けた黒服の少女がやって来た。
彼女は小悪魔。名前は未だに不明。

「『エルフ』について、ちょっとね」

「エルフ……ですか？」

「エルフは魔法に長けた妖精で、嘘を付けない純真な性格らしいわ。
この本には『エルフの証言はほぼ真実と言っても過言ではない』
と書かれているわ」

「でも、妖精の仲間なんですよね？あまり信憑性がありませんけど
……」

「それはどうかしら？」

妖精の中には『妖精人』と呼ばれる種類もあるらしいわよ？」

「な、何ですか？妖精人って」

「妖精の中でも独自の文化を持ち、人間にも劣らない、もしくは人間以上の知識を持った妖精がいるの。それは妖精人と呼ばれて、エルフやドワーフ、グレムリンなんかはコレに当てはまるわ」

「……つまり、人間より優れた妖精って事ですか？」

「あくまで噂だけど、そういう事ね。」

小悪魔、その本を片付けてね」

「はいはい。」

「って、多っ!?!何百冊あるんですか!?!」

「いいから四の五も言わずにやりなさい」

「ひー!?!あ、明日は筋肉痛になりそうです……」

頑張れ小悪魔。きっとそのうちいい事あるぞ……

多分。

第八話 『フェアリーフォレスト』（後書き）

マリアの家で、改めて幻想郷で起きた異変と自分達の目的を話す霊夢達。

しかし、マリアの純粋な笑顔の前には歴戦の強者もタジタジになってしまう。

その頃、幻想郷から新たにやって来た人形使いと幽霊剣士が人間の町ミッドガルドに向かうが、彼女達の前に鋼の兵隊達が立ち塞がる。

次回、東方双界伝 ｝ Another Fantastic World .

邪念滅殺『純粹すぎる笑顔』

白米「という訳で、漸く登場しました白米オリキャラ五人衆二人目、マリア・リュミエールです」

マリア「よろしくお願いします」（超絶純真笑顔）

霊夢「うわっ、眩し!?!」

魔理沙「思ったんだが、こいつをパルスイに会わせたらどうなるん

だ？」

白米「会わせた結果、あなりました」

パルスィ「あははは 綺麗なお花畑がありますわ」(キラキラ)

霊夢&魔理沙「誰!？」(汗)

白米「それでは引き続き感想・質問をお待ちしております」

第九話 邪念滅殺『純粹すぎる笑顔』（前書き）

夢幻界生物図鑑

「ドリアート」

木と同化して住み着く、妖精の一種。悪戯好きだが、森を燃やしたり、汚したり、傷付けたりする者には怒って攻撃して来る。攻撃方法は木の枝を振り回す事と木の根を伸ばす事。

また、美少年が好みであり、見かけるとアプローチしてきて、場合によっては木の中に引きずり込んでしまう。

第九話 邪念滅殺『純粹すぎる笑顔』

夢幻界 妖精の森

日が暮れて、今夜はマリア宅に泊まる事になった霊夢達。

マリアは自分が作ったアップルパイを霊夢達に振る舞いながら、自己紹介をする。

「申し遅れました。

私はマリア・リュミエール。この森に住んでいるエルフです。
あ、もし宜しかったらこちらをお召し上がりください」

「博麗霊夢よ。

あ、美味しい」

「霧雨魔理沙だぜ。

咲夜が作ったやつより美味いな……」

「東風谷早苗です。

うわ。この程よい甘さが何とも言えない……」

「清く正しい射命丸文です。

おお、うめえうめえ」

「橙だよ。

藍様が作ったものより美味しい……」

「いや、何皆して躊躇い無く食べるの？美味いけど。」

あ、私は河童の河城にとりだ」

それぞれ、マリアのアップルパイに称賛しながら自己紹介する霊夢達。

刃も黙々と食べ進めている。

「外の妖精達が騒がしかったから何だろうと思ったけど、刃さん達が来てたのですね……」

「あの妖精共アホが襲い掛かって来なければ、今日中にミッドガルドに着いていたかも知れなかったのにな」

苦笑するマリアに、刃は茶を啜りながら相槌を打つ。

その様子を見て、霊夢はポツリと呟いた。

「氷精や家の近くに住み着いた三月精もあれくらい利口だったらね……」

「「「はつくしよん!」「「「「

「それで、何でわざわざこんな所に?」

「ふむ、それについては……
霊夢、説明を頼む」

「私が全部説明するんかい！？
別にいいけど……」

〈 少女説明中 〉

霊夢は自分達の済む幻想郷の事と、そこで起きた異変の事をマリアに説明した。

幻想郷の文化・規律。幻想郷に浮かんだ夢幻界の虚像。紫から聞いた幻想郷と夢幻界の関係。夢幻界へ来た目的。霊夢は包み隠さず、マリアに全てを話した。

「なるほど。幻想郷の異変を解決するために、この夢幻界に来たのですね……」

「別にこの世界の人々を根絶やしにするつもりは無いわ。
ただ、異変の黒幕を懲らしめて悪さを止めさせるだけよ」

霊夢の台詞に嘘偽りも無い。元々、彼女は嘘をつかなく、良くも悪くも裏表の無い性格なのだ。

それもあるが、マリアに見つめられると嘘がつけなくなるのだ。純

粹まなこな眼に見つめられると、どうにも嘘をつくのが恥ずかしくなるのだ。

「どうだ、マリア？この者達は信用できる人物か？」

「ええ。霊夢さん達は、夢幻界に悪影響を出さないでしょう」

茶を啜りながら質問する刃に、笑顔で答えるマリア。

「やけにアツサリ信用したな？」

「霊夢さんは私に嘘をつかないで、ちゃんと目を見て言ってくれましたからね。」

魔理沙さんや早苗さん、橙ちゃん、文さん、にとりさんもそんなに悪い人には感じられませんかし」

冷汗をかいて呆れる魔理沙に、マリアは首を横に振って霊夢達を信じる事を明言する。

「霊夢さんは私の事を信じて真実を話してくれました。私もそんな霊夢さんを信じたいのです！」

「いや、別にそんなつもりじゃ……」

微妙に勘違いしているマリアに冷汗をかいて訂正しようとする霊夢だが、如何せんマリアの眼の輝きが眩しすぎて口に出しづらかった。

「だから霊夢さん、誰が何と言おうと私は霊夢さん達の味方です！」

「はっ！？」

そう言つてマリアは、太陽の様な笑顔を見せる。
その輝きに、霊夢と魔理沙は思わず目を反らしてしまう。

「どうしよう魔理沙……。マリアが眩しくて直視出来ない……」

「全くだ。眼がチカチカしやがるぜ……」

「「？」」

目頭を押さえて目尻に涙を溜める霊夢と魔理沙。
それを見て首を傾げる早苗と橙。

「…相変わらずの威力だな、貴様の笑顔」

「ふえ？」

諄いようだが、茶を啜りながら刃はしみじみと眩き、それに首を傾げるマリア。

「ちよ、皆。文が真っ白に燃え尽きかけてるんだけど!？」

「え？」

「うわああああ!文、どうしたのよ!？」

にとりの悲鳴に振り向けば、灰となって崩れかけている文がいた。
既に目が死んでいて、濁いた笑いを出している。……正直ヤバイ。

「浄化されたな」

「「浄化!?」」

「説明しよう。」

邪念を持った者がマリアの笑顔を見ると、たちまち浄化されてしまっただけ」

「何ですかその聖職者スキルは!?

Lv99のニフラムですか!??ゾ マも光の彼方に消え去っちゃうのですか!?!?」

「ドラクエやってない人には分からないネタを言っな!?!」

何故か裏声且つ棒読みで説明する刃に、早苗がマニアックなツッコミをする。そして、魔理沙が早苗のツッコミの内容に即座につっこむ。

「すみません……今、小町さんの船に乗りかけてました……」

「死ぬ一歩手前かよ!?!?間に合っつてよかったぜ……」

その後、魔理沙が必死に頬を叩いた事で文が目覚めた。

三途の川に渡りかけたと言う文に、魔理沙はツッコミを入れる。

「確かに、恐ろしい威力ですね」

「このエルフが幻想郷に来たら、幻想郷の妖怪の大半が死滅するわね……」

「汚れの無い純真さと邪念を浄化する笑顔があるからこそ、マリアは夢幻界で一番信用できる人物になっているのだ……」

「人を兵器みたいに言わないでくださいよぉ!!」

その様子を見て改めてマリアの笑顔の恐ろしさを実感する霊夢達に、マリアは涙目になりながら怒る。

しかし、怒ってはいるが正直迫力が無い。逆に可愛い。そして、何故だか罪悪感が生まれてしまう。

「しかし、エルフや鎌鼬がいるなんて、夢幻界の生態は幻想郷とは少し違うみたいだね。

ロボットもいるみたいだし」

「そうそう！夢幻界のロボット、見てみたいです！」

にとりの発言に夢幻界にはロボットがいると思い出し、早苗はテンションが上がる。

「…そうだな。改めて貴様らが信用できる者と分かった事だ。

ここで夢幻界の生態について説明しよう」

そう言っつて刃は何処からかホワイトボードを取り出し、黒いペンで書き込みながら説明する。

「まずは夢幻界には人間・妖怪・妖精がいる。これは幻想郷でも同じだな」

刃はホワイトボードに『人間』、『妖怪』、『妖精』と記述する。

「幻想郷では主に東洋の妖怪が多いようだが、夢幻界では西洋の妖怪が多い。拙者や真壁の様な東洋の者は多少はいるが、数でいえば西洋妖怪が主だ」

刃は『妖怪』の側に『鳥人^{ハイビ}』、『ガーゴイル』、『カーバンクル』などの外国の妖怪の名前を書く。

「また、回りが海に囲まれている為、海に棲息する妖怪や妖精が多い」

「そういえば、夢幻界は海に囲まれた島だったわね」

刃の説明に霊夢は納得したように声を上げる。

「うむ。しかし、逆に魔法使い、天界や冥界、彼岸の妖怪や幽霊、死神はいない。

また機械文化に優れている分、魔法には疎くてな、現在夢幻界では魔法について研究中なのだ」

「じゃあ、私のミニ八卦炉を盗んだのは……」

「貴様らを始末した後で、魔法研究者共に渡すつもりだった。今はそうするつもりは無いがな」

「文、勝ってくれてありがとう……！！」

文の肩を掴んで揺らしながら安堵する魔理沙。

まあ、自分の大切なアイテムを、訳の分からない研究で調べられるのは誰だって嫌だろう。

「ま、機兵についてはミッドガルドで説明しよう。妖精についてはマリア、説明を頼む」

「はい。夢幻界の妖精は4つに分類されます。

『ピクシー』、『ニンフ』、『小人』、そして『妖精人』。これが妖精の分類です」

「どう違うのよ?」

「貴女方がよく見かける背中に羽が付いた妖精は『ピクシー』と言います。

知能は余り高くなく、悪戯好きの者が多い種族です」

「そこは幻想郷と同じですね」

文はメモをとりながら相槌を打つ。

「次は『ニンフ』ですが、これは森や川、海などに住む人間の女性の姿をした妖精です。

しかし、体が木や水で出来ているので自分の住家から離れる事ができないのです」

「先程襲ってきたドリアートも、ニンフの一つだ」

マリアの説明に刃が補足する。

「続いては『小人』。親指サイズから人間の子供までの大きさの妖

精の事を指します。物作りの達人で、人の為に働く事が生きがいらしいですよ」

「へー、便利だな」

「そして、私達エルフは『妖精人』と分類されます。人間とほぼ変わらない生活して暮らします。

あ、小人や妖精人に分類される妖精は人間に好意的なので安心してください」

「なるほど、

ピクシーは羽付きの馬鹿、

ニンフは自然と一体化する、

小人は物作りが好きな働き者、

妖精人は人間に近い妖精って事ね？」

「纏めるとそうなりますね」

魔理沙は小人の説明を聞いて感心し、マリアは最後の説明をする。そして、霊夢はマリアの説明を短く纏める。

「ともかく、今日はもう遅い。

マリア、寢床の準備を頼む」

「はい。刃さんはお風呂の準備をしてください」

「む」

説明が終わり、マリアは食器洗いと寢床、刃は風呂の準備をする。

「しかし小人かー。家にも一匹欲しいわね」

「ただし、それ相応のお礼が無いと悪さをしますが」

「お礼つて？」

「ブラウニーの場合、パンとミルクをそっと置けばいいですよ？」

「やっぱりらない……」

「どんだけ貧乏だ貴様……」

マリアの説明で小人を捕まえようと思った霊夢だが、報酬が必要だと聞いて止める。そんな霊夢に刃が呆れる。

「萃香が寝ぼけてミッシングパワーを暴発したから、壊れた家具の修繕費に家計が厳しいのよ……」

「萃香？」

「あゝ」

聞き慣れない名前に刃とマリアが首を傾げ、魔理沙達は遠い目をして納得する。

「ああ、幻想郷に住む鬼の一人だ」

「鬼？」

（六道兄弟の他にも鬼がいたのか……）

首を傾げているマリアと刃に、魔理沙は萃香の事を説明する。

「とにかく、今夜は明日に備えて休むとしますか」

「あ、霊夢さん達も手伝ってくださいね」

「なんで私が……」

「いや、やります。やらせてください」

霊夢は渋るが、マリアの笑顔を見て陥落してしまっ。

マリアスマイル、おそろべし。

こうして霊夢達はマリア宅に一晩お世話になる事になったのであった。

翌日

「じゃ、ミッドガルドに行くとしますか」

各々の武器を構え、意気込む霊夢達。

「霊夢さん達の服は、昨夜に直しておきました」

「ありがとうございます」

「それと、ミッドガルドには私もお供します。」

この森で採れたハーブや木の実を届ける為に、ミッドガルド行かなければならないので」

「大丈夫なんですか？」

同行を志願するマリアに早苗は心配する。霊夢達はともかく、か弱そうなマリアが道中で妖怪に襲われやしないか、と。

「心配いらん。マリアを傷付けた者はミッドガルドの機兵共に総攻撃を受けるから、ここの妖精共もマリアを襲いはせん」

「うわ、何だよそれ」

「ま、機兵達を指揮する整備士がマリアの友人だからな」

「あはは……」

刃の発言に魔理沙は呆れ、マリアは申し訳なさそうに苦笑する。

「ま、いいわ。皆、ミッドガルドに行くわよ！」

こうして、霊夢達は満を持してミッドガルドに向かって行った。

その頃、ミッドガルド西門

閉ざされた門を見上げ、鳴り響くサイレンに顔をしかめる二人の少女がいた。

一人は緑の服を着ており、白髪に黒いリボンを付けている小柄な少女。腰には二本の刀を携えており、かなり使いなれている様子。

もう一人は金髪で肌が薄く、人形のような雰囲気を持つ少女。小脇に魔導書を携え、傍らには小さな人形が浮遊している。

この二人の名は魂魄妖夢とアリス・マーガトロイド。

妖夢は白玉楼の庭師、アリスは魔理沙と同じく魔法の森に住む魔法使いである。ちなみに、アリスは人間から妖怪になった魔法使いである。

彼女達は幽々子と神綺に命令され、霊夢達の手助けをする為に夢幻界に来ていたのだ。そこで、人間が住む町を発見して立ち寄りうとした。

しかし、今ミッドガルドは外界からの侵入者に対して警戒中の為、妖夢やアリスが近付いた事で警備システムが作動し、今に至る。

「アリスさん、何だか嫌な予感しかしませんね……」

「奇遇ね。私もよ……」

そうこう言っている間に、門の方から数十体の人型が現れ、妖夢とアリスを取り囲む。

その人型は、頭はヘルメットで覆われており、全身は灰色のタイツ、肩や胸、肘、膝、腕、脚にはプロテクターの様なものを装着している。手には拳銃に刃物を付けた武器、銃剣が握られており、ピコピコ鳴らしながら妖夢とアリスを睨み付ける。

妖夢とアリスは背中合わせになつて臨戦体勢をとる。

「この世界の兵士でしょうか？」

「でも、おかしいわ」

周りを警戒しながら、アリスは疑問を持つ。

「こいつらから、命というものが感じられない。

まるで、人形みたいなの……」

「ターゲット確認。見た目は少女だが、妖怪が変化したと思われる二人を発見」

「その女二人、人間の町ミッドガルドに何をしに来た？」

「直ちにここから立ち去れ。さもなくば、直ちに排除するのみ」

人型達は銃剣を向けながら、口々に妖夢達に語りかける。

「どうやら町に入る為には、こいつらを倒さなければならぬみたいですね……」

「そのようね……」

妖夢は楼観剣を引き抜き、アリスは数体の人形を取り出して構える。

「!?」

なるほど、退く気はないのか。ならば排除するのみ!!」

妖夢達が戦う姿勢に出たのを見て、人型達は妖夢達に襲い掛かった。

「はあっ!!」

「な!?!」

妖夢は人型に向けて袈裟斬りを放ち、人型を斬る。

楼観剣は人型の身体を難無く切り裂き、人型の身体から黒い液体が飛び散る。

これにより、一瞬勝ち誇った表情をする妖夢だが、次の瞬間に驚愕の表情に変わる。

「な!?!」

なんと人型の切り口には、肉体ではなく機械が見えていた。

斬られた人型は、ギギギギという耳障りな音と共に倒れていく。

「これって……」

「ロボット!?!」

ここで初めて、自分達が戦っているのはロボットだと気付く妖夢と

アリス。

人型、ロボット達も仲間が斬られた事に驚きを隠せなかった。

「な！？仲間が斬られた！？」

「我々の装甲を容易く斬る事が出来るとは、侮れない奴らめ……」

これにより、互いに相手を警戒する双方。

マリアを連れてミッドガルドに向かう霊夢達。

ミッドガルド西門でロボット達の襲撃に合う妖夢とアリス。

両チームが会う時、事態は更にややこしくなってしまう事を、この時は誰も予想できなかった……。

第九話 邪念滅殺『純粹すぎる笑顔』（後書き）

ロボット軍団に立ち向かう妖夢とアリス。

そこへ、大剣を携えた機械の騎士が立ちはだかる。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

鉄人『鋼の剣豪』

霊夢「今回は少し遅かったわね」

白米「私も多忙なものですからね。次回からは二週間更新が遅れる事もあるかもしれませんが……」

魔理沙「しかし白米よ。オリキャラの出し過ぎると、収集がつかなくなるという事を聞いたんだが？」

白米「いや、異世界が舞台な訳ですからオリキャラの数が多くなるのは当たり前です。」

そもそも、収集付かなくなるなら最初からやらないですし」

魔理沙「それもそうだな」

白米「異世界だからこそ、『流石に幻想郷ではそれは無理』な事もできますし。」

ロボットにしろ、海の妖怪にしる」

早苗「今回はロボット達の登場ですね

それでは感想・質問を引き続き受け付けます」

白米「私に対する質問でもいいですよ。

ただし、プライベートやプライバシーに関する事は答えられませ
るので悪しからず」

マリア「それでは次回をお楽しみに。

バルサミコ酢」

霊夢「ちよ、声ネタ!?!」

第十話 鉄人『鋼の剣豪』（前書き）

今週の海賊戦隊ゴーカイジャーはオーレンジャー編。

オーレンジャーは私の幼少期にやっていた戦隊ヒーローで私は当時ハマってました。しかし、周りの評価が低かったのは辛いです……。あれは、オーレンジャーが悪いんではありません。世の中が悪かっただけなんです！

しかし、まさか本編で『虹色クリスタルスカイ』が流れるとは、ファンには嬉しいサービスです！GJ、スタッフ！

おっと、オーレンジャー談議はここまで。

東方双界伝、ゆっくりして行ってね！

第十話 鉄人『鋼の剣豪』

ミッドガルド西門

妖夢とアリスは機兵達と戦闘していた。

機兵達は基本的に銃剣ガンブレードを使用する者が多いが、中には盾と剣を装備したタイプ、マシンガンマシンガンを乱射するタイプ、バズーカバズーカを使用するタイプ、爆弾を投げつけてくるタイプ等、様々である。
更には、

「俺のドリルで天を突けええ!!」

「月ッッ おおお蝶おおである!!」

「T-Link ツコオオ!!」

「デュナス、目標を狙い撃つぜ!!」

「ライオン イフーン!!」

何処かで聞いたようなパロディを囃まして来るロボットもいた。

「呪符『ストロードールカミカゼ』!!」

「六道剣『一念無量劫』!!」

アリスは大量の藁人形を機兵達に向かって飛ばし、機兵達を呪いをかける。

妖夢は自分の周囲を素早く八角形に斬り、囲んできた機兵を斬り飛ばす。

「魔符『アーティフルサクリフェイス』!!
それ!!」

アリスは次に火薬を仕込んだ人形を投げつける。人形は機兵にぶつかると爆発してしまう。

「幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』!!
はあっ!!」

妖夢はスペルカードを宣言すると瞬時に横斬りを繰り出し、斬った跡が弾幕となって機兵達に襲い掛かる。

「「「ぎゃああああ!!?」」」

「「「うわああああ!!?」」」

「「「オ・ノーレ!!!」」」

アリスと妖夢の弾幕に呆気なく吹き飛ばされる機兵達。

残った機兵も、二人の強さにたじたじになる。顔を見合わせて困り果ててしまう。

「さて、まだ戦う気かしら?」

「とりあえず、全部斬ってみますか?」

「「「ひiiiiiiii!!?」」」

一歩一歩迫ってくるアリスと妖夢に、機兵達は抱き合ってガクガクと震える。

その時、

「超絶『ナイトキック』!!」

突然、上から掛け声が聞こえてきた。

「「うわああ!?!」」

上を見ると、妖夢達目掛けて何者かの飛び蹴りが迫って来ていた。驚き回避する二人だが、飛び蹴りが地面に直撃した瞬間に爆風が広がり、大量の土煙が舞う。

「う!?!」

「何者!?!」

突如現れた新手に、アリスと妖夢は警戒する。

土煙の中でジャキツと鎧が歩いた様な音がして、土煙の中で何者かが立ち上がる。

「私の部下達を、これ以上手を出させはしない……」

「……た、隊長!?!」

土煙の中に響く声に、機兵達は歓喜の声を上げる。

土煙が晴れ、新手の姿がハッキリと見えて来る。

新手の正体は、西洋の騎士を彷彿させる鎧騎士の姿をしたロボットだった。

太陽光で輝く銀色の身体。堅牢で逞しい機械の筋肉。頭から伸びる金髪エクステの付け毛。威風堂々とした風格。

え、説明しすぎ?

仕方ないでしょう。私、ロボットが好きなんだから。

ともあれ、鎧騎士は腕組みをして、妖夢達に言い放つ。

「これ以上、私の仲間を傷つける事は許さんぞ」

「貴方は一体……」

「私の名はアルバート。」

ミッドガルド守護機兵部隊メタルガーディアンズ隊長、アルバート・エースだ!」

鎧騎士、アルバート・エースは名乗り、特撮ヒーローの様なポーズをとる。

「隊長って事は、貴方がロボット達のボスね」

「どうかな？それよりも、ミッドガルド襲撃と私の部下を殺した罪、晴らしてもらおうぞ！！」

「……いや、死んでません隊長。気絶してるだけですから」「」

勝手にやられた部下を死んだ事になっているアルバートに機兵達は一斉につっこむ。

「斬鋼剣キングダムカリバーン！」

部下のツツコミなどどこ吹く風、アルバートは背中に背負った大剣の柄を掴んだ瞬間、紫色の鞘が分裂して銀色の刀身が露になる。大剣を振り回し、その切っ先をアリスに向けるアルバート。

「夢幻一刀流の剣技、その身で篤と味わえ！！」

「く、人形『ドールズウォー』！！」

相手が強敵と瞬時に判断したアリスは、大量の人形をアルバートに向かつて突撃させる。

「斬鋼剣『千人斬り』！！」

アルバートはスペルカードを宣言すると、アリスが放った人形の軍隊に大声を上げながら突っ込む。

「うおおおおおおおおおおおお！！！！」

そして、開幕の一太刀で十数体の人形を斬り捨て、返しの大刀で更

に数体を両断する。

人形達が一列に並んで突っ込んで来れば、突きで纏めて串刺しにしてしまう。かといって、周囲を取り囲んでも回転斬りで薙ぎ払われしてしまう。

後ろから人形が槍を構えて突撃するもアルバートは、人形を掴んで前方に投擲。人形達はぶつかり合い、自分達の武器で共倒れになってしまう。

「はっ！！」

「はあああああ！！！！」

鎧の巨体にも関わらず、軽々とジャンプして人形達の突撃を躲す。更に大剣を振り回しながら突撃して人形の数を減らしていく。

「くっ！？」

（人形が足りなくなる！？）

焦ったアリスはアルバートの周りに残った人形を囲ませる。

しかし、それが過ちだった。

「チエストオオオオオオオ！！！！」

アルバートは掛け声を上げながら大剣を振り回し、三回転。哀れ、アリスの人形は一つ残らず両断された。

余りの出来事に、アリスはショックを受ける。

「そ、そんな……!?!」

「おお!!流石は隊長!」

「隊長は暴走した千体のゴーレムをたつた一人、大剣一つで薙ぎ払った伝説があるんだ!」

「ちょ、何その武勇伝!?!」

機兵達はアルバートの活躍に歓喜の声を上げた。

妖夢は一体の機兵が話したアルバートの武勇伝につっこむ。

「私の人形達が全滅なんて……」

「アリスさん、下がってください!」

切断された人形を手にとって嘆くアリスの前に、妖夢がアルバートに剣を向ける。

「二刀流か、面白い!」

アルバートも大剣を構え、妖夢と対峙する。

そのまま両者睨み合い、相手の動きを待つ。余りの緊張感に、誰もが息を飲む。

数十秒間睨み合った後、妖夢とアルバートは同時に走り出してスペルカードを発動する。

弾幕を打ち消しながら妖夢に迫る。

「って、わああああ！!?」

間一髪、マトリックスよろしくに身体を反らして避ける妖夢。大剣は明後日の方角に向かって飛んでいく。

「ちよ、自分の武器を投げるなんて正気なの!?!」

動揺の余り、敬語ではなくなっている妖夢。

アルバートは左手で右の二の腕を掴み、右手を拳にして妖夢に向ける。

「ターゲット、ロックオン」

アルバートは妖夢に狙いを定めると、右肘から煙が噴出する。

「鉄拳『ロケットナックル』!」

なんとアルバートの右腕が肘から分離、ミサイルよろしく妖夢に向かって飛んできた。

「て、うわああ!?!」

妖夢は飛んできた腕を横転して回避。腕は遠く離れた所に落ちた大剣を拾うと、アルバートの下に戻って右肘に元通り装着された。

「ちよ、そんなのありですか!?!」

「そう言われてもな。腕を飛ばせる様に造られたから仕様が無いだろっ?」

「く、ならば……」

妖夢がスペルカードを構えると、周囲が月夜の草原の風景に変わる。

「『待宵反射衛星斬』!!」

低く構えての一閃、月光を反射する回転鋸のような弾幕がアルバートを襲う。

「キングダムカリバーン、Maximum Drive!!」

それに対してアルバートは大剣を頭上に構え、大剣に力を込める。大剣の刃が光り輝き、アルバートは大きく振りかぶる。

「斬空剣『ネオソニックブーム』!!」

アルバートが勢いよく大剣を振り下ろすと、大剣から巨大な衝撃波が発射される。衝撃波は妖夢の弾幕を飲み込みながら向かって来る。

「く、らああああ!!」

一度は驚いた妖夢だが、即座に楼観剣を構えて衝撃波を斬り裂く。

「なんだと!?!」

「『ええええええ!!?!』」

まさか斬られると思わず、驚くアルバートと機兵達。

「妖怪が鍛えたこの刀に、断てぬものなどあんまり無い！

（よ、よかった。斬れなかつたらヤバかった……）」

刀を縦に構えて決め台詞を言う妖夢だが、内心はかなり焦っていた。

「今のはアルバートさんの『ネオソニックブーム』！？」

一方、ミッドガルドに向かっていた霊夢達は、西門辺りで弾幕勝負が発生している事に驚き、遠くで様子を伺っていた。

そしてマリアは見覚えある弾幕を見て声を上げる。

「アルバートって、誰？」

「ミッドガルドのロボット達のトップに立つ、騎士型ロボットだ。大剣使いでかなりの実力者だ」

橙の疑問に答える刃を他所に、弾幕勝負を見ていた霊夢は冷汗をかきながら呟く。

「ねえ、その隊長が今出ているって事は、それなりに強い奴と戦ってるって事よね？」

「そうだな」

「マリア。この夢幻界に、ミッドガルドに侵入する為にロボットに立ち向かう奴はいるの？」

「いえ、悪戯好きなピクシー以外はそうそういませんよ？」

あ、しかしピクシー程度でアルバートさんが出るのもおかしいですね？」

「て事は、私達みたいにロボットの強さを知らない奴が、あそこでロボットと戦っているって事よね？」

「なあ、何が言いたいんだ？」

余りにも回りくどく言う霊夢に、魔理沙は苛立って問い掛ける。

「つまり、私達の他にも幻想郷から来た奴が、ロボット達に襲われているんじゃないか……」

「」「……」「」

「急いであの弾幕勝負を止めるぞおおお！……！」

「てか、これでは私達がマリアさんに会いに行ったのが無意味になるじゃないですかあああ……！」

「どうしてこうなった」

「しみじみ言っている場合ですか！？早くアルバートさんを止めないよ……！」

次の瞬間、我先に弾幕勝負現場に急ぐ霊夢達であった。

「人鬼『未来永劫斬』!!!」

「うぐっ!?!」

スペルカードを宣言し、アルバートを空中へ斬り飛ばす妖夢。

「はあああああ!!!」

「はあっ!!!」

「ぐ!?!?うおおっ!?!?!」

そのまま空中で高速の連続斬り、最後に斬り上げてフィニッシュする。大剣でガードするが強烈なコンボに吹き飛ばされるアルバート。

「嘗めるな!!!」

直ぐさま体勢を立て直し、妖夢に向かって大剣を振り下ろす。

「大切断『ダイナミックブレード』お!!!」

「うおおあ!?!」

大剣を両手で持ち、落下の勢いを利用して斬り掛かって来るアルバート。

妖夢は慌てて回避するが、空振った大剣が地面を真っ二つに砕く。

「く!?!?」

「……………」

武器を構え、再び睨み合う妖夢とアルバート。

「た、隊長……………」

「く……………」

激化する妖夢とアルバートの弾幕勝負にアリスと機兵達はただ見守るしかなかった。

しかし、

「その弾幕勝負、待ったああああ!!!」

大声を上げながら突っ込んで来る少女達。

無論、霊夢達である。

「マリアさん!?!?」

「刃!?!?」

「霊夢に魔理沙!?!?何処かですれ違ったのかしら?」

霊夢達の突然の登場に、アリスと機兵達は驚く。そして、早苗とにとり、文は機兵達を見てテンションを上げる。

「わー！これがロボットですか！？格好いいです！」

「へー。人型でこんなに動けるなんて、夢幻界の技術は凄いねえ」

「明日の記事は『夢幻界のロボットは全身タイツ』で決まりですね！」

「な、なんだこの人達は？」

「じ、実は……」

マリアと刃は困惑する機兵達に霊夢達の事を説明し、霊夢達はアリスに事情を問い質していた。

「博麗大結界に影響を起こす程の能力を持っているのは並の妖怪じゃないと思っただけ、神綺様の命令もあって妖夢と一緒に貴女達の援護に向かったのよ」

「へー、私達を心配してくれてたんだ」

「勘違いしないでよね。私個人、異変の黒幕がどんな奴か気になっただけだからね」

感心する魔理沙にアリスはツンデレっぽい発言をする。

「て、こんな事している場合じゃありません！」

早くアルバートさんを止めないと……って、キャア!？」

弾幕勝負を止めようとするマリアだが、流れ弾が飛んできてとてもじゃないが近付けない。

「ちょ、その鎧のアンタ！ 私達は夢幻界をどうこうする気はないの！！」

妖夢も話を聞きなさい！！私達は敵同士じゃないの！！戦いを止めなさい！！

聞いてんの！！」

「駄目だ。双方戦いに夢中で気付いていない……」

霊夢は叫んで妖夢とアルバートに事情を説明しようとするが、戦いに夢中になっている二人には届いていないようだった。

刃も呆れる中、二人の弾幕勝負は続いていく。

「ここまで追い込まれるとは、中々やるな。貴様、名は？」

「……妖夢。」

魂魄妖夢。白玉楼の庭師です」

「妖夢か……良い名だ。」

貴様の剣の腕に敬意を込めて、私の奥義を見せよう！！」

アルバートが最後のスペルカードを取り出すと、晴れていた空に暗雲が立ち込めていく。

「ま、まさかアルバートさん……」

「アレだ！隊長があのラストスペルを使うぞ！！」

「く！霊夢、下がれ！！巻き込まれるぞ！！」

アルバートをよく知る夢幻界の住民は焦り、霊夢達を連れて避難する。

アルバートの大剣に光が集まり、周囲の空気が震える。

「はあ！」

アルバートが大剣を上空へ突き出すと、暗雲から落雷が放たれてアルバートに直撃する。

雷を纏い、アルバートの大剣は10mもの光の刃を持つ稲妻の太刀と化した。

「……なるほど。」

「ならば私も全力で相手をします！」

妖夢は楼観剣を納め、白楼剣を両手に持って力を溜める。

白楼剣に青白い霊力が集まる。

二人は同時にスペルカードを宣言し、それぞれの武器を相手に向かって振り下ろす。

「雷光一闪『ライティングブレイカー』！！」

「断迷剣『迷津慈航斬』！！」

雷と靈力がぶつかり合ってスパークを起こり、周囲に嵐が巻き起こる。

そして。

パキイン

「!?!」

「な!?!」

弾幕の激しさに、二人の剣が折れてしまったのだ。

「私の白楼剣が……!」

「私の斬鋼剣が……!」

折れた愛剣を見て呆然とする二人だが、キッと互いに睨み合う。

睨み合いが数秒続いた後、二人は自分の右手を相手に突き出す。

霊夢達はギョツとした。

武器が壊れたのに、あの二人はまだ戦う気なのかと思い、焦った。

しかし、

ガシツと握手を交わす妖夢とアルバート。

「見事だ、妖夢」

「アルバートこそ」

予想外の展開に、困惑して顔を見合わせる霊夢達と機兵達。
どうやら剣士同士、意気投合したらしい。

「幻想郷に、君の様な剣士がいたとは驚きだった」

「いえ、私なんてまだ半人前です。アルバートに勝てたのは運が良かっただけです」

「ははは。運も実力の内、そう謙遜するな」

「あの〜、盛り上がっている所悪いんだけど……」

意気投合して早々、親しく会話する二人に、霊夢は声をかける。

「あんた達、まさか私達の声が聞こえてたんじゃあ……」

「あ、申し訳ない。聞こえてはいたんですが……」

「何分、妖夢との戦いが楽しくなっちゃってしまっただけ」

拳をワナワナと震わせて睨みつける霊夢に、頭をかいて軽く謝罪する妖夢とアルバート。

実は二人とも、互いが敵では無いと霊夢達の叫びで知ったのだった。しかし、折角同じ剣士同士の弾幕勝負だったため、敢えて聞いてなかったフリをしていたのだった。

「ふざけるなああああ！！！」

「「ぎゃああああああ！！？」」

しかし霊夢がそれを許すはずもなく、二人仲良く八方鬼縛陣で吹き飛ばされた。

何はともあれ、こうして晴れてミッドガルドに入れる様になった霊夢達であった。

第十話 鉄人『鋼の剣豪』（後書き）

アルバートの案内で、ミッドガルドの中に入る霊夢達。

幻想郷とは違った文化に、霊夢達は目を奪われる。

個性豊かな夢幻界の住民は、果して霊夢達をどう思うのか？

次回、東方双界伝 〈 Another Fantastic
World .

人間街『ミッドガルド』

霊夢「パロディと声ネタが多すぎだあああ！！！」

魔理沙「これは酷い」

白米「ええ、流石にやり過ぎですね。しかし、後悔はしていません」

アリス「私の人形は私が作り直すからいいけど、妖夢とアルバートの剣はどうするのよ。折れちゃったじゃない」

白米「ご心配無く。次回、ある人物が妖夢達の武器を直すので」

アリス「なんか不安ね……」

妖夢「それでは引き続き感想、質問の受け付けています。次回もお楽しみに！

我が楼観剣に、断てぬものはあんまり無い！」

第十一話 人間街『ミッドガルド』（前書き）

夢幻界生物図鑑

「ウンディーネ」

ドリアートと同じく『ニンフ』に分類される妖精。

主に川や湖等の水辺に棲息しており、身体は水でできている。一応ブライドの高い性格だが、人間に恋をする事がある。しかし、ブライドが高い故に嫉妬深く、裏切った人間（特に浮気した人間）には死を与える。

第十一話 人間街『ミッドガルド』

夢幻界 ミッドガルド

そこは一言で言えば古代ローマの町の様な場所だった。

白亜の床に石造りの家。家の屋根には猫や鳥など、様々な石像が彫られている。

道路には馬車が走り、道路の端には行商人が商売している。

道行く人々は洋服を着ている者が多く、和服を着ている人はほんの少しだけだった。

人間の他にも、人間に好意的な妖怪や妖精の姿が見られた。

中には、額に赤い宝石を付けた猫の様な妖怪、カーバンクルを連れて歩く少年もいる。ペットとして飼っているのだろう。

他にも機兵達とは姿が違うロボット達も歩いており、人間と普通に会話するものもいる。

「ほへへ。ここがミッドガルド……」

「幻想郷の人間の里とは大違いね」

「ろ、ロボットが……ロボットがあんなに……!!」

「凄い。凄すぎるよ夢幻界！」

「にゃあ、幻想郷では見かけない妖怪もいるね」

「あややや。新聞のネタが多すぎて困ってしまいますね。メモメモ……」

「これだけ妖怪に寛大な人間が多いなんて……信じられないわね」

「表の警備が嚴重な分、人々も安心して暮らせるのでしょ」

ミッドガルドの風景を見て、各々の感想を呟く霊夢達。

ちなみに、上から魔理沙、霊夢、早苗、にとり、橙、文、アリス、妖夢である。

そんな霊夢達に、アルバートが声をかける。

「君達に侵略・略奪の意思が無いとわかった為、警戒体勢は解いておいた。」

次からは幻想郷からの訪問者を通すようにしている」

「いいの？幻想郷の者には、よからぬ事を考えている奴もいるわよ？」

「ミッドガルド内にも多くの機兵や妖怪達がいる。ミッドガルドをあだなす者はそいつらの総攻撃を受ける」

「なら、安心ね」

アルバートの対応に疑問を抱く霊夢だが、それに対する対処法を聞いて安心する。

「うむ。それから、霊夢達が宿泊する場所を案内する。ついて来い」

「では、拙者はこれにて。御免」

道案内をアルバートに託した刃は素早い動きと跳躍で、あつという間に建物の向こう側に消えてしまった。

「あ、行っちゃった……」

「刃さんの事だから、きっと依頼主の所まで戻ったのでしょう」

「道案内の時に金を要求した事もあるけど、遅しいわねあいつ」

あつさりと素早く帰って行った刃に、霊夢は呆れて苦笑いをする。

「霊夢。あいつの事は、今はほっとこうぜ」

「ええ。刃さんの連絡先を聞いておいたので、また会えますよ」

「いや、そういう意味じゃ……」

「てかブン屋、お前いつの間にかあいつから連絡先を聞き出した!？」

「昨日の夜です」

「あの時か……」

最速同盟、いつの間にか成立。

そんな会話を交わしながらも、ミッドガルドの街中を歩む霊夢達。

「ここが私達、メタルガーディアンズの本部だ」

アルバートが指差したのは、某怪獣退治の専門家シリーズに出てくる警備隊の基地の様な建物だった。

読者の諸君、想像してみよう。

もし、古代ローマ風の町に科学が進歩した基地が建っていたら……。

「不自然すぎるわあああ!!!!」

余りにもミスマッチな風景に、魔理沙は思わずアルバートに飛び蹴りを噛ます。

しかし、相手はロボット。効くはずも無く、逆に足を痛めてケンケン歩きになる魔理沙だった。

「ん？どうした？」

「な、何でもない……」

振り返って魔理沙を心配するアルバートを睨みつけながら痛みを苦しむ魔理沙。

呆れながらも魔理沙に肩を貸す、霊夢とアリスだった。

そんなこんなで、メタルガーディアンズ本部に入る霊夢達。

中は会社のオフィスみたいになっており、受付嬢がいるカウンター（受付嬢は人間）がまず目に入ってくる。

人間や妖精、機兵が中を徘徊しており、中には親しく談笑している者もいる。

アルバートが受付嬢に霊夢達の身元を伝えて立ち入りの許可を申請している間、霊夢達は周りを見渡していた。

「それにしても色々なロボットがいるわね」

「そうですね」

霊夢は基地内で働く様々な形のロボットを見て感心し、早苗は目を輝かせながら相槌を打つ。

箒やモップを持って掃除をしている、下半身が車輪になっているタイプ。訪れた来客を案内する、浮遊するボール型タイプ。

変形してカートになり、子供を乗せて走るロボットなど、いろいろなロボットが基地内をうろついていた。

「待たせた。行くぞ？」

ここで、申請を済ませたアルバートが声をかけ、霊夢達はアルバートの案内で基地内に足を踏み入れる。

「ここが我々ロボットを作った整備士がいる部屋だ」

アルバートが指差す扉には、『夢幻界一の機兵整備士様の部屋』、
『関係者以外立入禁止』とでかでかと書かれていた。

「…我が強そうな人が住んでそうですね……」

「ああ……しかし、腕は確かだから安心してくれ」

扉の文字に呆れる妖夢にアルバートは指で頬をかき、苦笑する。

「そ。だったら遠慮無く」

「ちょ、霊夢さん!?!」

「邪魔するわよ」

アルバートの説明に手をひらひらしながら扉を開けようとする霊夢に、マリアは批難の声を上げる。

それを無視して、霊夢は扉を開ける。最も、自動ドアなので勝手に開いたのだが。

しかし、

「貴様かああああ!?!アタイのアルバートに傷を付けた馬鹿野郎はああ!?!」

という怒声と共に、ミサイルが飛んできた。

「「「ぎゃああああああ!?!」」」

いきなりの攻撃に、一同は左右に別れて飛んでミサイルを躲す。

ミサイルは壁に着弾し、基地内に警報が鳴り響く。

「ちよ、何よ今の攻撃!？」

「アルバート! 私達が敵じゃないって報告したんじゃないの!？」

「そ、そのはずだが……」

大声でアルバートを責める霊夢だが、アルバートも首を傾げてこの状況に驚いていた。

そして、ミサイルを発射した張本人が部屋から出てきた。

灰色の作業服を着こなし、ゴーグルをかけた緑髪の女性。緑色の髪からは野兎の様な耳が生えている。ミサイルランチャーを肩に担ぎ、ゴーグル越しに赤い瞳が霊夢を睨んでいた。

「誰、あの人？」

「グリム・エアスター整備士。

「夢境界でロボット製造・整備を行っているグリムリンの技術者だ」

「グリムリンって、飛行機事故を起こす妖怪ですよね？」

「よくもアタイのアルバートに傷を付けてくれたなあ!! 貴様をアタイ好みのサイボーグに改造してやるうか、ああん!？」

にとりとアルバート、早苗の文の会話を他所に、緑髪の女性、グリムはミサイルランチャーを乱暴に放り投げると、巨大なドリルを取り出して霊夢に迫る。

「どうやら、霊夢がアルバートを倒したと勘違いしているらしい。」

「天元突破『ギガントドリル』!！」

「うわああああ!?!『二重結界』!?!！」

ギューイーンと機械音を鳴らして迫って来るドリルを二重に張った結界で防ぐ霊夢。

「はん!舐めるな!！」

グリムがドリルを持つ手に力を込めると、ドリルの回転速度が更に上がって結界にヒビが入る。遂には粉々に砕け散ってしまう。

「嘘お!?!」

「止めだ!！」

「グリムさん、止めてください!！」

しかし、マリアが霊夢を庇うように飛び出した為、グリムの攻撃が止まる。

「な!?!マリア、何故ここに!?!」

「今頃気付いたのかよ」

マリアを見て驚くグリムに魔理沙がつっこむ。

「グリム整備士。私は別に傷をつけられても、どうという事はないぞ?それは私を造った貴女が一番分かっているはず」

「そ、それもそうね……」

アルバートに窘められ、グリムは顔を赤くして反省する。

「『カエルの子はカエル』ってか」

西門で妖夢との戦いに夢中になったアルバートの事を思い出し、魔理沙はしみじみと呟く。

「では改めて、アタイはアルバート達ロボットの製造・整備を担っているグリム・エアスターだ。先程は申し訳ない」

グリムは自己紹介しながら、霊夢に謝罪した。

「本当よ。マリアがいなかったら風穴開いていたわ……」

「すまない。私の方からも謝らせてくれ」

「いや、別にあんたまで謝らなくても……」

愚痴をこぼす霊夢だがアルバートも頭を下げだした為、慌てて宥めた。

「私も技術者だからグリムの気持ち分かるな」

「それにしても、いきなりミサイルを発射してドリルで突っ込んで来るのはやりすぎじゃあ……」

「何を言う！夢幻界のロボットは皆、我が息子に娘、兄弟、姉妹、

孫、家族、恋人、嫁！」

「意味が分かりません……」

にとりはグリムに共感するが、逆に呆れるアリス。そんなアリスに力説するグリムだが、妖夢につっこまれる。

「特にアルバートは、アタイの将来の旦那になる存在なの／＼」

「グリム整備士、機械と生物が交際するのは不可能だ」

「愛に種族など関係ない!!」

「……………」

頬を染めながら擦り寄るグリムに、アルバートは呆れて距離を置く。生物と機械が交際するのをアルバートはあまり良しとしないのである。

「…………えっと、どういう事？」

状況が読めず、橙が首を傾げる。最も、いち早く理解した霊夢とアリス、妖夢はただ苦笑いをしているが。ここで文がグリムに質問をする。

「あー。という事は、グリムさんはアルバートさんにホの字と」

「はっはっは。そういう事ね」

「…次回の号外は、『妖怪とロボット、禁断の恋』と…………」

「書くな」

文の文花帳を取り上げ、自分が新聞のネタにされるのを防ぐアルバート。

その後、文花帳をシュレッダーにかけて、アルバートはグリムに修理される。文花帳が紙屑になった瞬間、文が悲鳴をあげたの言うまでもない。

アルバートの装甲を外し、中身のコンピュータやら部品を手慣れた手つきで点検するグリムに、霊夢達は感心する。主ににとりが。

「へー。手際がいいね」

「アタイ達グレムリンは妖精の中でも機械弄りが得意な種族でね、これくらいは朝飯前さ」

「あ、グレムリンは妖精なんだ。てつきり悪魔の類だと思っただぜ」

「それは人間が勝手に決め付けた事よ」

にとり、魔理沙と会話しながらも、手を止めずに作業を続けるグリム。

グレムリンは本来、人間の発明や機械技術を支援する友好的な妖精だった。

しかし、月日が経つに連れて、人間達は妖精や妖怪を幻想の産物と跳ね退け、グレムリン達の恩恵で発達した文化を自分達の技術によるものだと勘違いし、傲慢になってきた。

それに怒った多くのグレムリンは、飛行機事故を起こして人間達と対立。一方で未だに人間の事が嫌いになれないグレムリン達は、巻き込まれる事を懸念して夢幻界に避難してきたのだ。

「夢幻界に来てからはアタイ達グレムリンは腕を磨き、遂には人工知能で自立するロボットを開発するようになったのさ」

作業が終了し、ポッキーを口に加えながら説明するグリム。有名な話だが、グレムリンはお菓子が好きである。

「中でもアルバートはアタイの最高傑作。両腕はロケットパンチを装備、額からはレーザー、夢幻一刀流剣術の他に様々な武術を習得している。」

その気になれば、料理・洗濯・家事もできる」

「機械を便利道具の様にするのは止めてくれないか」

頬に手を当てて惚気、あるいは親バカを炸裂するグリムに、アルバートは起き上がってつつこむ。

その身体は、数分前に妖夢と弾幕勝負をしたとは思えない程、綺麗に直っていた。グリムの技術の高さが伺える。

「後は自分が信じる正義の為に行動する精神。
これはアタイの付けた機能じゃないけどね」

「どういう事？」

「アルバートが自分から考えて付けた機能なんだ。言わばアルバートの意思って事だね」

グリムの話にアリスはアルバートの方を見る。

人形使いである彼女は、主人の命令を聞かずとも、自分で考えて自分で行動する完全自立した人形を作る事が夢である。

その為、妖怪化しないで完全自立するロボットに、アリスは少なからず興味を持つ。

「詳しく聞きたいわね、ロボットの事」

「アリス、お前もロボットオタクに？」

「そんなわけないでしょ」

妙な勘違いをした魔理沙にアリスは即座につっこむ。

「さて、アルバートの身体は修理できたけど、問題は武器だね」

「妖夢の白楼剣も修理しなくてはな」

折れた白楼剣と斬鋼剣を見て、グリムとアルバートは言う。

「グリムが直してくれるんじゃないの？」

「アタイは機械専門だから鍛冶は専門外」

にとりはグリムに訊くが、グリムは首を横に振る。
そして、アルバートはため息を吐いて口を開く。

「……仕方が無い。殴られるのを覚悟して行くしかあるまい」

「行ってくつて何処に？」

「私の斬鋼剣を作った鍛冶職人の所だ」

某所

「依頼完了」

「……苦労さん。ほら、約束の報酬だぞ」

霊夢と別れた刃は青い衣装を纏った緑色の長髪の女性から封筒を受け取る。封筒を開けて中身を確認すると、満足そうに懐にしまう。

「で、どうだい？魔理沙達の強さは」

「真壁に勝てた辺り、流石と言えるな。射命丸殿も中々の早さだった。」

本気で戦えば、拙者が勝てるかどうかはわからん」

「そうかい。それはよかった」

「では、拙者はこれにて」

会話も早々、女性に背を向けて去ろうとする刃。

しかし、何かを思い出したかのようにふと立ち止まると、女性に問い掛ける。

「そういえば、霧雨魔理沙には会わないのか？」

あれは貴様の弟子だろ？」

「いや、まだ会うには早いな。」

あいつらがこの世界の事をよく知るまでは、な」

女性の答えを聞き、刃は一言言っただけで飛び去る。

「……ならば何も言うまい。また依頼があれば何時でも言ってくれ、

魅魔」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

女性、魅魔は笑いながらその場を立ち去った。

「う、うん。それがどうかしたの？」

「な、なんて羨ましい……………」

「……は？」「……」

霊夢の話聞いて、鼻血を押さえながら床を叩くグリムに、霊夢とマリア、アルバートは一斉に首を傾げる。

「なあアリス、グリムってもしかして……………」

「魔理沙、これ以上は言わない方がいいわ。何となく……………」

グリム・エアスター、レズ疑惑。

第十一話 人間街『ミッドガルド』（後書き）

妖夢の白楼剣とアルバートの斬鋼剣を直す為に、霊夢達はマリアと別れて『夢幻界一の鍛冶師』を自称する妖精がいる洞窟に向かう。

その妖精と出会い、剣を直すようお願いをする霊夢達。

その時、洞窟には恐ろしいモンスターが繁殖を行っていたのだった。

次回、東方双界伝 〈 Another Fantastic
World 〉

洞窟『俺たちや炭鉱労働妖精隊』

白米「取り合えず、拠点確保しました。これからはミッドガルドを中心に、霊夢達は各地を回ります」

霊夢「それにしても、オリキャラが多くなりそうだけど大丈夫？ソドー鉄道員さんからオリキャラ出演の依頼を承諾したんでしょ？」

白米「異世界が舞台ですから、そりゃオリキャラが多くなりますよ。これに音を上げる位なら、幻想郷を舞台にしますよ最初から」

霊夢「……確かに」

白米「本当の事を言うと、妖夢の刀が直るのは今回の話にしようか
と思いました。」

「
だけど、長くなりそうだからここで区切り、ついでに少し路線変
更」

全員「「「オイ」「」」

白米「こんな作者ですが、これからも応援していただければ幸いです」

アルバート「まったく……引き続き、感想・質問を受け付けるぞ。」

次回に向かって、駆けよトロンベ、その名の如く!!」

霊夢「声ネタ!?!」

第十二話 洞窟『俺たちや炭坑労働妖精隊』（前書き）

夢幻界生物図鑑

「カーバンクル」

額に赤い宝石の様なものを付けた、緑色の毛を持つ猫の様な妖怪。妖怪だが性格は穏やかで、非好戦的。その為、ペットして飼われることが多い。

額の宝石は、手にした者を富と幸運に恵まれると謂われる。その為、昔外界でヨーロッパの白人達に狙われていた事があり、それらの魔の手から逃れる為に夢幻界に避難してきた。

夢幻界の人々は妖怪を狩る事が無いため、カーバンクル達も平和に暮らしている。

第十二話 洞窟『俺たちや炭坑労働妖精隊』

弾幕勝負で破損した妖夢の白楼剣とアルバートの斬鋼剣を直す為、アルバートの斬鋼剣を作った人物の元に向かう事になった霊夢達。

「では、私は自分の仕事に戻ります」

「あ、そっか。森で採れたハーブや木の実を届けるんだっけ？
手間かけさせたわね」

「いえ、楽しかったですよ。では霊夢さん、皆さん、また縁があれば会いましょう」

「おう、またなマリア」

「道中、お気を付けて」

ここでマリアは自分の仕事に戻る為、霊夢達と別れる事になった。

その時グリムが、マリアが不審者に襲われないようにと100体のロボットを護衛に向かわせようとするが、アルバートの拳骨で未遂に終わった事は余談である。

ミッドガルドより北。

そこには、『紅蓮山』と呼ばれる幻想郷における妖怪の山と同じ様

な山があつた。表面は赤土に覆われ、秋には紅葉で真っ赤に彩られる為に『紅蓮山』と呼ばれるようになっていた。

その紅蓮山の麓には炭坑があり、ここではRPGではお馴染みのミスリル鉱がたまに採掘されるのである。ミスリルでは無くとも、銅や鉄、宝石の原石、特殊で珍しい鉱石などが採れる為、夢幻界では重宝されている。

そこにアルバートの大剣を鍛えた人物がいるという事でやって来た霊夢達は、アルバートやグリムの権限で難無く警備を抜けて、炭坑の中に入っていった。

中に入ると、逞しい体つきの炭鉱労働者の人間、大地の精霊であり地中に住み着く小人のノーム、緑色の肌をした小鬼のゴブリン、犬の頭に青く輝く宝石の様な瞳を持つ精霊コボルトなどが、互いに協力し合つて採掘作業を行っていた。

元々ノームは地中の財宝を守る精霊で、ゴブリンやコボルトは人間に悪戯をする妖精である。しかし、ミッドガルドの人々に様々な鉱石等を提供する代わりに、山や地中では手にする事ができない料理や衣服、生活必需品を貰う事で利害が一致した為、この様に協力関係にあるのだ。

中では世間話をしながら労働に勤しむ者や霊夢達に軽く挨拶する者もちらほら。

アルバートは、その中の一人の人間と何やら話をすると霊夢達の下に戻る。

「こつちだ。ついて来てくれ」

「それにしても、何か汗くさいわねえ」

「ははは……それ程皆働き者という事だよ。我慢してね」

鼻を摘みながら顰めっ面で周りを見回す霊夢に、グリムは苦笑しながら宥める。

アルバートの後を着いていき、炭坑内に作られた労働者達の休憩所を少し奥に進むと、頑丈に閉ざされた鉄の扉が見えてきた。中からは、鉄と鉄がぶつかり合う音が微かに聞こえてくる。

「ここだな。魔理沙、すまないが後ろの戸を閉めてくれ。開けた途端に音が洞窟内に響いてしまうからな」

「あ、ああ。分かったぜ」

アルバートの言う通りに後ろの戸を閉める最後尾にいた魔理沙。

アルバートは鉄の扉を開けようとして一瞬躊躇い、意を決して扉を開ける。

開けた瞬間に鉄の音が大きくなり、中には熔鉱炉の前で何かを鍛えている小柄な少女がいた。

赤いショートカットで黄色い瞳、左目の下に黒子があるかわいらしい顔。ぶかぶかなコートのせいで、体形がぼつちやり見える。少女が持つには不釣り合いな大きい金鎚を片手に、真剣な顔で鉄を鍛え

ていく少女。

やがて、鍛え終えた鉄を水に入れて冷まし、でき具合を確認する。満足いく仕上がりなのか、満面の笑みで鍛えた鉄を大切に収納していく少女。

「相変わらずいい腕しているな、ダイヤモンド」

「あら、アルバートにグリムじゃない。

……何だか見慣れない奴らがいるけど」

頃合いを見計らい、少女に話し掛けるアルバート。少女はアルバートとグリムを見て珍しそうな顔をするが、霊夢達を見ると怪訝な顔をする。

「ああ、彼女達は幻想郷から来た者達だ。皆、この方がこの炭鉱の責任者にして鍛冶師、ダイヤモンド・アームストロングだ」

「博麗霊夢よ」

「霧雨魔理沙だぜ」

「アリス・マーガトロイドよ」

「東風谷早苗です」

「橙だよ」

「魂魄妖夢と申します」

「河城にとりだ」

「清く正しい射命丸文です」

「文、お前の『清く正しい』は信用ならんぞ」

「それは言える」

「おお、アルバートさんと霊夢さん、酷い酷い」

順に自己紹介する霊夢達。アルバートは文の自己紹介にツッコミを入れるが、文はウザい顔して目を逸らす。

「ふーん。私はダイヤモンド・アームストロング。

この炭鉱の責任者で、夢幻界一の鍛冶師のドワーフさ」

「これまた私の強そうな奴だぜ……って、ドワーフ!? お前が!?!」

魔理沙が驚くのも無理は無い。

ゲームをやっている方なら分かるであろうが、ドワーフは髭面の小柄な男のイメージが強く、女のドワーフなんて聞いた事は無いであろう。

しかし、ファイナルファンタジー?では女のドワーフが登場する。知らない方は、ファイナルファンタジー?をLet's Play
ラリ。

「何よ!ドワーフに女がいたら悪いの!?!」

「いや、そうじゃないが……」

魔理沙のリアクションに気分を害して怒るダイヤモンド。対する魔理沙はタジタジである。

その後、未だに突っ掛かってくるダイヤモンドを宥めて、ダイヤモンドに霊夢達の事を説明するアルバートとグリムであった。

一方、炭坑の作業場の最深部。

ダイナマイトを設置して、壁を壊そうとしている二人の労働者の姿があった。一人は人間、もう一人はコボルトのコンビである。

頭にヘッドランプを付けて周囲を照らしながら作業する彼らは、あるものを発見する。

「あれ？こんな所に穴なんてあったっけ？」

「あ、本当だ」

炭坑内に設置してある照明に照らされていない所に、ポツカリと横穴が空いていた。覗いてみると、かなり暗くて奥深い。

すると、労働者のヘッドランプの光に反応して、横穴にいた何か
動き出した。

横穴の中にいたそれはゆっくりと光の下に這い寄る。

そして曲がり角から労働者の姿を確認すると、低い唸り声を上げて
様子を伺う。

ヴヴウ……………

それに気付かず、労働者は暢気に会話を交わす。

「取り合えず、おれが報告しに行くから作業を頼む」

「分かった」

コボルトが報告するためにその場を離れ、男が設置する照明を取る
為に横穴の入口から離れた瞬間に、それはズルズルとはいずりな
がら男の下に近付いていく。

口からは紫色の煙の様なものを吐き、毒々しい緑色の唾液をダラリ
ダラリと垂れ流す。

ジユリと舌なめずりし、目の前の男に狙いを定める……………。

…ヴヴウゝアゝアゝアアア……………

「え？」

ここで後ろからの殺気に気が付いた男が振り向くと、そいつは醜悪な口を大きく開いて襲い掛かってきた。

「うわあああああああああ！！！！？」

炭坑内に男の悲鳴が響き、消えていった。

そして、横穴から次々とそいつらが湧きだし、禍禍しい空気を醸し出しながら炭坑の中を徘徊し始めた。

…ウヴァ　　ア　　ア　　アアアア……

一方、この炭坑に異変が起こっているとも知らず、ダイヤモンドに自分達の事と幻想郷の事を説明し終えた霊夢達。

「……なるほどね。」

「幻想郷か……どんな鉱脈が眠ってるんだろ？」

「興味対象はそれかい」

ドワーフは鉱脈の場所に詳しく、石に関しての知識で右に出る者はいない程である。ゲームでも地下や鉱山で鉱石を掘り出しながら、それで武器や道具を作っている事が多い。まさに石の匠である。

「ダイヤモンドが幻想郷に来たら、妖怪の山に眠る鉱石の在り処が見つかるかもしれない。最も、妖怪の山に鉱脈があればの話だが……。」

「それで？私の所に来た要件は？」

「う……」

「ダイヤモンドの問いにアルバートは少したじろぎ、やがて観念したように折れた斬鋼剣をダイヤモンドに差し出す。折れた斬鋼剣を見て、顔を青ざめるダイヤモンド。」

「あ、アルバート……これ、どうしたのよ………?」

「折れた」

「『折れた』じゃないわよ!!あんだ、私の鍛えた斬鋼剣を粗末に扱うんじゃないわよ!!!」

「ぐおああ!?!」

ダイヤモンドは怒りのあまり、何処から取り出した巨大なハンマーでアルバートの頭目掛けてフルスイング。アルバートの頭が吹き飛び、身体が倒れる。

「」「ぎゃあああああ!?!?」「」「」

衝撃シーンに霊夢達は叫び、グリムはダイヤモンドに突っ掛かる。

「貴様あああ!?!?!よくもアタイの嫁を!?!?!」

「うるさいわ!?!というより、あいつは男だからどっちかといつと『婿』でしようが!?!」

「うるさい、このミニママ女!?!」

「何よ、このメカオタ!?!」

「怪力女!?!」

「マッドエンジニア!?!」

「鉱石マニア!?!」

「甘党!?!」

「喧嘩してる場合か!?!」

「あべしっ!?!」

アルバートそつちのけで喧嘩を続ける二人に、霊夢は陰陽玉を顔面にぶつけて強制終了させる。

妖夢はアルバートの頭部を持って、頭に声をかける。

「アルバートさん、大丈夫ですか!?!」

「ああ。こんな時、自分がロボットで本当によかったと思う」

「あ、胴そんち体か」

答えたのは胴体の方で、首の無い胴体が独りでに動き出す。

「ただ、頭が無いから何も見えない」

「ごめんなさい、その状態で話さないで。シユール通り越してホラーです」

頭の無い状態で手探りに動きながら喋るアルバートに、妖夢が頭を渡しながらつつこむ。

その後、グリムがアルバートの首を直している間、妖夢は折れた白楼剣をダイヤモンドに差し出す。

「凄い業物ね。折れてない状態で拝みたかったわね」

「直すのは無理でしょうか?」

折れた白楼剣を興味深そうに眺めながら呟くダイヤモンドに、妖夢は不安そうに尋ねる。

「何言ってるの？私は夢幻界一の鍛冶師よ。あんたの刀も興味あるし、斬鋼剣と一緒に鍛え直してあげるわ」

「お願いします。大事な刀ですので」

「任せなさい！

……と言つても、これと斬鋼剣を鍛え直す為には特殊な鉱石が必要ね……もう少し待っててね」

「はあ……確かに白楼剣は特別な刀ですからね。分かりました！」

ダイヤモンドと妖夢が話し合っている間に、アルバートの修理が終わっていた。

「どうだ、アルバート？」

「……だから、ダイヤモンドの所に行くのは気が引けたのだ……」

「ドンマイ」

まるでヘルメットを被り直すように首の接続具合を確認めるアルバート。そんな彼の肩を叩き、同情するにとり。

そんな彼女達の下に、一匹のゴボルトが慌てて駆け付けた。

「姐御!!」

「親方と呼べと言ってるでしょうが!!」

「はべらっ!?!」

自分を姐御と呼ぶコボルトにハンマーをぶつけるダイヤモンド。

「姐御なんて古臭い呼び名で呼ばないで。ここは炭坑だから『親方』と呼びなさい!」

「い、イエッサー……」

頭から血を流しながら弱々しく敬礼するコボルト。

「で、どうしたのよ?」

「そ、そうだ。大変です親方!」

ダイヤモンドに訊かれて、コボルトは慌てて報告する。

「フングスが……フングスがこの炭坑に現れて、繁殖してるんです!」

「何ですって!?!」

コボルトが口にした『フングス』という単語を聞き、ダイヤモンドは驚く。

「既に仲間が何人が襲われ、俺達もこの休憩所に避難しています!」

「よりによつて、こんな時に……」

苦虫を噛み潰した様な顔をするダイヤモンドに、魔理沙は恐る恐る訊いてみた。

「な、なあ……『フングス』って、何なんだ？」

「フングスとは、別名『マトンゴ』、『マイゴニト』と呼ばれるキノコの怪物だ……」

それに答えたのはダイヤモンドではなく、アルバートだった。

「キノコの怪物？」

「暗く湿った洞窟や地下に棲息し、他の生き物を襲う凶悪な奴だ。奴らは口から毒の胞子を吐き、殺した相手を苗床に次々と繁殖するのだ」

「……うげえ……」

「……まさか、この炭坑の何処かに奴らの巣穴に繋がっていたとは……」

アルバートの説明に霊夢達は吐き気を覚え、アルバートは立ち上がって扉に向かう。

「何処に行くの、アルバート!？」

「フングス共を撃退する。いずれ、ここも危険になる」

「確かにロボットのあんたなら毒胞子は効かないが、今は丸腰じゃないの。無茶よ！」

アルバートを引き止めようとするグリムとダイヤモンドだが、アルバートの意思是揺るがない。

「しょうがないわね。その化けキノコ退治、手伝ってやるわよ」

「霊夢!？」

「そつだな。キノコの怪物だろうが何だろうが、やってやるぜ！」

「霧雨!？」

異変解決にいきなり乗り出した霊夢と魔理沙に、グリムとダイヤモンドは驚く。

「霊夢さん。私はここに残って、労働者皆さんの治療をします」

「私もここに残るわ。人形が使えない今、私が行っても足手まといだし」

「私も残る。キノコに水は逆効果だろうしね」

「私はここに残って、皆を守るよ」

早苗、アリス、にとり、橙は休憩所に避難した人々の救護の為に残る事になり、霊夢と魔理沙は頷いて了承する。

「アルバートさん、これを……」

妖夢はアルバートに楼観剣を渡す。

「これは……妖夢、いいのか？大切な刀ではないのか？」

「アルバートさんなら托せます。これで丸腰ではありません」

「……すまない。暫し借りるぞ」

その様子を見て、グリムとダイヤモンドはため息を吐く。

「仕方ないね。アタイもフングス退治、やってやるうじゃん！」

「この炭坑の責任者として、黙ってられないわね。私も行くわ！」

グリムは巨大なスパナ、ダイヤモンドはハンマーを携えて意気込む。

「で、文はどうするの？」

「安全を確認してから、霊夢さんの後を着いて行きますので気にならな
いよ。」

「「「いや、お前も来いよ」「」」

「「「貴女も行きなさいよ」「」」

「おお…酷い酷い……」

こうして、炭坑をはいずるフングス共を退治するようになった霊夢

達だが……ある問題に気付いた。

「今考えると、戦力が足りないわね……」

「……う……」

確かに、相手は不特定多数のキノコの化け物。霊夢、魔理沙、文、アルバート、グリム、ディアムの六人だけでは戦力が心ともない。

しかし、そこに意外な助っ人が現れた。

「あら、随分弱気ね霊夢」

「え!？」

そこに現れたのは、五人の少女。

一人目は、銀髪の青いメイド服を着こなした従者。幻想郷の妖怪の山の麓、霧の湖に建つ紅魔館で働く完璧にして瀟洒なるメイド、十六夜咲夜。

二人目は、中国人風の緑色の服を着た赤髪の女性。紅魔館の門番をしているはずの妖怪、紅美鈴。

三人目は、頭に兎の耳が生えたブレザーを着た赤い眼の女性。迷いの竹林の奥、永遠亭に住む月出身の兎、鈴仙・優曇華院・イナバ。

四人目は、大きな鎌を携えた青衣着物の赤髪のツインテールの女性。三途の川で死者を運ぶ死神、小野塚小町。

そして五人目は、オレンジの髪に鎖の付いた衣装を着た二本角の鬼。博麗神社で留守番しているはずの伊吹萃香であった。

この五人の登場に霊夢達は驚きを隠せなかった。

「あんた達、なんでここに!？」

「その烏天狗の新聞を見たお嬢様が、私に調査を命じたのよ」

咲夜が言うお嬢様とは、紅魔館の主レミリア・スカーレットの事である。運命を操る吸血鬼の少女であり、性格は子供っぽい。

「私は咲夜さんに無理矢理連れて行かれました……門番の仕事があるのに」

「門番そっちのけで居眠りしてたくせに？」

「う……」

美鈴、哀れ。

「私も咲夜さんと同じですね。師匠に命令されて、ここに来ました」

「いやー、あたかも映姫様に命令されてね。途方に暮れてたら咲夜達に会ってね」

鈴仙がいう師匠とは永遠亭に住む医者、八意永琳やごころえいりんの事である。かぐや姫事、蓬莱山輝夜ほうらいさんかくやと共に月から逃亡した月の人間で、月の高い技術を駆使して様々な患者を治療しているのだ。

そして小町のいう映姫様とは、幻想郷の閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥの事である。いつもは彼岸で小町が運んできた死者の罪を裁いている。しかし、休日の際は幻想郷にやってきて説教し回る為、紫や幽々子さえも恐れる人物である。

「で、あんた達四人が来たのは分かったけど……萃香、留守番はどうしたの？」

「ああ、何か紫が慌てた様子でやって来てね、霊夢達の手助けするように言われたんだ。今は藍が神社を守っているよ」

余談だが、今では悪役ポジションである九尾の狐は元々、中国では神獣の一種でとてもありがたい存在だったと謂われている。

「とにかく、手が足りないなら助太刀するわよ、霊夢？」

そんな咲夜達を見て、霊夢はため息を吐くと笑顔で頷く。

「分かったわ。以前の私なら『大きなお世話』と言っけど、今回は頼むわよ！」

そして、霊夢は炭坑の奥に向かって一言。

「さあ、化けキノコ退治の開始よー!!」

おまけ

夢幻界入口 白亜の大門

「ええ！？何で早く言ってくれないの!？」

「も、申し訳ありません……」

そこには霊夢達との戦闘から立ち直った真壁は、機兵から霊夢達幻想郷の住民が安全だという事を漸く知らされて、若干涙目になる。

「ぼ、僕の頑張りは一体」

膝を付いて落ち込む真壁に、声をかける者がいた。

「……真壁？」

「え？君は!？」

そこにいたのは、青い長髪に、オッドアイが特徴の、単発ズボンで柄の入った服を着た少女だった。

「あ」

驚いた拍子に、少女の首がぐらつき、慌てて頭を押さえる少女。

物語は着実に進行している……。

第十二話 洞窟『俺たちや炭坑労働妖精隊』（後書き）

新たに咲夜が援軍に現れ、フングス退治に向かう霊夢達。

不気味に増え続けるフングス達が毒の胞子を撒き散らして来る。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

アラート『マッシュルームハザード』

白米「洞窟・炭坑・鍛冶という訳で、新キャラはドワーフのディアム・アームストロングです」

霊夢「ある意味予想の範囲内ね……」

白米「今回の異変の原因であるキノコの怪物は、名前をマイゴニトにしようと思いましたが、あえてマイナーな呼び名の『フングス』にしました」

魔理沙「ところで、フングスってどんな姿なんだ？」

白米「マイゴニトはキノコ人間の姿が一般的ですが、

この小説のフングスは四足歩行です」

魔理沙「分かりにくいな……」

白米「要するにアレです。」

背中がキノコになっているハルの動く城みたいなかんじ」

一同「「「めっちゃ分かりやすい!」「」」

白米「それでは引き続き感想や質問を受け付けております。」

後、必ず質問しなければならぬ訳では無いので無理しないで下さいね(汗)

それでは、次回も皆で……」

全員「「「やあってやるぜ!……!」「」」

第十三話 アリート『マッシュルームハザード』(前書き)

夢幻界生物図鑑

「ゴブリン」

RPGでは主にザコとして登場する小鬼。小鬼というのが萃香みたいな鬼ではなく、妖精の一種。

働き者だが悪戯好き。牛乳を酸っぱくするのが得意である。

牛乳が何か酸っぱいなと思ったら、貴方の家にゴブリンが隠れているかも？

第十三話 アラート『マッシュルームハザード』

夢幻界 紅蓮山。

妖夢の白楼剣とアルバートの斬鋼剣を直す為、夢幻界一の鍛冶師を自称するドワーフ、ダイヤモンド・アームストロングがいる炭坑を訪れた霊夢達。

一悶着があったが、二人の剣を直すには時間がかかるという事で待つ事にした。

ところが、炭坑内にキノコの怪物フングスが大量発生。労働者達に襲い掛かったのだ。

新たに咲夜、美鈴、鈴仙、小町、萃香が加わり、霊夢達はフングス退治に乗り出すのであった。

ちなみに早苗、アリス、妖夢、橙、にとり、そして新たに来たばかりの鈴仙は、フングスに襲われた労働者達の治療をする為、休憩所に残る事になった。

「うっぶ……実際に来てみると、より酷いわね……」

「百聞は一見に如かず、ね……」

現場を訪れた霊夢達は、現場の惨状を見て吐き気を催す。

フングスの襲撃にあった場所は孢子や湿気で充満し、カビや毒キノコがあちこちに発生していた。

そして、辺りにはフングスに殺されたと思われる人間や妖怪の死体が転がっていて、不快感がより一層際立つ。

霊夢達はグリムが用意したガスマスクのおかげで毒の孢子や腐敗臭には平気だが、その場の空気や風景までは平気では無かった。

「ここでは妖怪は人を襲っちゃダメなんでしょ？そのフングスって奴はなんで人間を襲うのよ？」

「相手は菌類だからな」

「あ、なるほど……」

ちなみにキノコはカビや黴菌と同じ菌類であり、植物では無い。スーパーの野菜売場においてあるが、断じて植物では無い。

「なあ、霊夢。あれは何だ？」

「え？」

魔理沙が指差す方向を見ると、暗くてよく見えないが人らしき姿が見える。足取りが乏しく、負傷した様に見える。

生存者か？と思い、駆け寄ろうとした霊夢の肩をグリムが掴む。

不気味なうめき声を出しながら霊夢達に迫るキノコゾンビ達。
そんなゾンビ達に対し、アルバートはスペルカードを宣言する。

「光線『ナイトレーザー』! !」

アルバートの額の赤い水晶みたいなものからレーザーが発射され、
ゾンビ達を焼き払う。
断末魔を上げ、灰になっていくゾンビ。

「霊夢、構う事は無い! 死んでいった者達の為にも、こいつらを倒すんだ!」

グリムは火炎放射器を取り出して、ゾンビを焼き殺す。

「確かに、こんなもの残していたら色々ヤバいわね。根こそぎ退治するまで!」

霊夢は博麗アミュレットを飛ばし、ゾンビを土に還す。

魔理沙はマスタースパークでゾンビを一掃。狭い炭坑の為、逃げ場は少ない。壁際に安全地帯があるので弾幕としてはルール違反では無いだろう。

小町は大きな鎌を振るい、ゾンビを次々と両断していく。死神ではあるが命を奪う事はしない小町だが、相手は魂の無い骸の為、こうやって遠慮無く攻撃している。

普段は仕事をサボっている彼女だが、今はまさに、我々がイメージする死神に相応しいオーラを感じる。

美鈴は手足に気を纏い、ゾンビを殴り、蹴り飛ばしている。

その隣では、咲夜がソウルスカルプチュアを発動。ゾンビを次々と切り刻んでいく。

流石は吸血鬼を主に持つだけに、ゾンビ程度では物怖じしない二人である。

萃香は身に纏っている鎖付き分銅を振り回し、ゾンビにぶつけている。分銅攻撃を喰らったゾンビは粉々に碎け散る。流石は鬼。

「へー、中々やるじゃない。なら私もやってやるわ。 鎚符『ハイパークラック』!！」

ダイヤモンドがハンマーで地面を叩き、地割れを起こす。地割れはゾンビを飲み込み、何事も無かった様に元通りに戻っていった。ちなみに、霊夢達は宙を浮いているので無事である。

こうして霊夢達は襲い来るキノコゾンビを全滅させ、奥へと進む。余談だが、全く戦わず後ろで写真を撮っていた文は、霊夢とアルバートからそれぞれ拳骨を食らわされたとか。

奥に進むに連れ、炭坑内に充満した禍禍しい空気が濃くなっていた。残っていた照明が逆に不気味さを醸し出し、雰囲気をより一層引き立たせる。主にホラーな方向に。

こんな場所に、妖夢や橙を連れて来なくて正解だったかもしれない。

妖夢は半人半霊の身でありながら、お化けや怪談が大の苦手である。ただし、流石に半分幽霊の為、霊は平気である。一方の橙は妖獣だが、まだ子供である。こんな所を見て泣き出したら後が怖い。主に九尾の狐のモンスターペアレントが。

ゾンビを倒しながら奥に進むと、壁にダイナマイトが埋め込まれた広い空間があった。実はここ、前話で最初の犠牲者が出た現場である。

「ダイナマイトがあるから火器は使えないわね」

「魔理沙、マスタースパーク撃たないでね」

「グリム整備士、火炎放射器は置いていった方がいい」

「「いじめか、この野郎」」

ディアムの注意を聞き、霊夢は魔理沙に、アルバートはグリムに釘を刺す。二人に対して怒りに拳を震わせる超火力コンビ。

しかし、ここでダイナマイトに引火して爆発すれば、落盤事故に繋がる危険性がある。霊夢達の忠告も、強ち間違っではない。

炭坑での仕事は死と隣り合わせである。炭坑労働者に就職したい方は、死ぬ気で働く覚悟を持ちましょう。下手したら仕事場が、その

まま貴方の墓になりかねないので。

ともかく、放置しておくのも危険な為、ダイナマイトを次々と撤去する。撤去したダイナマイトは咲夜と美鈴、文が安全な所まで運ぶ。美鈴はともかく、咲夜と文なら、もしもの時には逃げられるだろう。主に時を止めたり高速移動したりして。美鈴は、気で何とかなるだろう、多分。

「これで最後よ」

「これで心置きなくマスタースパークが撃てるぜ」

ダイヤモンドが最後のダイナマイトを抜いたのを見て、安堵する魔理沙。

「あ、もう終わったの？」

それと同時に起きる小町。……こんな状況でよく寝れるものだ。

しかし、

「待って！何かいる」

霊夢は殺気を感じて構えだし、それを見て魔理沙達は周囲を警戒する。

…ヴヴア`ア`ア`ア`アアアアア…

不気味な低い唸り声が炭坑内に響き、暗闇から怪物が姿を現す。

背中から生えた無数のキノコ、枯れた木のような身体、口を開けば紫色の胞子の煙が吐き出される。

この化け物こそ、この炭坑を襲撃したキノコの怪物、フングスである。

フングスは群れをなし、不気味な唸り声をあげながら霊夢達に這い寄る。

「来やがったな！？恋符『マスタースパ』…」

「ヴブア`ア`ア`ア！！！」

「って、うわあああ！！！」

先手必勝と魔理沙はいきなりマスタースパークを撃とうとするが、フングスが高濃度の胞子を勢いよく吐き出して攻撃をしてきた。ガスマスクしている為、胞子を吸い込む事はなかったが、胞子の威力に体勢が崩れてミニ八卦炉を落としてしまった。

「あー！！！！私のミニ八卦炉！！！」

しかも運悪く、落ちたミニ八卦炉はフングスが吐いた胞子で視界が遮られ、すぐに見つからない。

「なら、これで!?!」

「待ちなさい! 火炎放射器は更に危険よ!?!」

火炎放射器でフングスを焼却しようとするグリムだが、霊夢に止められる。

先程ゾンビと戦ったところとは違い、この場は更に濃い孢子で充満している。可燃性が強い孢子の中で火を点けたら、辺りが火の海になるのがオチである。更に、それでダイナマイトに引火すれば最悪な状況になる。

文がいれば風で孢子を吹き飛ばせるが、生憎彼女は今、ダイナマイトを外に運び出す作業でここにいない。という訳で、この視界の悪い中でフングスと戦わなければならないが、いくらガスマスクを着用しているとはいえ、霊夢の方が圧倒的に不利である。

「皆、ここは私に任せてくれ」

「アルバート!?!」

ここでアルバートが提案をする。

「私なら、フングスの孢子は利かない上、サーチ機能で視界も問題ない。私がこの場のフングスを全滅させる」

そう言つてアルバートはフングスの群れに立つと、妖夢から受け取った楼観剣に手をかける。

「使わせてもらうぞ、妖夢よ。」

楼観剣！！」

アルバートが楼観剣を抜くと、刀身が閃いて胞子を薙ぎ払う。

「妖怪が鍛えたこの刀。その切れ味を、その身で確かめてみる！」

「……ヴヴァアアアアア！！！！」

アルバートが挑発すると、某ジブリ映画の崇りの怪物の如く襲い掛かるフングス達。

「斬鋼……ではなかった、楼観剣『千人斬り』！！」

いつもの癖で、自分の得意スペルカードを宣言しようとしたアルバートだが、すぐさま訂正して新しいスペルカードを宣言する。普段大剣を使ったスペルカードを得意とするアルバートだが、彼は剣士である。武器が大剣から刀に変わろうとも、戦えてみせている。

「おおおおおおお！！！！」

大声をあげながら、次々とフングスを斬り裂いていくアルバート。今回は大剣ではなく刀の為、攻撃力は低く攻撃範囲が狭い欠点があるにも関わらず、太刀筋の速さで欠点を補っている。

時には拳や蹴りで、後ろから飛び掛かって来るフングスに反撃する。

「ヴヴァアアアアア！！！！」

「うつ！？」

しかし、死角に潜んでいたフングスが胞子を吐き、アルバートは一

瞬怯む。その隙を突き、一斉に飛び掛かるフングス達。

しかし、

「……ヴア、アッ!?」「」

「!?!」

突然飛んできた札とナイフに、次々と撃ち落とされる。

「あんただけいい格好をさせないわよ」

「助太刀いたします」

胞子の煙の中から、お祓い棒と札を両手に持った霊夢と、いつの間に戻って来たのか、ナイフを両手に携えた咲夜が現れた。

「ここは私に任せてくれと言ったはずだ。ガスマスクを着けているとはいえ、生物がこの胞子の中にいるのは危険だ」

「生憎、私達はそんなにヤワじゃないわ」

「一人よりも複数人で行った方が速く済むわよ?」

「……」

喋りながらも周りのフングスを次々と片付けていく三人。霊夢と咲夜の意気込みに、アルバートは何も言わずに刀一振りですべてのフングスを仕留めた。

「分かった。しかし、用心しろ二人とも」

「言われなくても!」

アルバートの忠告に答え、スペルカードを取り出す霊夢。

「行くわよー。宝具『陰陽鬼神玉』!」

霊夢は巨大な陰陽玉を投げつける。陰陽玉に当たったフングス達はポーンとピンポーンと吹き飛んでいく。

「博麗に秘めし力よ、解き放て。」

霊符『夢想封印』!」

宣言すると霊夢の周りに色とりどりの光弾が現れ、霊夢が両腕を振るると同時にフングスに向かって発射される。

光弾はフングスのいる位置に誘導するように飛び、スペルカードの名の如く次々と封印していく。

「メイド秘技、幻符『殺人ドール』!」

咲夜がスペルカードを宣言すると、咲夜の周りに数本のナイフが宙を浮く。咲夜が合図を出すとナイフはフングスに向かって飛んでいく。

「ギィ、イツ!」

「ギィ、ギィ、イツ!」

咲夜は動けないフングス達に向かってナイフを飛ばし、空中に停止させる。背を向けて歩きだし、彼女は呟く。

「そして時は動き出す……」

時を止められていたフングス達は、いきなり目の前に現れたナイフに対処できず、成す術も無いままナイフの餌食となってしまう。

「夢幻一刀流『怪刀嵐舞』!!!」

アルバートは手首をドリルの様に回転させ、楼観剣を振り回す。

「おおおおお!!!」

これでフングス達を斬り飛ばし、アルバートは新たなスペルカードを取り出す。

「これで最後だ。

楼観剣『退魔冥月斬』!!!」

アルバートは楼観剣で大きく円を描き、低く構える。足に内蔵されたブーストが火を吹き、地を滑るように走るアルバート。

「チエストオオオオオ!!!」

すれ違い様に楼観剣を振るい、フングス達を両断する。

両断されたフングスは、地面に倒れると同時に塵と化して果てて行

った。

霊夢、咲夜、アルバートの活躍により、襲撃してきたフングスは全滅。胞子は戻ってきた文が起こした風により、綺麗に吹き飛んでいった。

フングスの襲撃を退けたところで、霊夢達はフングスが出てきたと思われる横穴を発見する。

「どうやらフングスはここから出てきたみたいだね」

「じゃ、さっさと塞ぐか？」

「いや、採掘を再開した時にまた出て来られたら、更に被害が拡大するかもしれない。元を断たなきゃ……」

萃香は横穴を覗き込んで確認し、魔理沙はミニ八卦炉を穴に向けて、マスタースパークで穴を塞ごうとする。しかし、ダイヤモンドはそれを止めると、霊夢達に提案する。

「元を断つ？どうやって？」

「この先に多分、フングス達の女王がいるはず。それを倒せばフングス達は全滅するわ」

「ちょっと待ちなさい。キノコにオス・メスがあるの？」

霊夢のツッコミの通り、菌類であるキノコに性別は無い。

「フングスにはかなり巨大な『ボス』がいてね、そのボスからたくさんフングスが生まれて来るのよ。フングスを生み出すボスだから、私達は女王と呼んでいるのよ。
。アリや蜂だって、女王アリや女王蜂は働きアリや働き蜂と同じ姉妹だし」

同じアリや蜂でも幼少期に食べていたもので女王になるかそうでないかが決まる。アリや蜂にとって女王は母親、もしくは姉妹である。ちなみに働きアリや働き蜂は、一生独身のまま生涯を過ごす運命である。一生独身が運命付けられている彼女達に比べたら、我々人間はある意味恵まれている。

それはさておき、理由を知って納得する霊夢達。照明の準備をする。ダイヤモンドを横目に、魔理沙はグリムに質問する。

「ところで、女王ってどれくらい大きいんだ？」

「最低でも、大人のアフリカゾウの五倍くらい」

「……」

「あ、私用事を思い出したので、これにて」

「「「逃げるなブン屋」」」

アフリカゾウは人間の倍くらいの巨体を持っている。その五倍だと、かなりでかい。怪獣クラスである。

それを聞いてそそくさと逃走を図る文だが、霊夢達に捕まって失敗する。

その後、適当な理由を付けて逃げようとした文であるが、天狗よりも強い妖怪、つまりは鬼である萃香に『一緒に来い』と命じられて泣く泣く従うしかなかったとか。

ちなみに文はフングスが怖いのは無い。めんどくさい事になりそうなのが、逃げようとしたのである。

霊夢達が横穴に入ったその頃、炭坑最深部では……………。

ズ、ズズ…………

巨大な何かが身動きして、その身体の表面から何かが生まれようとしていた。

習いである。

彼女は元々夢幻界の住民だったが、他の世界へ出張する事になり夢幻界から去っていった。その際、彼女はとある友人とケンカしたらしい。

そして、彼女がやってきたのは何の因果か幻想郷。今では白玉楼に居候している。

幻想郷で生活して月日が流れ、突如博麗大結界に夢幻界の虚像が映ったのを見た彼女は勿論驚いた。そして、夢幻界に何が起こったかを調べ、ケンカして別れた友人と仲良くなる為に夢幻界に戻る方法を探していた。そこに椋が配っていた新聞に、霊夢達が夢幻界に向かった事を知り、後を着けて来たのである。

「何だかんだで心配だったんだ、フェイの事が」

「むづ……」

笑顔で核心を突く真壁にデュラ娘はむくれるが、事実であるので否定できなかつた。

「フェイちゃんは、元気？」

「あー、君と別れてから何か意気消沈していたね。今では何故か刃と争っているけど……」

「……」

理由は薄々気付いているが、中々口に出せないデュラ娘だった。

第十三話 アラート『マッシュルームハザード』（後書き）

フングスを倒しながら進む霊夢達は、遂にフングスの女王がいる最深部に到達する。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

『キノコの女王』

白米「今回のサブタイトルの元ネタは、あの有名なホラーゲームです」

霊夢「だからゾンビが出てきたのね……」

白米「ちなみにキノコは英語で『マッシュルーム』ですが、毒キノコは英語で『トードストウール（カエルの腰掛け）』と言います」

霊夢「毎度思うけど、貴方のその豆知識は何処から来るの？」

白米「いやー、テレビやゲームで『こいつの元ネタは何だろう？』
と思って、インターネットや本で調べたらハマってしまってますね。
ちなみに、今まで紹介した豆知識の七割は本から得た知識」

霊夢「本の虫か、あんたは」

白米「はっはっは。褒めないでくださいな」

霊夢「褒めとらん褒めとらん」

魔理沙「後、前回に引き続きソード・鉄道員さんからのゲストが出演してたな」

白米「デュラ娘ですね。彼女ともう一人のゲストのフェイの本格的な出番はまだまだ先です。ごめんなさい」(汗)

霊夢「その代わりに、おまけでゲスト二人の動向を書くんでしょ？」

白米「ええ、はい……」

咲夜「では、引き続き感想・質問を受け付けます。

次回もお楽しみに」

第十四話 『キノコの女王』（前書き）

今回の話はフングスの女王が登場します。

なので、好きなボス戦BGMを聞きながら今回の話を読む事をオススメします。

ちなみに私のオススメは『悪魔城ドラキュラ蒼月の十字架』の『闇夜の激突』です。

アリス「お前も人形になるのだ」 （棒読み）

咲夜「待て！お前の時間はここで止まる」 （棒読み）

こいし「パラノイア！！」 （荒ぶる無意識のポーズ）

第十四話 『キノコの女王』

夢境界 紅蓮山

炭坑内に大量発生したフングスを退治すべく、仲間と共に向かう霊夢。

途中、キノコゾンビやフングスの襲撃があるも、彼女達は能力・武器・技・スペルカードを駆使して次々に退けていく。

フングスを生み出す女王の存在を知った彼女達は、女王を倒すべく更に奥へ進む。

「それにしても、ゴキブリみたいに何度も湧くわねこいつら」

「止めてください霊夢さん、そんな例え方するの」

フングスを一匹仕留めて愚痴を零す霊夢に、文はつつこむ。そして魔理沙がフングスの死体を眺めているのを見て、問い掛けてみる。

「魔理沙さん、どうしたんですか？」

「いや、こいつら私の研究の材料にしようかなと……」

「止めなさい。ミニ八卦炉を構えたら、マスタースパークじゃなくフングスが出てくるなんて嫌よ、私」

「おそろく、ここが最深部だ」

「あれ？でも何も無いぞ？」

小町の言う通り、最深部は野球ドームの様に開けているが、中央に巨大な岩みたいなものがあるだけで何も無い。

「まさか、私達を恐れて逃げたか？」

「それは無いわ。女王は自身の体長のせいで、自分が棲む部屋から出れなくなってしまうているの」

「…とんだ引きこもりね……」

魔理沙は大岩を平手で叩いて得意げに胸を反らす、ダイヤモンドはそれを否定する。そして霊夢はダイヤモンドから聞いた女王の生態に呆れる。

…ズズッ……

「あら？」

「どっしたの、咲夜？」

「今、その岩が動いた様な……」

「え」

咲夜の指摘に、霊夢は大岩を凝視する。

…ズ、ズズツ……

確かによく見ると、大岩に見えたものは動いており、目や口の様なものがある。

「魔理沙、離れて！それは岩じゃない！」

「何!?!」

霊夢の叫びに魔理沙は急いで大岩だったものから離れる。

…ズウウウウウン……

すると、さっきまで魔理沙がいた場所に巨大な足が踏み付けてきた。一步遅れたら即死である。

ヴォ、オ、オ、オ、ア、ア、ア、アアアア！！！！

大岩だったものは四本の足で身体を支え、部屋中に響き渡る程の雄叫びを上げる。

「あいつよ！あいつがフングスの女王よ！」

「いやデカ過ぎ！！何を食ったらあんなに大きくなるの！？」

ダイヤモンドが叫び、小町がつっこむ。

そう、大岩の正体はフングス達の女王、クイーンフングスである。

捻りが無い？ほっといてください。

小町がつっこんだように、クイーンフングスの体長は普通のフングスよりも超越している。私達の顔をクイーンに例えるなら、普通のフングスはゴマ程度である。更に例えるならゾウとネズミ、軽自動車とミニカー、ヤマツカミとアイルーの様な感じである。

…最後はモンハンやってない人には分からないだろうが……ともかく、そのぐらいデカイフングスという事である。

クイーンフングスのデカさに圧倒された霊夢達だが、魔理沙はある事に気付く。

「あれは当たればお終いな……」

「ロボットの私でも、当たればただでは済まないな……」

「うわ、見たくない。カビだらけのアルバートなんて見たくない」

「言ってる場合、グリム？あいつは、完全に私達を殺しにかかっているわ」

クイーンの胞子の威力に顔を青ざめて絶叫する咲夜以外の幻想郷組、予想以上の胞子の威力に引いてしまう咲夜にアルバート、グリム、ディアム。あの胞子に当たればカビやキノコまみれになって即死、そしてゾンビ化である。絶対に体験したくない死に方である。

改めて、クイーンの恐ろしさを身を持って知る霊夢達。しかし、クイーンフングスの攻撃はまだ終わってなかった。

クイーンフングスは空を飛んでいる魔理沙と小町、美鈴に気付くと、身を大きく震わせる。

「な、何だ？」

すると、クイーンフングスの側面から数十個の大きなキノコが生えてきた。

「……キノコ？」

「何の真似だ？」

美鈴と小町が首を傾げると、キノコの付け根部分から煙が噴出、数

十個のキノコがミサイルの如く魔理沙達に向かって飛んで来た。

「「「嘘おおおおおおお！!?」「」」

魔理沙達は一斉につっこみ、キノコミサイルを精一杯回避する。壁や地面に当たったキノコは爆発し、胞子を撒き散らす。口から吐く胞子よりかはマシだが。

「萃香、ミッシングパワーであいつと相撲取りなさい！」

「やだ。触りたくないし、胞子に当たりたくない。

後、この部屋が狭くなる」

「…それもそうね……」

霊夢はクイーンフングスに巨大化する事ができる萃香をぶつけようとするが、萃香の正論に考えを改める。その反対側では、咲夜とアルバート達が攻撃を仕掛けていた。

咲夜はナイフを、アルバートはレーザーや斬撃を飛ばして攻撃するが、クイーンフングスの硬い身体に弾き返されてしまう。

「これならどうよ!」

ならばとグリムが火炎放射器で燃やそうとするが、大きすぎる為にあまり効果が無い。

ヴヴウ………?

それどころか、クイーンにとっては蚊に刺された程度らしく、前足で燃えたところを掻いている。

「駄目だ、この程度ではダメージすら与えられない……」

「その武器、もうちょっと火力が上がらないの？」

「ごめん、これが最大出力……」

咲夜達が苦戦しているその後ろで、ダイヤモンドが地面に手を当てて何かを感じ取るうとしている。

「まだなの、ドワーフ？」

「もうちょっと待って。あれだけのデカさ、より硬度が強いものを捜し当てないと……」

咲夜は後ろを振り向かず、ダイヤモンドに声をかけるが、ダイヤモンドは未だに集中している。

ぶぼお おお おお ……!!

クイーンフングスは魔理沙達を狙って胞子の息を吐き、魔理沙達はそれを躲しながら弾幕で反撃する。しかし、やはり硬い身体に全て弾き返される。

「くそっ！！やっぱり駄目か！？」

魔理沙は舌打ちしてミニ八卦炉を取り出す。

「恋符『マスタースパーク』！！」

「三華『崩山彩極砲』！！」

「魔理沙、美鈴。あんた達の一生の価値を借りるよ！

死価『プライス・オブ・ライフ』！！」

三人はそれぞれスペルカードを発動して、クイーンフングスを攻撃する。

小町のプライス・オブ・ライフは、相手の一生分の価値を小銭の弾幕として放つスペルカードである。しかし、クイーンフングスの一生にそれ程価値があるとは思えない為、小町は魔理沙と美鈴の一生分の価値を弾幕として表現したのである。

ヴブウウ……！！？

流石にスペルカードは有効なのか、身じろぐクイーンフングス。

「華符『採光蓮華掌』！！」

続いて美鈴がクインフングスの眉間部分に掌底を打ち込み、蓮華型の弾幕を撃つ。

オ、ブア、ア、ア、アア！！？

クインフングスは口からヘドロ状の物質を吐いて苦しむ。ヘドロ状の物質が地面に触れると、ジュワワアツという音を立てて地面は紫色の煙を上げて溶け出す。

「まだまだあー！！」

追撃するべく新たなスペルカードを取り出す美鈴。しかし、クインフングスは身体中から触手を生やし、美鈴を攻撃する。

「な！？うわあああ！？」

壁に激突した美鈴を触手が搦め捕り、締め付ける。

「あ、くろう……あああ！！？」

「美鈴！」

締め付けられて苦しむ美鈴を、小町が鎌で触手を切り裂いて助ける。

「ぶはつ。助かりました」

「スペルカードが有効みたいだけど、今一決定打に欠けるみたいだ……」

触手に締め付けられていて呼吸が出来なかった美鈴は、息を荒げながらも小町に礼を言う。小町は会釈で答えると、クイーンフングスを睨みながら呟く。

スペルカードの弾幕を四回連続被弾しても、うめき声をあげるだけで倒れる気配の無いクイーンフングス。相当タフである。

ヴヴウウウウ……

クイーンフングスは魔理沙達を睨みつけながら唸り、再び触手を伸ばして攻撃し始めた。

一方、霊夢と萃香はクイーンフングスの真下に向かっていた。如何に硬い身体を持っているとはいえども、真下からの攻撃、即ち腹部への攻撃なら効果があるのではないのかと考え、クイーンフングスが魔理沙達に気を取られている隙にクイーンフングスの真下に潜り込もうとしているのだ。

案の定、魔理沙達はスペルカードを使ってクイーンフングスを怒らせ、クイーンフングスの注意は完全に魔理沙達に向いていた。霊夢

「ところで、なんで直接女王の腹部を叩かないのかしら？」

クインフングスの後ろからナイフを投げつけて注意を引こうとする咲夜は、ふと頭に過ぎった疑問をアルバートに問い掛ける。

咲夜達もクインフングスの弱点は腹部だと予想していた。そこで、咲夜とアルバート、グリムでクインフングスを引き付けて、ディームが強力なスペルカードで遠距離からクインフングスの腹部を攻撃する作戦を取っていたのだ。

しかし、咲夜はそんな事をしなくても直接真下から攻撃すれば早く決着がつくのではないかと考え、アルバートに質問したのであった。咲夜の質問に、アルバートは一瞬躊躇って語りはじめた。

「……咲夜、道に落ちていた石を拾った時に、その裏側がダンゴムシで覆われていたら、どう思う？」

「……気持ち悪いと思うわね。それがどうかしたの？」

「フングスの女王の腹には、多くのフングス共によって守られている。そんな所に足を踏み入れてしまうとフングス共の餌食だぞ？」

「……」

アルバートの説明を聞き、絶句する咲夜。

その時、

いやああああああああああああああああああ！！！！？

霊夢の悲鳴が炭坑内に響いた、

クイーンフングスの真下から……。

「……霊夢達にも言うべきだったな」

「……ええ」

冷汗をかきながら咳く二人であった。

その時、クイーンフングスの真下から札や弾幕、陰陽玉、それらに当たったフングスが次々と飛び出た。それらに混じって萃香が逃げないように飛び出してきた。咲夜とアルバートを見つけた萃香は彼等の下へ避難する。

「ひく、死ぬかと思った……」

「何があったの……といっても、フングスの群れに襲われたんでしょ？」

「いや、それもあるけど……」

どうも歯切れの悪い萃香に、咲夜は首を傾げる。

「霊夢が、女王の腹にビツシリと大量に張り付いていたフングスにパニツクを起こしちゃって……スペルカードを暴発させちゃったみたい……」

「……あの霊夢が？」

「うん。あの霊夢が」

それを聞き、表情を強張らせる咲夜。

霊夢は人間の中では強力な力を持っている。しかし、全力で戦って負ければ後が無いと考えており、本気を出さないと戦う主義である。そんな霊夢がパニツクのあまりにスペルカードを発動した事が信じられず、咲夜は思わずクイーンフングスの真下の方に視線を向ける。

ちなみに霊夢が発動したスペルカードは、無題『空飛ぶ不思議な巫女』。新しい弾幕を開発する為に参考として霊夢達のスペルカードを研究していた魔理沙が言うには、霊夢がヤケクソになった時に使われるスペルカードらしい。

書籍作品『The Grimoire of Marisa』、運が良ければ一般の書店で発売中。

しばらくすると、霊夢がやつれた様子でクイーンフングスの真下か

ら脱出してきた。

「……………」

「霊夢、大丈夫？」

「……………」

「返事する気力も無いみたいね……………」

力無く倒れる霊夢を支えながら、萃香は霊夢に問い掛ける。その様子を見て、咲夜は霊夢に同情する。

「……………見つけた。準備完了よ！」

「よし。咲夜、二人を連れて離れる……！」

先程まで地面に手を当てていたダイヤモンドが叫び、アルバートは咲夜に撤退するよう呼び掛ける。クイーンフングスから霊夢達が離れるのを見て、ダイヤモンドはスペルカードを宣言しながらハンマーで地面を叩く。

「鉦符『ミスリルブレイク』……！」

ヴヴオオ、オ、オ……！！？

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ
あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

口に入った爆薬が爆発し、クインフングスは更に暴れ出す。爆発の時に点いた火で、口の中が炎に包まれる。

「え、何があつたんだ？」

「どうやら口の中が本当の弱点らしいですね」

「文！？今まで何処に行つてたんだ？」

「避難してました」

「後で霊夢に殴られても……つて、あれ？霊夢？」

魔理沙はちゃっかり逃げていた文につっこむが、咲夜と萃香の肩を借りてグツタリとした格好でやって来る霊夢を見て驚く。文もグツタリした霊夢を見て、動揺する。

「え、何があつたんですか？」

「あー、軽いトラウマを作ったみたい。ほつといてやってくれ」

「え、霊夢さんがトラウマ？ちょっと、その話を詳しく……」

「夢想天生を喰らいたいなら喋ってもいいけど？」

「止めときます」

萃香から霊夢が何があったのか聞きだそうとする文だが、萃香の忠告に考えを改める。その様子を見て魔理沙が呟く。

「あの霊夢がトラウマって、何があったんだ……」

ヴヴオッ オッ オッ オッ オッ アッ アッ アッ アッ アッ
アアアア!!!!

「ひい！？何か怒ってませんか!？」

「そりゃね〜、口に爆薬を放り込まれたら怒るわ」

「いやいやいや！わざとじゃねえよ。事故だぜ！」

口を大きく開けて吠えるクインフングスに美鈴は怯え、小町は魔理沙の方を見る。そして右手を高速で横に振りながら否定する魔理沙。

「ともあれ口の中が弱点なら、そこへ弾幕を撃ち込むだけだ」

「そうだな。皆、一斉掃射だぜ！」

アルバートは白楼剣を構えながら、クイーンフングスを睨みつける。魔理沙はそれに同意し、一斉にクイーンフングスの口の中へ攻撃する霊夢以外の一同。

グッ！

しかし、クイーンフングスは口を閉じて攻撃を防ぐ。しかも、そのまま息を吸って毒の胞子を吐こうとする。

「ちょ、ヤバイですよ！？あれに当たったら私達もゾンビの仲間入りですよ!?!」

「それだけは勘弁願いたいわね……」

クイーンフングスの行動に焦る美鈴に顔をしかめる咲夜。そんな中、魔理沙はミニ八卦炉をクイーンフングスに向ける。

「魔理沙、何を?」

「あいつが口を開いた瞬間にファイナルスパークをぶっ放すぜ!」

「無理だ！お前も見たはずだ、女王の胞子の威力を。失敗すれば命を落とす!」

「やってみなきゃ分からねえだろ!」

「成功する確率は限りなく低い！」

萃香の質問に答える魔理沙に、アルバートが止めに入る。そうこうしている間にも、クイーンフングスは息を吸い続けた為に身体がドンドンと膨張していた。何時胞子を吐いてもおかしくない。

「く！モタモタしてられないぜ！！」

アルバートの手を振り切り、クイーンフングスに狙いを定めて魔力を集中させる魔理沙。

そんな魔理沙の肩を掴む者がいた。

「あなた一人の力じゃ、無理に決まっているでしょ？」

「霊夢！？」

さっきまで脱力していた霊夢が魔理沙の肩を掴んでいた。

「私の力も使った方が効果的よ」

「え？」

「あなたのファイナルスパークに私の巫女の力を加えれば、あいつの胞子を浄化できるかもしれないわ」

霊夢は三二八卦炉に手をかざし、破魔の力を込める。

「しかし、そんな事で女王の胞子に勝てる訳が……」

「いや、霊夢と魔理沙の二人に賭けようよ、アルバート」

「グリム整備士!？」

計算した確率の低さから二人に反対するアルバートだが、グリムは霊夢と魔理沙を信用する。

「アルバート、世の中には確率だけで結末が決まる訳では無いんだよ」

「…理解不能なのだが……」

アルバートが理解に苦しむ間も、ミニ八卦炉に力を込める霊夢と魔理沙。ミニ八卦炉の正面に、陰陽太極図と六角形の魔法陣を組み合わせた特殊な陣が現れる。

クイーンフングスも息を止め、胞子の息を吐く体勢に入る。

ぶぼお おお おお おお おお おお おお おお !!!

最初に吐き出したものとは比べものにならない程の超高濃度の毒胞子が、クイーンフングスの口から勢いよく吐き出された。それに対して、霊夢と魔理沙は同時にスペルカードを宣言する。

「空前絶後」巫女と魔法使いの合体弾幕！！」

第十四話 『キノコの女王』（後書き）

遂に、クイーンフングスとの決着がつく。

そしていよいよ、ソドー鉄道員さんのゲストキャラの一人が登場？

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

閑話『つかの間の日常へ』

白米「前書きのアリスと咲夜の台詞は、蒼月の十字架に登場するボスの台詞です」

アリス 〓 パペットマスター

咲夜 〓 ゼファル

霊夢「ところで、最後のスペルカードはオリジナル？」

白米「そうですね。二次創作では魔理沙とアリスの合体技で『マリヌ砲』というものがあるので、それを参考にしました」

魔理沙「でもお前、オリジナルのスペルカードは東方信者に攻撃さ

れるネタになるからやらないって言ったんじゃないのか？」

白米「だから、空前絶後。つまりは以前にも使われてないし、勿論その後も使う事もない、これっきりの合体スペルカードという事です」

霊夢「使うのはこの一回だけって事？」

白米「ハリケンジャーのおぼろさん風に言っと、

スペシャルやしな」(カメラ目線)

小町「では、引き続き感想・質問を受け付けるよ。次回をお楽しみに！」

白米「ちなみに、ソドー鉄道員さん所のゆっくりまりさへ。貴女がマリアに請求した五万円はグリムがそちらの口座に振り込みました」

小町「それでは、

お前の魂、いただくよ！」

霊夢「ソウルイーターか!？」

第十五話 閑話『つかの間の日常へ』（前書き）

夢幻界生物図鑑

「デュラハン」

もうすぐ死を迎える人間に、その事を知らせる為、夜中を走り回る首無しの人外。主に自分の首を小脇に持った人間に似た姿をしている。姿から見るとアンデッドやゾンビの一種と思われがちだが、これでも妖精である。我々人間がイメージするデュラハンは鎧の騎士の姿だが、本来は女性の姿をしている。

それぞれ自分の乗り物、コシユタ・パワーを持っており、それに乗って騒音を鳴らしながら夜の町を走り回る。その音に反応してドアや窓を開けた家の中に、タライ一杯分の血をぶちまける。また、自分の姿を見られる事を嫌っているデュラハンも中にはおり、自分の姿を見た人間を盲目にしてしまい、最悪の場合命を奪われる。最大のタブーはデュラハンの首を奪う事。昔、ある悪女がデュラハンの首を隠してしまった事で、怒ったデュラハンが村の住民の首を次々に斬り落としていったという噂がある。

デュラハンに襲われたら、川へ逃げる事。コシユタ・パワーは川を渡る事ができない為、川の中に入ればデュラハンは諦めて帰っていきくと謂われている。また一説では、誰かの死を知らせる妖精ハンシーとコンビを組む事がある。

第十五話 閑話『つかの間の日常へ』

「空前絶後『巫女と魔法使いの合体弾幕』!!!」

霊夢と魔理沙が同時に宣言した瞬間、ミニ八卦炉からマスタースパークと夢想封印が放たれた。マスタースパークのレーザーをなぞるように、夢想封印の光弾が乱れ飛ぶ。それらはクイーンフングスの吐く超高濃度の毒の胞子に当たると、胞子を打ち消しながらクイーンフングスの口に向かって突き進む。

クイーンフングスはこれに驚き、更に胞子を吐く勢いを強くする。しかし、霊夢と魔理沙も負けていない。ミニ八卦炉に込める力を更に強くする。

「まだまだあああああ!!!」

「フルパワーだぜええええええ!!!」

すると、レーザーが更に太くなり、光弾の量が更に増える。

……………ヴァツ!?

遂に二人の弾幕がクイーンフングスの口の中に入、身体の内側からクイーンフングスを攻撃する。

るさいと咲夜にナイフで眉間を刺されて昏倒してしまう。そんな美鈴を小町が苦笑して支えるが、彼女が死神だと思つと何だか縁起が悪く感じてしまう。

「ありえない。勝てる確率が10%も満たなかったというのに……」

「アルバート、それが人間つてもものよ」

「フフツ。確かに人間は、時に私達の常識を超える能力を発揮するわ。そこに計算なんて無意味に等しいわよ？」

「……なるほど、計算外の事をやってのけるのが人間か。ふむ、私もまだまだ学び足りない部分があるな」

自分が出した確率とは裏腹にクイーンフングスを倒した霊夢と魔理沙に、アルバートは驚いた。しかし、グリムとディアムの話聞き、人間についての認識を更に改めるアルバートであった。

「ん？」

クイーンフングスを倒した為、休憩所まで戻る事にした霊夢達。そんな中、魔理沙はあるものを見つける。

「……」

それを見て少し考えた後、それをビンの中に入れてしっかりと封をする魔理沙。

「何してるのよ、魔理沙。置いて行くわよ」

「おお、ワリイ。今行くぜ」

その後、炭坑内の清浄と死体の火葬を行い、フングス異変は幕を閉じた。霊夢達は炭坑労働者達からセクハラ紛いのお礼を受けそうになるも、ダイヤモンドのハンマーの一撃で事なきを得たのは余談である。

「とりあえず、フングスのせいでゴタゴタになったけど、おかげで貴重な鉱石が見つかったから二人の剣が直るのが早くなりそうよ」

「直るのは何時になる？」

「徹夜で四日って所ね」

「ふむ。料金は私がかしよう」

「すみません、わざわざ……」

「楼観剣の礼だ。気にする事は無い」

炭坑清浄の際にヒヒイロカネやアダマントタイト等の貴重な鉱石が見付かった為、早速白楼剣と斬鋼剣の修理に取り掛かるダイヤモンド。修理代を代わりに払ってくれるアルバートに妖夢は何度も頭を下げてお礼を言う。

とりあえず、剣をダイヤモンドに任せて霊夢達はミッドガルドに戻ってきた。

「あ、お帰りなさい皆さん」

「げっ！」

マシンカーディアンズ本部。グリムの部屋で待っていたのは、ハーブを売る為に霊夢達と一時的に別れたエルフの少女、マリア・リュミエール。そして、霊夢達を見ると途端に臨戦体勢に入る白い鎧の少年、真壁剛だった。

「あ、あんた白亜の大門で私達にボコボコにされたぬりかべじゃない？何をそんなに怯えてるのよ？」

「……（そりゃ、あれだけ痛い目にあつたら警戒するわな……）」

霊夢は臨戦体勢をとり続ける真壁に疑問を持つが、真壁に同情しつつ心の中でつつこむ魔理沙と早苗、アリス、美鈴の四人。

というか、魔理沙とアリスも加害者だという事を自覚しているのだろうか。

とりあえず、長いテーブルを囲むように座って、霊夢達は炭坑で起こった異変の事を二人に話した。流石の二人もフングスには弱いのか、顔を青ざめる。

「大変……でしたね……」

「キノコ怖いキノコ怖いキノコ怖いキノコ怖いキノコ怖いキノコ怖いキノコ怖い(r y)」

「大変っていうレベルじゃねえよ。そしてどんだけヘタレだ、真壁」

「誰がヘタレか!？」

「つつこむ気力はあるのか……」

縮こまってガタガタ震える真壁につつこむ魔理沙に、逆につっこむ真壁。萃香は酒を飲みながらしみじみと呟く。

その時、マリアが思い出したかのようにグリムに話しかける。

「そういえばグリムさん。今、懐かしい人が来てますよ?」

「懐かしい顔?」

「もう少ししたら戻って来ると思いますが……あ」

すると自動ドアが開き、大荷物を抱えて危なっかしく運ぶ少女が入

ってきた。

「…ただいま」

「ん？この声、どっかで聞いたような……」

「奇遇ですね、私もです」

少女の声に、霊夢と妖夢は首を傾げる。

「あ」

「「「え」「」」

その時、少女は足を躓いて転び、大量の荷物が宙を舞う。

「どわああああ！？」

「うおおおおお！？」

「のわああああ！？」

「ぎゃああああ！？」

「ひiiiiiiii！？」

荷物が地面に落ちそうになり、ダイビングキャッチする小町、魔理沙、霊夢、美鈴、鈴仙。特に、美鈴は咲夜に蹴っ飛ばされてやらざれている。

そして、転んだ少女はというと。

「こっち、こっち」

自分の身体を動かして、落とした自分の首を拾おうとしている。首無しの身体が首を拾い上げると、少女は何事もなかったかのように首を元通りにくつつける。

「久しぶり、グリム。アルバートさん」

「「「デユラ娘!?!?!」」」

「「「……え?!?!」」」

少女、デユラ娘の名前を同時に叫ぶグリムとアルバート、そして霊夢達。そして互いの顔を見合わせる。

「なるほど、デユラ娘は夢幻界出身だったのね……」

「まさかデユラ娘の出張先が幻想郷だったとはね……何の因果関係だか」

霊夢とグリムがしみじみと言う。一騒動あったが、とりあえずデユラ娘がすべてを話した事で騒動は終結する。

「通りで博麗大結界に夢幻界が映った時から、姿が見えなかったんですね……」

「くっ…こんな貴重な情報源を私は何度も見落としていたとは……」
納得したように妖夢は苦笑いをする。そして夢幻界の事を知るまでは、何度もデュラ娘を見かけていた文は地面にはいつくばって後悔する。

それを尻目に、咲夜は霊夢に問い掛ける。

「さて霊夢、これからどうするの？」

「そうね。また今日みたいな事があるかもしれないし、妖夢の刀が直るまで明日からミッドガルドを探索ね」

「では私も霊夢さんと同じく」

霊夢と妖夢は白楼剣が直るまではミッドガルドを探索する事にする。

「私は明日、一度帰って装備を整えるぜ」

「じゃあ私も一度帰るわ。人形を補充しないとイケないし」

「私もお嬢様に報告しなければならぬので」

「さ、咲夜さん。私は？」

「貴女はここに残りなさい」

「ええええ！？」

魔理沙、アリス、咲夜は一度幻想郷に帰り、装備の補充と上司への報告へ。美鈴は哀れ居残りに……。

ついでに、橙と小町も一旦幻想郷に戻る事になった。橙は藍を心配させない為に、小町は死神の仕事に戻る為である。

早苗と鈴仙、萃香、にとり、文はミッドガルド探索側へ。早苗にとりは夢幻界のロボット、鈴仙は夢幻界の薬草やハーブに興味がある為である。萃香と文は何となく。いいのか強豪妖怪二人。別にい

こうして、霊夢、妖夢、早苗、にとり、鈴仙、萃香、文は夢幻界に残り、

魔理沙、アリス、咲夜、橙、小町は幻想郷に戻る事になった。

日も暮れてきた為、厨房を借りて夕飯を作ろうとする咲夜と妖夢。手伝いとして鈴仙やマリアも加わる。

「さて、何を作ろうかしら？」

「…じゃあ、キノコご飯！」

「」「」却下！！！！」「」

今日の献立を考える咲夜に、デユラ娘が提案する。しかし、今回の事件のせいで、キノコを使った料理は作られなかったとか……。

その頃、夢幻界の各地では不穏な動きがあった……。

「兄さん、幻想郷から来た巫女の一行がアルバートと互角に戦ったらしいよ。ミッドガルド中が噂をしている」

「あのアルバートと互角か。刃の奴が負けたと聞いた時には信じられなかったが、一度手合わせ願いたいな」

紅蓮山。強さを求め、鍛練に勤しむ鬼の兄弟。

「……神殿から異様な雰囲気漂う……。

今のところ問題無いみたいだが……何か悪い予感がする………」

海の底。朽ちた神殿を見守る謎の妖怪。

「何故……オレは生きている………？」

「ここは……何処なんだ………？」

何処かの地下室。自分の身体を見渡し、自問自答を繰り返す異形の大男。

「もうすぐだな、兄上」

「ああ。もうすぐ、あいつに復讐できる……。
覚悟しろ、アルバート……！！」

古びた灯台。アルバートに復讐を企む二体のロボット。

「……………真壁くん／＼／」

妖精の森。一人の少年を想う、妖精の少女。

そして、魔理沙が炭坑で拾ったクイーンフングスの一部。

霊夢達の行く手に立ち塞がる強者達。

幻想郷も魔理沙が持つクイーンフングスの一部で、更なる戦いを生む。

その事を、今の霊夢達を知るよしもなかった……………。

おまけ

メタルガーディアンズ本部 浴場

ゴシゴシゴシゴシゴシゴシ……

「霊夢さん、擦り過ぎです……」

「あー。そんなに擦らなくても孢子は落ちるよ」

「……あ、肌が真っ赤に」

身体についた微量のフングスの孢子を落とそうと、過剰なくらいに身体を洗うグリム以外のフングス退治組であった。

その後、皮膚を痛めて悲鳴をあげたのは言うまでもない。

第十五話 閑話『つかの間の日常へ』（後書き）

装備を整える為に一旦幻想郷に帰還する魔理沙。

手に入れたクイーンフングスの一部を使った実験の為、魔理沙は材料集めを開始する。

最初のターゲットは紅魔館の地下、大図書館の本。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

魔理沙の蒐集大作戦『第一陣：大図書館の七曜の魔女』

285

白米「次回から暫くの間、幻想郷と夢幻界の出来事を交互に話を進めていきます。

でもって漸くまともに登場しました、ソードー鉄道員さんの所からのゲスト、デュラ娘です」

デュラ娘「……よろしく」

魔理沙「漸く私達と合流したな。で、もう一人のゲストは何時登場するんだ？」

白米「も、もうちょっと待ってください!？」

霊夢「まあまあ、魔理沙、待ってあげなさい。白米だってちゃんと考えがあるんだから」

白米「たださえ、オリキャラ五人集の最後の二人の出番が先伸ばしにされているから、急かされると書けるものも書けません……」

魔理沙「……あー、悪かった」(汗)

白米「という訳で、今回は魔理沙メインの話第一弾！」

霊夢「サブタイで誰が出るかが分かるわね……」

白米「ま、ね。大図書館といえば、あの人ですから」

デユラ娘「…それでは、引き続き感想・質問を受け付けるわ。私に
関しての質問はソード・鉄に訊いてね。

次回も、リリカルマジカル頑張ります……あ「(回った拍子に首
が落ちる)

第十六話 魔理沙の蒐集大作戦『第一弾：大図書館の七曜の魔女』（前書き）

リアルが忙しかった為に、少し遅れてしまいました（汗）

最初に申し上げます。今回の話、レミ咲要素があります。しかも、かなりイっちゃっています。

『こんなにラブラブなレミ咲は認めん！』とおっしゃる方はブラウザバックを推奨します。

第十六話 魔理沙の蒐集大作戦『第一弾：大図書館の七曜の魔女』

幻想郷 魔法の森 霧雨魔法店

装備を整える為、幻想郷の自分の家に戻ってきた魔理沙は、大きな釜の中身を掻き混ぜる。

「さて、このフングスの女王の一部を入れる訳だが……」

魔理沙は夢幻界の炭坑で拾った瓶詰のクイーンフングスの一部を眺め、それを机の上に置いて本を読みあさる。

「貴重な材料だから……もう少し情報や材料が欲しいな」

魔理沙はクイーンフングスの一部を使い新たな魔法、もしくはマジックアイテムの開発をしようとしているのだ。魔理沙の言う通り、拾ったクイーンフングスの一部は限られている為、無駄にできない。

「よし、まずは資料集めだな」

本を閉じて机に置き、魔理沙は外に出ると箒に乗って何処かへ飛び去った。

……魔理沙が飛び去った後、ビンの中にあるクイーンフングスの一部が微かに蠢いた。

妖怪の山の麓 霧の湖 紅魔館

「以上が、夢幻界で見て来たものの一部です」

「人間の町を守る機械の兵隊。エルフやグレムリン、ドワーフといった幻想郷にいない生態。フングスと呼ばれるキノコの怪物、ね……」

咲夜が入れた紅茶を上品に飲みながら、十歳にも満たなさそうな外見の少女が咲夜の報告に耳を傾ける。外見だけ見ればただの子供だが、背中から生える蝙蝠の羽がそれを否定している。彼女の名はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主にして吸血鬼である。

「御苦労だったわね、咲夜」

「もったいなきお言葉、ありがとうございます。では、館内の掃除に……」

「待ちなさい、咲夜」

「え、お嬢様？

！？」

早速仕事に戻ろうとする咲夜をレミリアが引き止めたと思ったら、

右手で咲夜の頬に手を当て顔を近づける。いきなりの事に咲夜は赤面し、レミリアの顔に見取れる。

ちなみに、レミリアは台座を使って身長差を補っている……。そこ、笑うな。

「お、お嬢様……何を……／／／」

「何って、決まっているでしょ？私の為に、危険を冒してまで夢幻界を調査してくれた咲夜の苦勞を労おうと、ね？」

「そ、そんな……／／／」

私、これから館内の掃除や昼食の準備をしなければならぬのに……／／／」

「そんな事、後でできるでしょ？それとも、咲夜は私とじゃ嫌なの？」

「！！」

そんな、滅相ありません！！」

「なら、いいわよね……」

「ああ、お嬢様……／／／」

何やら怪しいムードが部屋中を支配していた。主に子供が見てはいけないレベルで。

二人の顔の距離が徐々に縮まり、咲夜は目を瞑る。

そして

ドガアアアアン

ぎゃ ああああああああ！！？

ガッシャーン

くせ者だー！であえであえ！！

正門の方から響く爆発音と悲鳴、直後に下から聞こえてきた何かの割れる音と妖精メイド達の叫びでムードは壊れてしまった。しかも、『マスタースパーク！』という掛け声があったので侵入者は魔理沙だろう。

「「……………」」

「……………美鈴なら魔理沙相手に3分は持ったわよ」

「……………あの娘を夢幻界に置くべきではなかったですね」

不甲斐無い門番代理にイラつくレミリアに、ホツとしたのか残念だったのか複雑な表情をする咲夜。

何気に門番としての機能をちゃんと果たしていた美鈴。彼女を夢幻

界に置いて来てしまった事を、今後悔するようになった咲夜であった。

その頃、紅魔館の地下 大図書館。

『ウヴァル図書館』と呼ぶ人がいるが、それはこのステージのBGMの名前である。勘違いする人が多いので注意。

ともかく、大図書館の主パチュリー・ノーレッジは高く積まれた本に囲まれながら一冊の本を読んでいた。タイトルは『空き巣を懲らしめる108の方法』。

パチュリーは顔をしかめて上を見る。ドタバタと忙しく響く足音と何かが壊れる音を聞き、パチュリーはため息を吐く。

「また来たわね、あの強盗魔法使い……」

ボタンと本を閉じ、魔法の書とスペルカードを片手に大図書館の出入口を見据えるパチュリー。スペルカードを頭上に掲げ、宣言する。

「 日符『ロイヤルフレア』……!!」

放たれた光は扉を直撃して爆発。それと同時に舞う煙と埃を吸い込まないように口を塞ぎながら、パチュリーは壊れた扉の先を睨む。

「やれやれ。手荒い歓迎だな」

「盗んだ本を全て返しなさい、この白黒魔女」

「人聞き悪いぜ。私はただ借りてるだけだぜ
私が死ぬまで」

「…だったら、今ここで殺してあげるわ……」

「遠慮しとくぜ」

壊れた扉を境に会話を交わす二人の魔法使い。

「夢幻界での新たな戦いに備えて、新しい魔法を研究中なんだ。だから資料として何冊か借りるぜ」

「その前に、私の所から持ち去った本を返しなさいと言ってるわよね？」

そして早速物色し始める魔理沙に再度注意しながら、パチュリーはスペルカードを構える。

「火符『アグニシャイン』!!」

パチュリーがスペルカードを宣言すると、炎の渦が魔理沙に向かって襲い掛かる。魔理沙は上空へ飛んで回避するが、炎は本や棚に当たる事無く弾かれる。

この大図書館には、本に弾幕が被弾しないようにパチュリーによって特殊な結界がかけられている。その為、パチュリーは遠慮無くスペルカードを使用する事ができる。

原作にそんな設定は無い？

こういう解釈が無いと大図書館で弾幕勝負できないでしょうが。原作でもパチユリーは、大事であるはずの図書館でスペルカードを使いまくっていたし。

ともかく、売られたケンカを買うかの如く、お返しにと魔理沙はスペルカードを宣言する。

「魔符『スターダストレヴァリエ』！！」

魔理沙は星を模した弾幕を発射するが、パチユリーはその合間を縫うように飛んで避ける。

「……木金符『エレメンタルハーベスター』」

魔理沙の弾幕を避けながら、回転鋸を模した弾幕を次々に放つパチユリー。回転鋸は金属音を鳴らしながら魔理沙に向かって飛んで行く。何気に、何発か首を狙って飛来している。

「うおおあああっ！？パチユリー、おま、私を殺す気か！？」

「何を今更。今まで貴女に奪われた本、殺しても奪い返す！！」

「……遠慮しとくぜ……私は天寿全うしたいんでな」

必死な表情で回転鋸を躲す魔理沙。そして、何気に物騒な台詞を吐くパチュリー。

「あら、火葬がお好みかしら？」

火&土符『ラーヴァクロムレク』！！』」

「おい待て、そんな事言つてねえよ！？ ぎゃあああああ！！？」

パチュリーは火の玉と泥玉を同時に発射し、魔理沙は回避に専念する。

ところで皆さんは知っているだろうか？ 溶岩は英語でlava（ラーヴァ）という。マグマは火山の中にある流動物体を指し、溶岩はそれが溶融体になって地表に出て来た物を指す。ちなみにマグマは日本語訳すると岩漿（がんしょう）になる。

それはともかく、火と泥が組み合わさった擬似溶岩弾幕を回避する魔理沙に対し、パチュリーは新たなスペルカードを取り出す。

「なあ、思ったんだが……お前、今日調子良さそうだな？」

「ここ最近、静かに本が読めたからね。誰かさんが夢幻界に夢中になつて此処に訪れなくなつてからは、ね……」

元々パチュリーは喘息持ちであり、酷い時は呪文を全く唱えられなくなってしまうのである。しかし、夢幻界が現れてからは悩みの種である魔理沙が大図書館に来る事が無くなっていった。本泥棒が来ない事により、パチュリーは安静に本を読む事ができるようになり、現在の様に絶好調になっている。

「貴女こそ弾幕に乱れがあるわよ。何をそんなに焦っているのかしら？」

「……」

パチュリーは、先程のスターダストレヴアリエの弾道の乱れを感知し、魔理沙に指摘してみた。凶星らしく、魔理沙は押し黙って視線を反らす。

しばらくして、魔理沙は口を開く。

「夢幻界に行つて分かった。今の私の力量じゃ、夢幻界の奴らと戦うには厳しいってな」

魔理沙は夢幻界で会った弾幕使い達と怪物の事を思い出す。

地面から壁を作り、直線攻撃に強いぬりかべの少年。

幻想郷一の素早さを誇る文と、直角以上のスピードを出す鎌鼬の忍者。

大剣一つで妖夢と渡り合える、機械仕掛けの鎧騎士。

そして、規格外の大きさを持つ、不気味な毒キノコの親玉。

魔理沙達はこれらを相手になんとか勝利したが、一步間違えれば敗北は必至な戦いだっただ。これからも、彼ら以上の力の持ち主と戦う事もあるだろう。

「だから、その為にも新しい力が必要なんだ……」

「……」

パチュリーは、そんな魔理沙を見つめてため息を吐くと、一枚のスペルカードを取り出す。

「……この本を持って行きたかったら、私との弾幕勝負に勝つ事よ」

「パチュリー？」

「次で最後よ。勝ちたいなら全力を出しなさい、いつもの様に」

「……ああ！」

パチュリーの真意を察し、それに答えるべく魔理沙はスペルカードを取り出す。

自分が一番得意とする、必殺のスペルカードを。

「恋符『マスターパーク』！！」

「火水木金土符『賢者の石』！！」

魔理沙はミニ八卦炉から極太のレーザー光線を発射。パチュリーは自分の周りに五色のクリスタル状の物体、賢者の石を召喚して五属性の弾幕を発射する。

そして、大図書館は光に包まれた。

数時間後

魔理沙はボロボロな姿になりながら、箒に乗って紅魔館を後にする。手には、キノコに関する魔術や様々な知識が書かれた本が入った袋が握られていた。

勝敗は引き分けとなったが、負けはしなかった。なので本を拝借する事ができた魔理沙だった。

しかし、

「なんでお前までついて来るんだ？」

魔理沙は後ろを振り返り、箒に腰掛けながら本を読むパチュリーにつっこむ。

「確かに負けはしなかったけど、勝ちはしなかったから私も貴女の研究に付き合うのよ」

「……本音は？」

「今貴女の家にある本を、何冊か返してもらいに。後、研究が終わったらその本全部返してもらおうよ」

「へいへい……」

げんなりとした表情で、ゆっくりと自宅に向かって飛行する魔理沙。引き分けになったのに自分だけ利益があつてパチュリーには無いのも理不尽な為、素直にパチュリーの本を返そうと思ったとか……。

「（まあ、また借りればいい話だし）」

懲りてはいなかったが……。

霧雨魔法店

大図書館から借りてきた本を片っ端から読み、必要と思われる材料をメモしていく魔理沙。一方で、粗方持ち帰る本を決め、河童お手製の電話で小悪魔に引き取りに来るように連絡し終えたパチュリーは、ビンの中にあるクイーンフングスの一部を眺めていた。

「よし、大体分かったぜ」

「あら、意外と早いよね」

「殆どは今家にある奴で何とかなるな。後は家には無い五つの材料を調達するだけだな……」

「……盗むの間違いじゃない？」

パチュリーは魔理沙に冷たい視線を送った。それに苦笑いで誤魔化しながら、魔理沙は材料調達ルートを模索する。

その時、ビンの中のクイーンフングスの一部が微かに動いた事を、彼女達は気付かなかった。

おまけ

その頃、レミリアと咲夜はというと……。

「ふふ。たっぷりと楽しませて貰うわよ……」

「ああん……お嬢様、そんな…… / / /」

「…… / / /」

お前ら自重しろ的な展開まで至っており、ドアの隙間からその様子を見てしまった小悪魔は、顔を真っ赤にして鼻から血を流していたとか。

これ以上はR - 15を超える展開が続く為、割愛。

紅魔館地下

「……夢幻界か」

表現が難しい特殊な羽、紅い洋服を身に纏った金髪の少女が『文々。

新聞』を読み、可愛らしい見た目に相応しい笑みを浮かべる。しかし、幼女の思っている事は、それに相反するものだった。

「咲夜や魔理沙を手こずらせる相手がいるなんて、俄かには信じられないけど……」

もしそれが本当なら、その人達と遊んでみたいな……

『悪魔の妹』 フランドール・スカーレットは、まだ見ぬ夢幻界の強者に興味を持った。

そして、如何に姉やメイド達に気付かれずに外に出るか、考えはじめてしまった。

幻想郷で新たな動きが発生し、舞台は再び夢幻界に移る。

第十六話 魔理沙の蒐集大作戦『第一弾：大図書館の七曜の魔女』（後書き）

ミッドガルド北東にある廃墟で怪物が出るという噂を聞き付けた霊夢達。

何人がビビる中、真相を確かめる為に廃墟に忍び込む一同。

そこにいたのは悍ましい外見を持つ、某怪奇小説に登場する『あの怪物』であった。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

怪奇『廃墟の怪物』

白米「レミ咲部分はやり過ぎたと思います。だが私は謝らない」

霊夢「夢想封印!!」

白米「あべしっ!?!」

霊夢「なんかこっちのレミリア、凄い事になってるわね……」

白米「ぐふっ……他の二次創作では『カリスマ（笑）』な扱いだから、この小説では常時カリスマになっております。

ただし、カリスマブレイクはしますので、ご安心を」

霊夢「何がよ」（脳天をお被い棒で殴る）

早苗「次回は再び私達の回ですが、『あの怪物』って何ですか？」

白米「……結構有名な奴ですよ。皆さんも名前ぐらいは知っている筈ですよ？」

霊夢「どんな奴よ？」

白米「……」（黙ってカンペを手渡す）

霊夢「……なるほど……」

早苗「……あー、確かに有名ですね……」

白米「最も、こっちの呼び名は本来の名前ではないですけどね……」

咲夜「では、引き続き感想・質問を受け付けます。次回もお楽しみに」（肌つやつや）

霊夢「そんなに良かったんかい」（汗）

咲夜「そんな…私は常にお嬢様に忠誠を誓っている身。決してその
ような関係では……」(ダラダラ)

白米「ただし、その忠誠心は鼻から出る」

第十七話 怪奇『廃墟の怪物』（前書き）

夢幻界生物図鑑

「バンシー」

死者が出る家に現れ、泣く事でそれを知らせる妖精。名前はケルト語で「妖精の女」という意味である。異説もあるが、殆どの場合は長い髪に青白い顔をしており、眼はいつも泣いている為いつも真っ赤に充血していると謂われている。若い女の姿や老婆の姿など様々である。アイルランドでは、若くして亡くなった娘の化身がバンシーであると謂われている。

死を告げる能力を持ったため悪いイメージを持たれがちだが、実態は死人が出てしまった事を悲しんでくれる善良な妖精である。多くの者に慕われた著名人が死んだ際は、複数人のバンシーが現れる事があるので、バンシーの数は死んだ人の偉大さを示しているとも謂われている。

しかし、悲鳴に近い声で泣くため騒音は必至。葬式行つ前後は、耳栓を着けて寝る事をオススメする。

第十七話 怪奇『廃墟の怪物』

夢幻界 メタルガーディアンズ本部

遅めの昼食をとっていた霊夢はアルバートの話を聞いていた。

「怪物？」

「ああ。ミッドガルド北東にある廃墟と化した館に、怪物が出現したという報告を受けた」

アルバートによると、昨日の晩に廃墟で肝試しをしていた青年達が、人の形をした異形の怪物に遭遇し、命からがら逃げ出したらしい。ミッドガルド北東にある廃墟は、夢幻界が誕生して間もない頃に人間の新たな拠点として建てられたものである。当時の人間は、妖怪や魔物に怯えながら夢幻界の土地を開拓しようとしていた。しかし、エルフやグレムリンといった人間と友好的な妖怪・妖精が現れたのを皮切りに、段々と人間と妖怪の間が縮まっていき、何時しか夢幻界は幻想郷の様に人と妖怪が共存する世界となった。最初の人間の拠点であるミッドガルドが発達し、それ故に拠点を増やす必要がなくなり、人々はミッドガルドに集中する様になっていった。その為、現在の廃墟は住民が出て行って数十年間、今まで誰も住んでいない。最初は青年達の悪戯かと思われたが、今朝、一応調査に向かった機兵が消息を絶った為、今夜捜査に乗り出す事になったのだ。そこで万が一の為、巫女である霊夢に同行を願うべく、アルバートは霊夢に声をかけたのである。

「なんで私も行かなきゃならないのよ……」

「妖怪退治の専門家として力を貸して欲しいのだ。無論、手伝ってくれれば報酬を払う」

「いくら？」

「最低でも万単位」

「よし、引き受けるわ」

報酬によって依頼を即刻に引き受け、霊夢は急いで昼食を食べ終える。

「準備するから待ってなさい」

「調査は夜だから、焦らなくてもいいぞ」

早足で部屋を出る霊夢に、アルバートは一声かけた。聞こえていたかは微妙だが。

その夜、ミッドガルド北東。

目的の廃墟を見上げる霊夢とアルバート。他の機兵達は、今朝消息を絶った機兵の二の舞になりたくないと全員調査の同行を拒否した為、ここにはいなかった。

その代わりに、

「さあ、怪物退治の始まりですね！」

「ふふふ。スクープの予感がしますね……」

「みよおおおおん……ウドンゲさあ〜ん」

「あははは……」

「お気の毒に……」

意気揚々としている早苗、カメラを構える文、涙目になっている妖夢に、それに泣きつかれて苦笑している鈴仙と同情している美鈴が同行する事になった。美鈴の後ろには何故かついて来たデユラ娘が隠れていた。

ちなみに萃香は食堂で飲んだくれており、にとりはグリムと一緒に新たな機兵製造を行っている。

「霊夢」

「何よ？」

「妖夢、どうしたんだ？」

「ああ、あいつはお化けや怪談が苦手らしいの。半分幽霊の癖に」

「……」

哀れみの目で妖夢を見るアルバートだった。

「で、廃墟に入らないの？」

「いや、実はもう一人と待ち合わせしているところだ」

もう一人？ と霊夢が首を傾げると、疾風と共に黒い影がアルバートの隣に立つ。霊夢達はその人物に見覚えがあった。

「待たせた」

それは、ミッドガルドに入ってから霊夢達と別れた鎌鼬、風鳴刃であった。

「あややや、刃さんお久しぶりです」

「久方振りだな、射命丸殿」

握手を交わして再会を喜び合う最速コンビ。そんな二人に呆れながらも、霊夢はアルバートに視線を移す。

「私が雇ったのだ。何か問題でも？」

「……別に」

以前、たかが道案内程度で多額の料金を要求された事もあり、霊夢は刃に苦手意識を持っていた。

何はともあれ、霊夢達は廃墟の中に入った。その時、妖夢とデユラ

娘が喚いていたが、無視された。

廃墟の中は、所々薄汚れていて不気味な雰囲気醸し出しているが、前回のフングスに汚染された炭坑に比べれば、まだマシな方であった。霊夢達が最初に入って来たエントランスでは天井にはシャンデリアがあり、数十年前は豪華さを強調とした空間だったのである。当然ではあるが、今はシャンデリアに光が点っていない為、薄暗くなっている。正面には扉があり、その両隣には2階に続く階段がある。

「どうする？ 一々一部屋ずつ調べてたら夜が明けるわよ？」

「そうだな……」

霊夢とアルバートが思考しているところに、早苗がある事を提案する。

「二手に別れて、一階と二階を調べるのはどうでしょう？」

早苗の案に、霊夢とアルバートは顔を見合わせ、承諾する。

「それもそうね」

「その方が効率的だな」

斯くして、色々と口論などがあつたが、グループが決まった。

一階は霊夢、早苗、美鈴、文、刃、

二階は妖夢、鈴仙、デユラ娘、アルバートがそれぞれ調べる事になった。

一階組は正面入口、二階組は階段を上ってそれぞれの部屋を探索した。

…また誰か、来たのか……？

…うっ………思ま思ましい……。

…あいつらも、オレの姿を見たら………う言っだろっな……。

…化け物って……。

…もう、ほっといてくれー！

…オレは静かに暮らしたいんだ………！

一階

霊夢達は、近くにある部屋から片っ端に調べて奥に進む。廃墟の中はアパートの様に一部屋一部屋が2、3人住めそうな部屋になっている。キッチン、トイレ、風呂が完備されており、全盛期では中々良い物件だっただろう。今は当然ながら水道、ガス、電気が使えないのだが、少々もったいなく思えて来てしまう。

霊夢達は二手に別れ、左右両側の部屋を同時に調べる方法を行った。左は霊夢と早苗のW巫女、

「…これといって手がかりは無いわね……」

20部屋まで調べたところで、霊夢がため息を吐く。終いには、もう帰ろうかしら、等と小声で呟いている。

「霊夢さん、まだそうとは限りませんよ?」

「何よ早苗、これだけ調べても何も出て来ないし、どうしてそう言えるのよ?」

次の部屋を早々に調べ終え、

霊夢は早苗に問う。それに対し、早苗は自信満々に言う。

「霊夢さん、古今東西使われなくなった施設や、誰もいない筈の廃墟に怪物が出るのはお約束なんですよ?」

「ふうん」

「例えば、図書室に全身がブルーベリー色した全裸の鬼がいたり……」

「へ」

「風呂から巨大なハサミを持った殺人鬼が飛び出したりとか……」

「ふんふん」

「扉を開けたらゾンビが人間を食っていたり……」

「……」

「ホッケーマスクを被った男が鉈を振り回して来たりとかしますから……って、聞いてます？」

「はいはい。じゃあ、部屋に入ったら全裸の変態がない事を祈ろうかしらね」

「……完全に舐めきってませんか、霊夢さん？」

どっかで聞いた事あるような怪物の話を立ててキヤーキヤーと一人盛り上がる早苗だが、霊夢は我関せずと次々に部屋を調べながら聞き流していた。霊夢の態度に、呆れの表情を見せる早苗。

その時、先に行っていた美鈴が霊夢達の下に駆け寄る。

「霊夢さん、来てください！」

「どうしたのよ美鈴？ ブルーベリー色の怪物の死体でも見つけたの？」

「寧ろ、その怪物を仕留めた強者がみたいですよ……………じゃなくて、いいからこっちに来てください！」

美鈴のただ事ではない慌て振りに嫌な予感を感じた霊夢は、早苗と共に美鈴の後を追う。

その頃、二階を探索に当たっているアルバート達はどうと……………。

「……………」

鈴仙は妖夢に、アルバートはデユラ娘に抱き着かれ、冷汗を流しながら進んでいた。デユラ娘の場合、グリムにバレたら何されるか分かったもんじやないだろう。二手に別れる案をこの組でも考えられしたが、妖夢とデユラ娘が却下した為、こうして一緒に行動しているのである。

「…鈴仙」

「…何ですか？」

「大変だな……」

「はい……」

そんな会話を交わしながら足を止めない二人。その為、妖夢とデユラ娘はズリズリと地面に引きずられる。ちなみにデユラ娘の首はアルバートに持ってもらっている。傍から見たらホラーである。

そんなこんなで二階最後の部屋の前にたどり着くアルバート達。

漸く立ち直ったのか、普通に立っている妖夢とデユラ娘。若干涙目だが……。

そんな二人を見て、アルバートはため息を吐きながら諭す。

「二人とも、次で二階は最後だから頑張ってくれ……」

「……」

「満身創痍ですね……」

「……」

鈴仙の一言に、アルバートは頭を抱える。一旦ため息を吐いた後、二階最後の部屋に入るべくドアノブに手をかける。

その時……。

……う……う……う……う……。

扉の向こうから噉り泣きが聞こえてきた。まさかの展開にアルバートは唾然とし、後ろにいた少女3人の顔から血の気が引く。

「え、マジですか？ 嘘、マジですかあ！？」

「助けてみよおおおおん！」

「…助けてデュラああああ」

「3人共、落ち着け。そして妖夢とデュラ娘、その語尾は何だ？」
扉の前で小声でやり取りする4人。アルバートは鈴仙達につっこんだ後、部屋に入ろうとドアノブを握る。

「ちょ、アルバートさん！？ お化けがいたらどうするんですか！？」

「いたら倒すのみ。それに妖夢、お前には楼観剣があるだろう？」

「みよん！？ た、確かに私の楼観剣に斬れぬものはあんまり無いですが……」

「なら、問題無いな」

「みよんんんん！？」

予想斜め上に行く展開に、アルバートはゆっくりと扉を閉める。後ろを振り向けば、鈴仙の胸に顔を埋めて泣いている妖夢とそれを慰める鈴仙、そして唾然とした表情を浮かべるデュラ娘の姿があった。

「……」

そして扉に向き合つとアルバートは無意味な深呼吸を行い、勢いよく扉を開けながらシャウトする。

「何やつとるか貴様はあああああ！！！！」

「うひゃうう！！！！？」

アルバートのシャウトに、少女は音を立ててベッドから転げ落ちた。

「……何か言う事はあるか？」

「……ゴメンナサイ……」

とりあえず、アルバートは少女に拳骨をかまし、正座させた。頭にデカいタンコブを作って俯く少女。心なしか、タンコブから煙が吹き出している。

「で、お前はこいつに何か言う事無いのか、デュラ娘？」

「……………」

アルバートは後ろを振り返り、妖夢と鈴仙の背後に隠れるデュラ娘に声をかける。

デュラ娘は二人の服をキュツと掴み、出て来る様子はない。しかし、場の雰囲気は何と無しに察知した妖夢と鈴仙によって少女の前に押し出されてしまった。

「あ……………」

「あ……………」

目が合い、気まずそうに目を逸らす二人。

「……………フェイちゃん……………」

「……………デュラ娘……………」

長い沈黙の後、互いの名前を呼び合う二人。

少女の正体はフェイ。夢幻界に住むバンシーという妖精であり、デュラ娘のかつての友人である。

外見は茶髪でツインテール、目は青色、胸は…中ぐらい。バンシーのイメージとは程遠い太ももが見えるほどのミニスカートでハートのマークが付いた服、胸にはペンダントを着けている。

外見が某魔砲少女の金髪黒服の魔法少女に似ているが、気にしては

いけない。断じて気にしてはいけない。大切な事なので二回言いました。

実はデュラ娘が夢幻界から離れる際、この二人は何故か喧嘩してしまい、それ以来会っていない。その為、現在この様な意外な出合い方をしてしまい、互いに気まずい空気になってしまっている。

沈黙を続けていた二人だが、流石に耐え切れなかったのかフェイから口を開いた。

「か、帰ってきてたのね。知らなかった……」

「……だって、言っていないもん……」

「む！」

あまりに冷たいデュラ娘の態度に、フェイは顔を強張らせる。漫画やアニメだったら怒りマークが付いていただろう。

「あつそ！ それにしても意気込んで夢幻界から出ていった癖に、今頃おめおめと帰ってきたのは何故なの？ 他の世界じゃうまくいかなかったのかしら？」

「……！」

フェイの台詞に、デュラ娘は表情を険しくする。こちらも漫画やアニメなら怒りマークが付いていただろう。

「……そんなんじゃないもん……それにフェイちゃん、私がいなくなつて泣いてたんじゃないの……？」

「（ピキッ）誰が貴女の為に泣くのよ！ それに、そんなんじゃないなら何で戻って来たの？ ホームシックでもしたの？」

「（ピキッ）……そういえば……さっき泣いてたけどどうしたの……？
……泣き虫フェイちゃん……？」

「」「（ピキピキッ）……」「」

先程の空気とは一変、修羅場の雰囲気と化した。

睨み合う二人を見てため息を吐くアルバートと鈴仙、妖夢。
とりあえずアルバートは二人の隣に立ち、両腕を上げる。

「喧嘩両成敗！！」

「「ザラキっ！？」」

アルバートは二人同時に拳骨をかまし、その隙に妖夢はデュラ娘、
鈴仙はフェイを取り押さえる。

頭を抑えて膨れっ面になるデュラ娘を妖夢が慰めている間にアルバ
ートはフェイから話を聞く。

どうやら彼女は、霊夢達に敗れた真壁のお見舞いに行こうとしたが、
何て言えば言いのか分からず、終いには泣きたくなってしまうたら
しい。しかし、バンシーである彼女が人目につく所で泣くと勘違い
される為、あまり人が寄り付かないこの廃墟で人知れず泣いていた
らしい。

当然ながら、真壁は入院してはいたない為、彼女の取り越し苦労になるわけだが……。

そこでアルバートは、フェイが廃墟の怪物と何か関わりがあると考え、彼女に最近廃墟に出没する怪物の事と、ここに調査をしに来て行方不明になった機兵の事を訊いてみた。

しかし

「……何の事？」

「え」

「その話、初耳なんだけど……？」

フェイは目を丸くし、首を横に振る。

という事は

この廃墟には、フェイ以外の何者かが潜んでいる、という事になる……。

その頃、美鈴の案内により、一階大食堂へやって来た霊夢と早苗。そこにあっただのは、ある物を見て苦い表情を浮かべる文と刃の姿と

無残に破壊された機兵の残骸があった。

「これって……」

「もしかしくなくても、行方不明になった機兵ね……」

「私が発見した時には、既に事切れていました……」

早苗と霊夢は破壊された機兵を見て眩き、第一発見者である美鈴は苦々しく語る。機兵の損傷具合はかなり酷く、巨大な鈍器で何度も叩き付けられ、物凄い力で無理矢理引き裂かれたかの様な壊れ方をしていた。

行方不明になった機兵の末路を知り、霊夢達はアルバート達と合流する為に機兵から背を向けた。

その時、

「……ギギギ……に……んげん……?」

「「ひゃああ!?!」」

壊れたと思われた機兵が突然起動し、早苗と美鈴が悲鳴を上げる。

「……なぜ……にんげんが……ここに……? ……」
「は……たちいり……きんしの……はず……」

「何でって……」

突然の事に困惑する霊夢に、機兵は警告を続ける。

「……この……はいきよ……の……ちかに……ちがつ……くな……
……。……あいっは……ばけ……も……の……」

警告の途中で機兵の頭が落ち、目の光が消える。霊夢達は慌てて近寄るが、機兵はそれっきり動かず機能停止したようである。

「……地下って言いましたね、このロボットさん」

「……確か、この部屋の厨房に地下貯蔵庫に続く階段があったはずだが……」

機兵の遺言から、犯人は地下にいる事を推理する最速コンビ。それ

を聞き、早苗と美鈴が狼狽えだす。

「えー!? まさか地下に行くんですか、今から?」

「ウドンゲさん達を呼んで、一緒に調べたらいいんじゃないでしょうか……?」

「…それは無理みたいね……」

「」「」「え?」「」

二階組と合流したいという美鈴の提案を、後ろを振り返っていた霊夢が却下する。それに釣られて、他の4人も後ろを振り返る。

そこには……

ゴウッ

電気を帯びた巨大な拳が、霊夢達目掛けて高速で迫っていた。

「」「わあああああ!?!」「」

ドゴオッ

霊夢達は悲鳴を上げて側転で回避し、拳は機兵の亡きがらに直撃する。それにより、機兵の遺体は粉々に碎け散る。

「何奴！」

武器を構え、攻撃を仕掛けてきた相手を睨む刃。暗闇でよく見えな
いが、拳に帯びていた電気が廃墟の電気回路に当たったらしく、天
井の照明が薄い光を点す。それにより、怪物の姿が見えてきた。

「え!？」

「お前は！」

怪物の姿を見て、霊夢達は驚きの声を上げる。

2 m以上はあろうかと思われる巨体、継ぎ接ぎな縫い跡が目立つ不
格好な姿、見た者全てが嫌悪してしまいそうな不気味な顔。身体
の節々にはネジやボルトが刺さっており、身体から火花が飛び散り、
手足には電気が纏ってある。

…それは、誰もがよく知るあの怪物。ドラキュラ、狼男、魔女に並
ぶ有名な西洋の怪物。

早苗は、目の前の怪物に驚きを隠せず、その名を口にする。

「フランケンシュタイン!？」

『オオオアアアアア!?!?!?!』

怪物、フランケンシュタインは雄叫びを上げながら霊夢達に向かって拳を振り下ろした。

第十七話 怪奇『廃墟の怪物』（後書き）

猛攻、フランケンシュタイン。

何故、彼は人を襲うのか。

明かされる哀しき怪物の過去。

遂に、あの二人のスペルカードが解禁される！

次回、東方双界伝 } Another Fantastic
World .

人造人間『名前無き哀しみの怪物』

白米「という訳で、今回のボスは有名な怪物、フランケンシュタインです」

霊夢「一応訊くけど、何でフランケンシュタイン？」

白米「昔、図書館で『フランケンシュタイン』を読んだ事がありますね。東方双界伝を執筆する際に、ふとフランケンシュタインの話が頭に過ぎりまして今回彼を登場させました」

霊夢「…え？ て事は、あのフランケンシュタインは……」

白米「御察しの通り、原作『フランケンシュタイン』に登場するあの怪物本人という設定です」

霊夢「ちよ、大丈夫なのそれ!？」

白米「ZUN氏だって『かぐや姫』の話から輝夜を生み出しましたし、多分大丈夫かと……。アウトなら他の案もありますし……」

霊夢「不安だ……」

早苗「ところで漸く登場しましたね、ソドー鉄道員さんからのもう一人のゲスト、フェイちゃん」

白米「本当はもっと後に登場させる予定だったのですが、あまり待たせるのもアレなので今回の話に登場させました。次回ではデュラ娘共々活躍しますし」

霊夢「そういえば、ソドー鉄道員さんから二人のスペルカードを頼まれてたけど、どうなったの？」

白米「ご心配無く。それぞれに2枚程決まりましたので」

霊夢「ならいいけど」

美鈴「では引き続き、感想・質問を受け付けております。
次回もお楽しみに！」

第十八話 人造人間『名前無き哀しみの怪物』（前書き）

人間は、自分達と違う容姿を持つ者を恐れ、嘲り、差別してきた。白人による黒人差別。ナチス軍によるユダヤ人大量虐殺。情報不足による誤認で、エイズ患者を排除しようとする人々。

価値観の違いや、他人を過剰に否定して排除しようとしてしまう人間の短所により、争いが起こり、酷い時には多くの罪のない命が奪われた。

彼らは何をしたのか？ 何もしていないにも関わらず、相手を悪党と決め付けて自分達が正義と主張する者。客観的には、どちらが悪党に見えるか……。

今回は、容姿の醜さのせいで人々から悪者扱いされた、ある怪物の哀しい物語が語られる……。

読者の皆様、評価やたった一つの欠点だけで、一方的に嫌ってませんか？ 相手の事をよく知ろうともせず、頭ごなしに否定していませんか？

是非とも、それをよく考えてください。

第十八話 『名前無き哀しみの怪物』

昔、ヴィクターというスイスの名家出身の男がいた。

彼は科学者になる為に故郷を離れ、ドイツで自然科学を学んでいた。

ところが、ヴィクターは何時しか生命の謎を解き明かし、それを自在に操ろうとした。彼は、墓地に葬られていた死体や死刑囚の体のパーツを組み合わせ、人工的な生命を作り出そうとしたのであった。

その狂気すらはらんだ研究は、神の意に背く行為……。

しかし、ヴィクターはそれも承知で研究を続ける。科学者を志す者の性が、自分の研究の行く末をみたいという欲望が彼を動かしていた……。

そして11月の夜、ヴィクターの屋敷の地下室で悍ましき怪物が誕生したのであった。

夢幻界の廃墟で霊夢達は、怪物フランケンシュタインと戦っていた。

フランケンシュタインは雄叫びを上げ、霊夢達に向かって拳を振り下ろす。避けられる度に、拳は床や壁に直撃してクレーターを作り出す。

フランケンシュタインは天井に頭が当たりそうな程の巨体の為、霊夢達に比べて動き辛い印象がある。しかし、脚を上げて机を蹴り飛ばし、巨体のリーチを活かして霊夢達を追い詰めている為、中々の手強さを表している。しかもかなりタフで、霊夢の陰陽玉や美鈴の採光蓮華掌を喰らっても、のけ反るところか苦痛を感じている様子は無い。

幸い、戦いの場である大食堂は広く、霊夢達はフランケンシュタインの一撃を喰らわぬ様に、なるべく固まらず四方八方からフランケンシュタインを攻撃する。

『オオオオオオオ！！！！』

フランケンシュタインは机を両手で掴んで大きく振り回し、視界に入った美鈴目掛けて投げ飛ばす。美鈴は飛んできた机を蹴りで破壊し、フランケンシュタインに向かって弾幕を放つ。

「華符『芳華絢爛』！！！」

まるで、花が咲くようなイメージの弾幕が襲い掛かって来るも、フランケンシュタインは弾幕が当たっても尚美鈴に向かって一歩踏み出してパンチを放つ。

「がはっ！？」

フランケンシュタインの拳が直撃し、美鈴は吹き飛ばされて壁に激突してしまふ。

「風符『風神一扇』！！！」

「刃符『颶風の大鎌』！！！」

文と刃もスペルカードで応戦するが、フランケンシュタインは突風や真空波をもとせずに両腕を胸の前に×字に組む。身体中に電流が走り、フランケンシュタインの眼が光る。

『ウオオオオオオオ！！！！』

「きゃあ！？」

「うぐっ！？」

咆哮と共に両腕を広げ、フランケンシュタインは全身から広範囲に渡る電撃を放つ。それをまともには喰らい、文と刃は墜落してしまう。フランケンシュタインはそのまま、電気を纏った両腕を霊夢と早苗に向ける。バチバチツツと火花が走り、両腕から二人に向かって稲妻が発射される。霊夢と早苗は間一髪で回避し、フランケンシュタインに向かってスペルカードを宣言する。何でもいい。とにかくフランケンシュタインを倒すまでとは行かないまでも、妖夢達がここに辿り着いてくれるまで時間を稼がねばならない。ここまで派手に暴れたので、流石に妖夢達も物音で気付いてくれるだろう。

「秘術『グレイソーマタージ』!!」

早苗はお被い棒で虚空に五芒星ペンタグラムを描く。五芒星は無数の弾幕と化して、広範囲且つ高密度に広がっていく。しかし、鋼鉄並の頑丈さを誇るフランケンシュタインには無意味に等しかった。

しかし、それは囿である。

「『八方鬼縛陣』!!」

弾幕に紛れてフランケンシュタインの足元まで近付いた霊夢は、地面にお札を叩き付けて広範囲に結界を張る。破魔の力を宿した結界の威力に、さしものフランケンシュタインも苦痛に顔を歪める。

「はああああ!!!」

『!?!?』

霊夢は結界に力を込め、結界の力を強める。それによりフランケンシュタインの巨体が浮かび上がり、天井に激突する。その間にも、強化された結界の力がフランケンシュタインを傷付け、フランケンシュタインは声にならない悲鳴を上げる。霊夢が結界を解くと、フランケンシュタインは床を突き破り地下に落ちていく。その際、大量の埃が煙幕の様に舞う。

「やったかしら？」

埃に咳込みながら、様子を伺う霊夢。煙幕が晴れると、床にポツカリと空いた大穴があるだけだった。それを確認すると、霊夢は早苗の方に振り返る。

「今のうちに美鈴達を連れて逃げるわよ」

「わ、分かりました！」

そう言って美鈴達の下に駆け寄ろうとする二人。

ドゴオオ

『ウオオオオオオ!!!』

「え!?! きゃあああ!!!」

しかし、そうは問屋が卸してくれる筈もなかった。突然床を突き破り、フランケンシュタインが霊夢を鷲掴みにして壁に叩き付ける。その衝撃に、力無くお祓い棒を落とす霊夢。

更にフランケンシュタインは容赦無く、霊夢におよそ10万ボルトの電気を流し込む。

「あああああ！！？」

「霊夢さん！ ああっ！！？」

電撃を受け、更に苦しむ霊夢。

彼女を助けようと早苗はスペルカードを取り出すが、宣言する前にフランケンシュタインの眼から電気光線が発射される。それをまともに喰らい、早苗は吹き飛ばされて気絶してしまふ。

「早苗！ くあっ……！！！」

尚も執拗に霊夢を電撃で苦しめるフランケンシュタイン。その顔は怒りに歪み、口を開く。

『ここから出ていけ！』

「！？」

スラスラとした口調で喋るフランケンシュタインに、霊夢は驚く。

『オレの縄張りを侵す者は、誰一人として許さない！ ここから出ていけ！！』

「ううう……」

そう怒鳴り、霊夢を押さえ付ける力を強めるフランケンシュタイン。あまりに強力な怪力に、霊夢の意識が飛びそうになる。

『答えられぬなら、ここで殺すまで！』

霊夢の命運がここで尽きると思われた。

しかし、運命は彼女に味方した。

「豪拳『ツインロケットナックル』！！」

『ウガッ！？』

ゴウツという音と共に二つの拳が飛来、フランケンシュタインの横つ面にヒットする。予想外の攻撃にフランケンシュタインは霊夢を離し、地面に倒れる。拘束から解放された霊夢は妖夢に助け出され、気絶していた早苗達は鈴仙が持っていた永琳特製特效薬で回復した。先程フランケンシュタインを攻撃したのはアルバートの両腕であり、両腕を装着したアルバートは倒れているフランケンシュタインを一瞥する。

「この廃墟の中にこの様な怪物が潜んでいたとは……」

『…又ガ……』

頭を振り、衝撃から回復したフランケンシュタインは立ち上がり、アルバートを見るや否や咆哮と共に拳を振り下ろす。

『貴様……さつきはよくも!』

「!?!」

迫り来る拳に対して、アルバートは腕を×字に組んで受け止める。外見に違わず普通の機兵よりかは頑丈なアルバートのボディは、フランケンシュタインの怪力を受け止めて、床が少々破壊した程度で済む。その頑丈さにフランケンシュタインは目を見開き、アルバートに問い詰めた。

『貴様、一体何者だ!? さつき引き裂いた奴といい、ただの人間では無いな!?!』

「私の名前はアルバート。人間では無くロボットだ」

『『ろぼつと』? 何だそれは!?!』

「鋼の身体を持つ、人工的な生命だ!」

『人工的な生命だと!?!』

ロボットを知らないのかフランケンシュタインは首を傾げる。無理も無い。彼が誕生したのは、まだロボットという単語が広まっていない時代なのだから……。

そこでアルバートはロボットの事を簡潔に説明すると、フランケンシュタインの表情が驚愕に染まる。

「妖夢！ 鈴仙！」

「はい！ 『待宵反射衛星斬』！！」

「『幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）』！！」

『ウオオオオ！？』

アルバートの合図に妖夢は斬撃、鈴仙は眼から赤い光線のようなものを発射する。鏡の様な妖夢の斬撃に、鈴仙の幻朧月睨が乱反射してフランケンシュタインに襲い掛かる。本能的に赤い光を直視するのは危険と判断したフランケンシュタインは両腕で顔を庇うが、それによりアルバートに隙を見せる形になった。

「鉄拳『スパイラルブレイク』！！」

『うごおお！？』

アルバートの右手がドリルの様に回転し、フランケンシュタインの鳩尾に突き刺さる。幾ら頑丈な怪物といえど、生身であるかぎり急所への攻撃には弱い。アルバートの鉄拳に吹き飛び、壁を打ち破って倒れるフランケンシュタイン。

『う……ぐううう………舐めるなあああ！！！！』

苦痛に顔を歪め、尚も立ち上がるフランケンシュタイン。全身から電撃を放ち、妖夢達を牽制する。

『うおらああああ！！！！』

「な!?! うおおああ!?!」

更にその巨体からは想像できない速さでアルバートに近付き、殴り飛ばす。アルバートは咄嗟に受け身を取ったが、ダメージが大きかったらしく、全身から火花が飛び散り、片膝を着いてしまっている。

「止めだ!」

フランケンシュタインはアルバートに向かって一歩踏み出すと、口を大きく開く。ヴウウウウンと何かをチャージする音と共に、口内が眩く発光する。

「死ね!」

「!?!」

身の危険を感じ、ダメージの残る身体に鞭打ち、回避するアルバート。その瞬間、フランケンシュタインの口から弾丸の様なものが発射され、アルバートのすぐ横の床に直撃する。

「……………」

しかもよく見るとこの弾丸、ネジである。

ちなみに、この世には電磁誘導で物体を加速させて射出させる兵器電磁投射砲というものがある。フランケンシュタインが放ったのはそれに似ている。もし直撃すれば、如何に頑丈なアルバートの装甲といえど、ただでは済まないだろう。

「次は外さん!」

「!?!」

二発目を発射しようと、ネジを口の中に含みチャージを開始する。動こうにも、先程ダメージが残っていた身体で無理矢理回避した為、身体が言う事を聞かない。

「アルバートさん!」

「止めて!」

それを阻止するべく、妖夢と鈴仙がフランケンシュタインを止めようとするが、所詮は少女、怪物の力には敵わない。フランケンシュタインの怪力により、呆気なく振り払われてしまう。

『今度こそ、死ね!』

「くっ!」

アルバートは死を覚悟し、両腕で防御体勢をとる。フランケンシュタインの口内が光り、ネジの弾丸がアルバートに向かって発射された。

「夢符『二重結界』!」

しかし突如としてアルバートの周りに二重に張られた結界が、電磁投射砲の攻撃からアルバートを守る。

「!?!」

フランケンシュタインが驚いて横に振り向くと、そこにはスペルカードを掲げた霊夢の姿があった。怒りを露わにして拳を振りかざすフランケンシュタイン。

「嘆符『哀しみの葬儀場』!?!」

間髪入れずに何者かによるスペルカード宣言がされ、大食堂に悲鳴に近い大音量の泣き声が響き渡る。この騒音に霊夢達やフランケンシュタインは耳を塞ぐ。

声の発生源を見ると、眼から涙を流して大泣きするフェイの姿があった。フランケンシュタインが苦しんでいる隙に、霊夢達は耳を塞ぎながら負傷者を連れて避難する。

全員が避難し終わり、扉が閉められるとフェイは未だに啜り泣きするが徐々に泣き止んで来ている。

「霊夢、礼を言う。君のおかげで助かった」

「別に。ただ、私を助けてくれた白馬の騎士にあまり貸しを作りたいくなかっただけよ」

苦笑しながら、照れ気味にツンデレる霊夢。その態度にアルバートも苦笑する。

「……しかし噂以上ですね、バンシーの泣き声は……」

「……泣き虫じゃ……ないもん」

妖夢はフェイを見ながら改めてバンシーの泣き声の威力に恐れを成したが、それを悪口と解釈したのか啜り泣きながら強がるフェイ。ちなみに彼女の本気の泣き声は先程の様にはいかない。彼女が本気になれば、刃が本気でビビリ、レミアが一発でカリスマブレイクしてしまう。

何気に隠れた強豪妖怪なのでは無いだろうか？

この後、妖夢とアルバートは霊夢達にフェイの紹介をし、霊夢はアルバートに行方不明になった機兵の末路を伝えた。予想していたとはいえ、部下の死にアルバートは胸を痛めた。

と同時に、ある疑問が浮かぶ。フランケンシュタインはロボットの事を知らなかった。夢境界にロボットが製作されてから数十年以上が経っている。ロボットがない幻想郷でも、外の世界の情報からロボットという単語が広まっている。それ故にロボットという単語を知らない彼に、霊夢達は不審に思った。

バキヤッ

『噂をすれば影がさす』という言葉がある。扉を突き破り、フランケンシュタインが追いついてきた。

「あややや！ しつこい方ですね」

『言った筈だ。オレの縄張りを侵した者は誰一人として許さない、とな』

撮影しながら悪態吐く文に、フランケンシュタインは肩を掃いながら答える。

「えつと名前は？」

『何？』

「名前は何とおっしゃるんですか？ 貴方にも名前というものがあ
るはずですよ」

文のこの質問は、霊夢達の完全回復が終わるまでの時間稼ぎの筈だ
った。

答えても答えなくても、次々質問攻めすれば注意を引き付けられる
筈だろうからである。

しかしフランケンシュタインの答えは、そのどちらでもなか
った。

『名前………そんなものは無い』

「え？」

『オレは怪物。あつてはならない命。』

オレはこの世に生を受けてから、『化け物』と罵られて迫害を受

けていた。そんなオレに名前など無い』

「待って！ あんたの名前って『フランケンシュタイン』じゃ……」
霊夢は信じられない様子で声を荒げる。

『違う！ フランケンシュタインはオレを造った男の名だ。
ヴィクター・フランケンシュタイン……オレという化け物を生み出した、愚かな男だ……』

こうして、フランケンシュタイン、否、名も無き怪物は自分の過去を語りはじめた。

ヴィクター・フランケンシュタインは生命の謎を解き明かすべく、人間の死体を組み合わせて筋力・体力・知能全てが完璧な人工的な生命を生み出そうとした。神をも恐れぬ彼の狂った研究の末に生み出されたのは、彼の理想通りの能力を持つが、言語能力に乏しく容姿がかなり醜い怪物であった。

しかもあまりの醜さに、ヴィクターはあろう事か怪物に名前を付けなかった。そして怪物はその容姿の醜さから人々から恐れられ、何もしていないのにも関わらず患者扱いされていた。

怪物は常に孤独だった。誰かと仲良くなりたかったが、容姿のせいで誰も怪物に近付かなかった。

そんな中、怪物はある家族を発見する。盲目の老人とそれを介護する青年の家族。怪物はその家族のやり取りを、家の外から盗み見て言葉を学んだ。それにより、怪物は普通の人間の様に喋れる様になった。

暫くして、怪物は青年が外出したのを見計らって老人との接触を試みた。盲目である老人は、自分に話しかけてくる男が怪物と知らず、優しく接した。初めて友好的に接してくれる老人の為に、怪物はこの家族の手伝いをしようと思った。

しかし、その幸せは脆くも崩れ去った。帰宅した青年が怪物の姿を見るや、これまで老人を介護した時とは一変、罵声と共に怪物を家から追い出してしまった。

改めて、自分の容姿のせいで人間に嫌われる事を痛感した怪物はヴィクターの下に訪れ、生涯自分の伴侶となる自分と同じ人造人間の女を造るよう頼み込んだ。そうすれば、自分はそれと共に人目につかない所で密かに暮らす事を約束すると申し出た。ヴィクターもそれを承諾し、早速2体目の製作に取り掛かった。

人間に迷惑かけず、尚且つ仲間がいれば自分は孤独の身ではなくなる。怪物は、2体目の完成を心待ちにしていた。

しかし、いくら待ってもヴィクターからの連絡が来ない。不審に思った怪物は、後にヴィクターが自分を裏切って2体目の製作を中止してしまっていたのだった。怒った怪物は、ヴィクターの恋人や友人達を殺して姿をくらます。約束を破ったにも関わらず、ヴィクターは友人達の仇を取るべく怪物の後を追う。

しかし、体力の限界が近付いたヴィクターは、北極海で息絶えてしまふ。息絶える寸前、自分を保護してくれた北極探検隊に怪物を倒す様に頼み込んだヴィクター。その遺体を見つけた怪物は、憎むべき相手が死んだ事に虚しさを感じた。

『安心しろフランケンシュタイン。貴様が生み出したオレという怪物は、もうこの世には残らん』

怪物は、北極点で自らを焼いて死ぬ事で全てを終わらせる為、北極探検隊の目の前で北極海へと姿を消した。

その後、誰も怪物の姿を見た者はいなかった……。怪物は自らを焼き殺して、この世から消えた。その筈だった……。

『しかし、目が覚めたらオレはこの屋敷の地下にいた。最初は地獄かと思つたが、すぐにオレがまだ生きている事に気付いた。

神の御加護か悪魔の所業か知らないが、生きているのならオレはこの屋敷で第2の人生を歩む。誰にも邪魔されず、静かに平和に暮

らしたかった。

だが、興味半分でこの屋敷にやって来た人間達はオレを見て悲鳴を上げ、今朝にはオレを殺そうと『ろぼつと』等という殺し屋を送り出してきた！』

怒りに顔を歪ませるフランケンシュタインの怪物。クリーチャー以後、本文では彼の事をクリーチャーと呼ぶ。

そのクリーチャーの話聞き、霊夢の頭の中にある事が過ぎった。

幻想入り。

外の世界の人間が、突如として幻想郷に迷い込む事がある。外の世界では、人が突如として消える現象を神隠しと呼んでいる。大概の人間は、妖怪に襲われて死んでしまう事が多い。生きて外の世界に出れるのは、運よく博麗神社や人間の里に辿り着けた者だけである。

もしかすると、この怪物も同じ様に幻想入り、否、夢幻入りしたのではないのか？ だとしたら、交渉次第では穏便に済むのではないか？ そう思った霊夢は、クリーチャーに話しかけた。

「貴方の過去は分かったわ。手荒な真似して悪かったけど、もし貴方が人間達に危害を加えないなら、誰もここに近付けさせないと約束するわ」

いいわよね？ とアルバートに確認する霊夢。それに対し、アルバートは頷く。

話を聞く限り、クリーチャーは普通の生活を望んでいる。悪意の無いが強力な力を持つクリーチャーと、これ以上戦うのは体力の無駄になる。この屋敷は廃棄されて使われていない為、勝手に使われて

も何も問題は無い。平穩を望むクリーチャーならば、この条件を呑む筈。

しかし、

『断る!』

「「!?!」」

クリーチャーは靈夢の提案を拒み、拳を振り下ろす。靈夢達は散りに回避し、戦闘体勢に入る。

『誕生した時から人間達はオレを蔑み、生みの親であるフランケンシュタインでさえオレを裏切った』

全身に電撃を走らせ、クリーチャーの筋肉が更に盛り上がる。

『人間等、信用できない!』

腕に電気を集中させ、電撃を発射しようとするクリーチャー。

「いい加減にしてよ!」

そんなクリーチャーにフェイは怒りを表し、弾幕を放つ。目には涙が溜まっている。

「怒りのままに暴れたって、何も生まれる訳ないじゃない!」

『黙れ！ この廃墟に来た人間は皆殺しにする。誰も生きては帰さない！』

「うう……」

怒りに支配されて聞く耳を持たないクリーチャーに、フェイはまた泣きそうになっていた。

ブウウウウン

「……イジメ……よくない……」

『ううおお！！？』

しかし、壁を突き破ってデュラ娘がポルシェ935ターボに乗って現れ、クリーチャーを轢き倒す。

え？ 室内で車はおかしいって？

幻想郷と夢幻界に、そんな常識は通じませんが、旦那。

「デュラ娘!？」

「……」

まさかの人物が手助けしてくれた事に、フェイは驚く。デュラ娘は車から降り、無言でフェイの下に近づく。

「……やっぱり…フェイちゃんは泣き虫だ……」

「な!?!」

こんな状況に関わらずまだ減らず口を叩くのか、とフェイはキレかける。

「……でも…強くなった……。霊夢達を…守った……」

「え」

しかし、微笑みかけてフェイを褒めるデュラ娘。まさかの展開に頬を染めるフェイ。

『貴様ら……よくも……』

轢かれていたクリーチャーが立ち上がり、デュラ娘とフェイに標的に定める。デュラ娘とフェイは隣り合い、クリーチャーに向かって戦闘体勢に入る。

「……久しぶりね……コンビを組むの……」

「そうね。行くわよデュラ娘」

「……うん」

互いに笑い合って、クリーチャーに立ち向かう二人。助太刀しようとする早苗を、霊夢が手で制する。

「霊夢さん!？」

「今のあの二人なら、あの怪物に勝てるわ」

「でも、私達が一斉にかかっても勝てなかったんですよ？ 何故そんな事が言えるのですか？」

批難する早苗に、霊夢は真剣な表情で一言言い放つ。

「勘よ」

あっさりとそう言う霊夢に早苗は途方に暮れるが、早苗以外は二人の勝利を信じているのか動かない。

彼女達に見守られ、デュラ娘とフェイはクリーチャーに戦いを挑む。

「く！ フェイさんのパンチラを、何とかして納めなければ……」

……訂正、空気を読まない烏天狗が一羽いた。

第十八話 人造人間『名前無き哀しみの怪物』（後書き）

激突、デュラ娘&フェイVSクリーチャー。

二人は、クリーチャーを憎しみから解放できるのか？

次回、東方双界伝 ｝ Another Fantastic World .

『フランケンシュタインの怪物』

白米「よく人造人間をフランケンシュタインと呼ぶ人がいるけど、それは間違いなんですよ。」

前半では逢えてフランケンシュタインと呼ばせましたけど」（汗）

魔理沙「てかクリーチャーって奴、私達を持つフランケンシュタインの怪物のイメージと違うな」

白米「怪物くんに出てくるフランケンのように、フランケンシュタインの怪物は怪力だけの脳筋なモンスターと思われがちです。しかし、原作では完璧超人を目指して作られていますから、頭もいいし、最初は喋れなかったけど人間達の会話から言葉を学んで喋れるようになりましたし」

魔理沙「すげえなオイ」

白米「他にも原作では、フランケンシュタインは博士ではなく学生という設定もあります」

魔理沙「へー」。

てか、話を聞く限り、これってヴィクターの自業自得じゃね？」

白米「自分の事を棚に上げるのが、人間の悪いところですからね……」

パチュリー「という訳で、盗んだ本を全て返しなさい」

魔理沙「う……」(汗)

アリス「では、引き続き感想・質問を受け付けるわね。

魔理沙、観念して返してやりなさい」

魔理沙「急用を思い出したぜ！」(逃)

パチュリー「逃がすか！」(追)

白米「それでは、次回もお楽しみに」(汗)

第十九話 『フランケンシュタインの怪物』（前書き）

や〜〜と、完成しました。フランケンシュタインの怪物編、完結です。

ソドー鉄道員さん、今回出たデュラ娘のスペルカードはどうでしょうか。

一応補足として、デュラ娘はスペルカードの札を間違えて食べてしまいました。なので彼女のスペルカード宣言は、挙手して相手にこれからスペルカードを使う事を必ず知らせて、発動するという形です。

それでは、本編スタートです。

第十九話 『フランケンシュタインの怪物』

廃墟にて、デュラ娘とフェイがフランケンシュタイン改め、クリーチャーと激突した。霊夢達は二人が戦い易くする為に他の部屋に避難していた。

『ウオオオオ!!』

クリーチャーは両腕に電撃を溜めると、それを床に叩き込む。電撃が床を伝い、デュラ娘とフェイに襲い掛かる。しかし、二人はそれをジャンプで回避し、クリーチャーに向かって飛び蹴りをお見舞いする。

「『ダブルフェアリーキック』!!』」

息の合った二人の蹴りが頭に当たり、クリーチャーの巨体が後ろに倒れようと

『ぬううん!!』

しかし、クリーチャーは片足で床を踏み締めて踏ん張る事で倒れる事を防ぎ、逆に二人を跳ね飛ばす。フェイは受け身を取る事で体勢を立て直したが、デュラ娘は自分の首が外れないように押さえていた為、受け身が取れずに床に激突する。

「……かはっ……!?!」

「ちょっと、何してるのよ!?!」

振り下ろされようとしていた拳から救う為、デュラ娘を横抱きに回避しながら、フェイはデュラ娘を批難する。それに対し、デュラ娘は膨れっ面でボソリと呟く。

「…………頭が取れそうだったから……………」

その答えにムカついたのでか少々乱暴にデュラ娘を下ろすと、フェイはクリーチャーに向かってハイキックを繰り出す。

「はっ!!」

『又ガ』

「きゃあ!?!」

しかし、左腕でガードされて振り払われてしまう。クリーチャーは右足を振り上げ、フェイを踏み付けようとする。

『鬱陶しい八エが!』

「うわっ!?!」

フェイは横転して踏み付けを回避するが、クリーチャーはしつこく踏み付けて来る。クリーチャーが踏み付ける度に、床に火花が弾けて電流が走る。

「あ、しまった!?!」

『もらった!』

しかも横転し続け、フェイは壁際に追い詰められていた。クリーチャーがこれを見逃すはずもなく、足を振り上げて踵落しの構えを取る。

『Auf Wiedersehen……』

「盲目『目潰しの鞭』！！」

パシィッ

『ウガッ！？』

クリーチャーの足が振り下ろされそうとした時、デュラ娘がどこから取り出した鞭をクリーチャーの顔面目掛けて振るう。鞭は振り向いたクリーチャーの眼に当たり、それに怯んだクリーチャーは床を突き破りながら地下へ落ちていった。

「あ、ありがとう」

「……」

頬を染めながら礼を言うフェイ。デュラ娘は照れ臭そうに頬を掻く。

二人の距離が少し縮まった所で、クリーチャーが落ちていった穴を

覗き込むデュラ娘とフェイ。そこには全身に火花を散らしながらゆつくりと起き上がって来るクリーチャーの姿があった。充血した眼をキラキラと光らせ、上にいる二人を睨みつける。

「血符『スプラッシュユブラッド』」

バシヤッ

『……………』

「……………」

何を思ったのか、どこからかタライ一杯の血……に見せかけたトマトジュースをクリーチャーに浴びせかける。何故か無言で見つめ合うデュラ娘とクリーチャー。

「って、何やってんの!？」

スパアんと、小気味よい音を立ててつつこむフェイ。それにより頭が落ちそうになるが、何とか穴に落ちないように受け止めるデュラ娘。

「…何となく……………」

「何となくでトマトジュースをかけるんじゃないわよ!！」

トトオッ

口喧嘩した二人だが、下からの衝撃を感じて下を見下ろす。

『貴様ら……!!!!』

そこには、床を突き破ってフェイの左足を掴むクリーチャーの姿があった。しかもこの体勢、偶然にもフェイのスカートの中が見える様になっている。クリーチャーには、疚しい気持ちを持っていないが……。

「っ!? イヤアアアアアアア!?!?!?!」

『うぐおわあぁっ!!?!?』

羞恥で顔を真っ赤にし、スカートを押さえるフェイ。フェイは足を掴む手を振り放し、クリーチャーの顔面に蹴り飛ばす。倒れたクリーチャーに対し、フェイは急降下キックをかまし、そのままストーンピングに移行する。

『おい、待て、何を、ぐはっ!?!?』

抗議しようとするクリーチャーだが、赤面したまま問答無用で蹴り続けるフェイ。その様子を少し呆れ気味に見守るデュラ娘だった。

『調子に乗るなあぁあ!?!?』

「きゃあああああ!?!?」

しかし、クリーチャーは全身から電気を放電する事でフェイを跳ね飛ばし、起き上がると左手でフェイを鷲掴みにする。

「ちよ、何を……いやあああ！！？」

そして、何故か近くにあった鎖を持つと、それを使ってフェイを縛り上げる。

……どのような縛り方をしたかは、皆さんのご想像にお任せします。

『今までの戦い方から、お前は素手を用いた格闘技が得意の様だな』

「う……何よ、こんなもの……んむう！！？」

『お前の泣き声・悲鳴ももう懲り懲りだ。暫く大人しくしてもらおうぞ』

更にこれまた何故か地下にあったガムテープで口を塞ぎ、バンシーの得意技である悲鳴を使えなくしてしまう。

「……フェイちゃん！！」

『むん！！』

ビィィッ ガラッ

「……あ」

捕まったフェイを助けようとしたデュラ娘だったが、クリーチャーの眼から発射された光線で足場が崩れて落ちてしまう。その際、デュラ娘の首が取れ地面に転がる。

『……お前、人間ではないな。何者だ？』

「むーむー!!」

身体を動かして首を拾ってくっつけるデュラに、クリーチャーは問い掛けた。クリーチャーの足元には、フェイが鎖を外そうともがいていた。

「……私は、デュラ娘。デュラハンの見習いよ……」

『デュラハン？ 何故妖精が人間に味方する』

「……フェイちゃんは、人間じゃない……バンシーよ……」

デュラ娘の説明にフェイも頷いて肯定する。

「……人間は、れーむと……よーむと……さなえだけ……。後は、みんな妖怪……」

『……』

デュラ娘の説明にクリーチャーは少し驚いた。実はクリーチャーはアルバート以外は全員人間だと勘違いしていたのだ。

ちなみに補足すると、妖魔は人間と幽霊のハーフである。しかし、半分人間なので人間枠に入れても多分問題ないだろう。

「……夢幻界と幻想郷は……人間と妖怪が仲良しになっているの。だから、フランケンも……人間を怖がる必要なんて、ないよ……」

『そんな都合のいい事があるか!! そして、オレはフランケンと

「いう名前ではない!!」

「グウウウウン……」

クリーチャーが口を開くと、口の中に電気が集まっていた。アルバートをして回避せずにはいられなかった電磁投射砲が発射されようとしていた。

「!?!」

デュラ娘は回避しようとするが、クリーチャーが投げつけた鎖が身体に巻き付き、身動きが取れない。鎖を外そうともがくが、最悪にも首が落ちてしまった。クリーチャーはこれを見逃さず、照準をデュラ娘の首に向けた。

「人間と怪物は決して相容れない。絶対に!!」

そして電磁投射砲が発射され

「究極! 美鈴キック!!」

『うばお!!?!』

突如、美鈴が某幽霊の名前を持つロボットよろしくの飛び蹴りをクリチャーにかまし、電磁投射砲は明後日の方向に向かって暴発した。

「……ちゅーくー!?!」

「いや、美鈴です。紅・美・鈴！ というか最近、中国ネタがあまり使われなくなった気がするのは、私の気のせいでしょうか？」

寧ろ、『門番』って呼び名が定着してる気がする今日この頃。まあ、私の知る限りではの話だが……。

余談だが、はちくまの二次創作ゲーム『東方冥異伝』では、何故か『中国』が本名みたいな扱いである。門番エ……。

ちなみに、この小説では美鈴はあまり『中国』とは呼ばれない。酷い時は、精々『門番』と呼ばれるくらいである。

「デュラ娘、大丈夫？」

「よーむ……」

「すみませんデュラ娘さん。心配でしたので、つい手助けしてしまいました」

更に後から駆け付けた妖夢が、デュラ娘を拘束している鎖を楼観剣で叩き斬り、デュラ娘を解放する。そして美鈴がデュラ娘に近寄り、横槍入れた事を詫げる。

「……大丈夫……それより、早くフエイちゃんを……」

「心配ありません。頼れる助っ人が来ましたから」

「え？」

デユラ娘が首を傾げた瞬間、掛け声と共に天井の一部が落ち、クリーチャーの頭上に直撃する。

「畏符『吊り天井』!!」

『うがああ!?!』

天井はクリーチャーの頭に当たると碎け、クリーチャーはあまりの衝撃にゆっくりと倒れていく。その間に、鎧を着た少年がフェイを横抱きに助け出す。ガムテープが剥がされ、フェイは自分を助けた少年の名を口にする。

「ま、真壁君!?!」

「大丈夫、フェイ?」

「う、うん／＼」

少年、真壁剛に笑顔で尋ねられ、赤面して頷くフェイ。

「な、何で真壁君がここに?」

「アルバートさんから救援要請を受けたグリムさんに叩き起こされてね……助けに来たんだ。」

妖夢さん、こちらもお願ひします!」

フェイの質問に苦笑しながら答える真壁。心なしか、目の下に隈がある様に見える……。真壁に呼び出され、妖夢はフェイを拘束している鎖も叩き斬る。デユラ娘は真壁を指差し、妖夢に訊く。

「…よーむ…助っ人って、このヘタレの事？」

「誰がヘタレか!！」

聞き捨てならないと真壁はデュラ娘にいきり立つ。

「／／／」

先程から、真壁にお姫様抱っこされてるフェイ。幸いにも真壁の視点からは見えないが、ミニスカートのせいで他の人達からは丸見えである。

しかし、フェイは恍惚とした表情で真壁の横顔を見つめており、気付いていない。

え、何が丸見えかって？

某タカ・トラ・バッタのヒーローが貴重しているある下着ですよ、言わせんな恥ずかしい。

「ん？ どうしたの、フェイ？」

「私、幸せ過ぎて死んじゃいそう…／／／」

「え？」

視線に気が付き、フェイの方を見る真壁。フェイは今にも昇天しそうな表情で呟き、真壁はその呟きの意味が分からず首を傾げる。

勘のいい読者諸君達は気付いたであろう。そう、フェイは真壁の事が好きなのだ。ただし、当の真壁はその事を知らない……。

「……(羨ましい……)」「」

その手の話とは縁が無い少女3人は羨望の眼差しを2人に向ける。

「え？ ええ？」

視線の意味が理解出来ず、冷や汗を流して狼狽える真壁。ギャルゲイの様な状況である。

「まったく……様子を見に来たら、こんな事になってるなんてね……」

「相変わらずの仲だな、二人共」

「ぬりかべとバンシーの恋ですか……アリですかね？」

「ドキドキ……／＼／」

「ははは……」

そして、後からやって来た者達は、十人十色な反応を見せる。

呆れ気味にため息を吐く霊夢。保護者の様に温かく見守るアルバート。首を傾げながらも、ちゃっかり写真を撮っている文。顔を真っ赤にして両手で目隠しするも、興味はあるのか指の隙間からチラチラと見ている早苗。苦笑するしかない鈴仙。

「え？ え、何が？」

「あ」

霊夢達の反応がやっぱり理解できないのか、真壁は首を傾げる。とりあえず真壁はフェイを床に下ろすが、この時フェイが少し残念そうな顔をしたのは余談である。

「たまには、ヘタレの癖にいい所を見せたな。ヘタレの癖に」

「『ヘタレの癖に』って2回言わないでよ、刃。僕だって頑張ったんだぞ？」

「その点に関しては十分評価出来るな。よくやったな」

「う……いや、改めて褒められると照れ臭いな……／＼／」

「……」

「痛い痛い痛い！？ フェイ、何をするんだよ！？」

「……真壁君の馬鹿」

「僕が何をしたって言うんだ！？」

「……（気付けよ……）……」

真壁が刃に褒められて嬉しがっているのに腹が立ち、真壁の頬を抓るフェイ。真壁は抗議するが、フェイは膨れっ面でそっぽを向いて

しまう。

そんなフェイに頭を抱える真壁に、霊夢達は心の中でつつこむ。

「刃さんも大変ですね。こんな事に巻き込まれてしまって……」

「ああ。しかも何故かフェイから毎回睨まれるから、まいったものだ……」

「え？」

刃に同情する文だが、彼女の台詞に違和感を覚えて訊いてみる。

「え？ 『何故か』 って……フェイさんから恨まれる理由が分からないんですか？」

「うむ」

「……もしかして、真壁さんがフェイさんに抓られた理由も？」

「皆目」

「……」

文は絶句した。刃も案外恋愛には鈍感であるらしい。何なのだろうか、この三角関係……。

「それはそうと、フランケンシュタインの怪物さんは？」

「「「あ」「」」

鈴仙に指摘され、霊夢達は漸くクリーチャーの事を思い出す。振り返ってみれば、クリーチャーは横になつて寝そべり、律儀に待っていた。霊夢達がこちらを振り返つたのを話が終わったと解釈し、立ち上がったクリーチャーは霊夢達に問いかける。

『何故だ……何故貴様らは助け合う……？』

人外が人間を、人間が人外を助ける等、オレがいた時代では考えられない事だ……』

「確かに、昔の人間達は貴方に理不尽な仕打ちをして来たかもしれない……。だけど、今は違う。最初は驚いたかもしれないけど、この世界の人は、きっと貴方の事を受け入れてくれるわよ」

『……………』

フェイの力説にクリーチャーは目を閉じて少し考え込み、口を開く。

『1対1……………』

「え？」

『誰か1人、オレと戦ってオレをノックダウンさせたら、もう一度人間の事を信用しよう……』

この台詞に、フェイの表情が明るくなる。それと同時に、真壁が前に出る。

「じゃあ、僕が相手だ」

「真壁君？」

「折角、フェイが作ってくれた機会だもん。助っ人として、それに答えないとね」

「……………。もう……………／／／」

真壁の台詞にフェイはポカンとするが、やがて頬を染めて少しはにかむ。

「……………（こつこつ）カッコイイ所があるから、私は真壁君の事が……………／／／」

真壁の事を信じて、フェイは後ろに下がる。霊夢達も空気を讀んで待機する。

『……………お前達みたいな奴らに早く出会っていれば……………いや、何でもない。』

行くぞ！』

3日後　メタルガーディアンズ本部

食堂で遅めの朝食を取っていた霊夢の下に、アルバートがやって来る。

「あら、やっと修理が終わったの？」

「ああ、幸い破損箇所が少なかった。しかし、グリム整備士が『もつと入念に修理しないと』と泣いて解放してくれなくてな」

「大袈裟ね、死ぬ訳でもないのに……。それに、この世界に新しい住民が出来たからよかったじゃない」

あの後、真壁はスペルカードを駆使してクリーチャーをノックダウンする事に成功。廃墟はクリーチャーの所有物になり、先日廃墟に忍び込んだ若者達はアルバートから不法侵入の罰として拳骨を喰らい、反省する事になったとか。

ちなみに、バラバラになった機兵は奇跡的にAIが無事だった為、新しい身体を与えられ、事なきを得た。

そして異変解決の翌日、文が今回の異変の事を『文々。新聞　出張版』に書いてミッドガルド中にバラ撒いた為、人々にクリーチャーの事が知れ渡ってしまう。しかし、文は珍しくクリーチャーに配慮して彼の過去を公開。クリーチャーの過去を知った人々は、廃墟に食料や家具、生活必需品を次々に届けた。悪意は無いが流石に多す

ぎる為、妖夢と早苗、鈴仙が人々をなだめ、霊夢は弾幕で文を懲らしめる事で鎮めた。

ともかく、クリーチャーは晴れて夢幻界の住民として向かい入れられ、彼の悲願であった平穩を手にする事ができたのであった。

「そういえば、あいつの名前どうするのよ。流石に何時までも名無しじゃダメでしょう」

確かに、未だにクリーチャーに名前が無い。地の文の呼び名であるクリーチャーは『生き物』という意味であり、彼にもちゃんとした名前が必要だろう。

「その事だが、彼は自分の事を『フランケンシュタイン』と呼んで欲しいとの事だ」

「？ 確かあいつ、その名で呼ばれるのを嫌ってたんじゃない？」

そう、自分が嫌っている人物と同じ名前で呼ばれるのは、誰でも嫌であろう。例えば、赤の他人にいきなり『ゴキブリ』と呼ばれる様なものである。

「まあ、確かに。しかし、あいつが言うには、フランケンシュタインへの最後の仕返しらしいぞ。清々した、と言いたそうな顔をしてたぞ」

「……よく分からないわね」

苦笑するアルバートに霊夢は何度目か分からないため息を吐く。

廃墟

ミッドガルドの人々から貰った花壇に水を与えるクリーチャー、更に改めフランケンシュタイン。

そんな彼の肩に小鳥が止まり、それを見たフランケンシュタインは穏やかな笑みを浮かべる。

夢幻界に来て、漸く彼に理想的な平穏が訪れた。

某所

「そうですね。これで彼も正式に夢幻界の住民ですね」

「そうだねえ」

どこかの暗室、黒いローブで身を隠した人物と魅魔が対話していた。

「あいつが夢幻界に馴染むか心配だったけど、何とかなったね。これであんたがフランケンシュタインを夢幻界に向かい入れた甲斐があった訳だ」

「はは、以後気をつけます……」

ロープの人物は魅魔の皮肉に冷や汗を流し、苦笑する。しかし、すぐさま真面目な雰囲気に変わる。

「『約束の時』が近付いています。急がねばなりませんね」

「そうだね。だけど、そうは言ってもらえない状況が起きている事も事実」

「ええ。しかし、幻想郷でも紫が行動を開始しています。暫くは博麗の巫女達に頑張ってもらいましょう」

「ああ。」

それはそうと後数日で、紅蓮山で『アレ』が開始される頃だぞ？」

魅魔の報告に、ロープの人物は目を細める。

「もうそんな時期ですか……」

「参加者の中にあの兄弟がいるらしいね。確かあの兄弟の兄の方は、霊夢達に興味を持ってたはずだ」

「博麗の巫女は『アレ』に参加するでしょうか？」

「あいつの事だ、騒がしくなったら怒って自分から参加するだろう。少なくとも、烏天狗と鬼は興味を持つだろうな」

「なるほど……これは面白くなりそうですね」

「そうだね」

ニヤリと笑う二人。果して、紅蓮山で開催される『アレ』とは何なのか。

気になる所だが、舞台は再び幻想郷に移る……。

第十九話 『フランケンシュタインの怪物』（後書き）

魔理沙が次に狙うのは、ある花の種である。

それを採取する為、ある場所に訪れる魔理沙とパチュリーだが、運悪くとある妖怪に見つかってしまう。

次回、東方双界伝 } Another Fantastic World.

魔理沙の蒐集大作戦『第二弾：向日葵畑の逃走劇』

白米「正直、今回の出来は多分微妙です」

霊夢「ネガティブね……」

真壁「確かに、若干無理がありそうな展開がいくつかあったけど……」
（汗）

白米「精進します。リアルがかなり忙しくて、この後も更新が遅くなるかもしれませんが。ごめんなさい」

霊夢「『忙しい人のための双界伝』で、クリスマスと正月の話をするんでしょ？ 当日までに投稿出来るかしら？」

白米「さて、今回は原作キャラが次々登場します」

霊夢「サブタイトルで主に誰が出てくるか分かるわね……………魔理沙、大丈夫かしら？」

イー ツク「大丈夫だ、問題無い」

白米「神は言っている。元の世界に帰れ、と」

霊夢「……………」(汗)

白米「デュラ娘とフェイのスペルカードはまだあります。今後も彼女達の活躍があります」

真壁「では、引き続き感想・質問を受け付けます。次回もお楽しみに！」

第二十話 魔理沙の蒐集大作戦『第二弾：向日葵畑での逃走劇』（前書き）

第十九話を悩んでいた間にほとんど構成ができた為、早く更新できました（汗）

今年も後一ヶ月。早いな、オイ。

第二十話 魔理沙の蒐集大作戦『第二弾：向日葵畑での逃走劇』

幻想郷 魔法の森入口

ここには、外の世界から流れ着いたものを売る店があつた。香霖堂と呼ばれるその店の中で、魔理沙がメガネをかけた青い衣装の店主と交渉していた。

店主の名前は森近霖乃助。もりちかりんのすけ人間と妖怪のハーフであり、魔理沙とは彼女が生まれる前に霧雨家で修行していた事があり、幼い頃からの付き合いである。魔理沙が持つミニ八卦炉は、霖乃助が作成したものである。詳しい経緯については書籍『東方香霖堂』にて。

性格は商売人というより趣味人。博識だが個人的な見解があり、ZUN氏曰く、彼の知識のほとんどは妄想である。気に入ったものは非売品にして自分の所有物にする。

まあ、どっちにしろ、販売品でも客に購入されるまでは店側の所有物なのであながち間違つてはいない。だから画面の前にいる諸君、万引きは立派な泥棒だぞ？ やつたら、警察のお世話になつても文句は言えないからね？

霖乃助の能力は『道具の名前と用途が判る程度の能力』。道具の名前と用途は分かるが、使い方が分かる訳ではない極端な能力である。本人は何とかなるとは思っているが、実際の所、霖乃助がこの店にある全ての商品を完全に使いこなせるかどうかは、微妙である。

後、『霖乃助は禪姿になる変態』と勘違いしている人がいるが、それは二次創作であり、原作の霖乃助は少なくともまともである。よって、この小説の霖乃助は常識人ポジションであり、決して禪姿にはならない。

決して禪姿にはならない。

決して禪姿にはならない。

大事な事なので3回言いました。

それはともかく、魔理沙は膨れっ面になりながら霖乃助に抗議していた。ちなみに魔理沙と同行しているパチュリーは、店内の商品を見回している。

「だーからー、研究に使うからこのメモに書いてあるアイテムが必要なんだよ」

「今までのツケがいくらになっていると思ってる。今回はちゃんと払ってもらっぞ」

「えー。香霖のケチ」

「ケチで結構」

ぶうぶう言う魔理沙だが、今まで香霖堂に売ってある商品を金を払わないで持って行ってしまっただけ、ある意味自業自得である。まあ、香霖堂に売ってある商品のほとんどは拾い物だが……。

霖乃助はパソコンを操作しながら魔理沙の要求を頑なに拒否している。無論、このパソコンも拾い物である。ただし、使いこなしてい

る訳ではない。コンピュータの動かし方を探る為にやっているだけである。

余談だが、情報系の学校や会社では『コンピューター』や『ユーザ―』といった語尾を伸ばす単語は伸ばさずに発音される事が多い。例えば『コンピューター』は『コンピュータ』、『ユーザ―』は『ユーザ』、『プログラマー』は『プログラマ』となる。ただし、これは主に情報関係の単語に使われ、『カラー』を『カラ』と読む訳ではないので悪しからず。

なので、『コンピュータじゃなくてコンピューターだろうが!』等というツツコミには『社会的にはコンピュータでも合っております』と答えておこう。

話が逸れた。

尚もしつこく要求してくる魔理沙に、霖乃助はため息を吐いて魔理沙の方を向く。

「じゃあ物々交換としよう。これに書かれているアイテムに見合うものと交換してくれるなら、考えてもいいぞ」

「う……そう来たか」

「嫌なら交渉決裂だ」

「うぐう……」

魔理沙は悩んだ末に霖乃助の案に乗る事にした。研究の為、背に腹

はかえられない。

数時間後、魔理沙は大きな袋を担いで戻ってきた。中には夢幻界で手に入れたものもある。まず魔理沙が取り出したのは、野球ボール大の鉱石だった。

「これなんてどうだ？」

「ん？ この石はまさか……」

「ああ、ミスリルって言うらしいぜ。かなり貴重らしいし」

このミスリルの原石は、かのクイーンフングス戦でダイヤモンドが出した巨大なミスリルの塊から崩れたものである。どうやら、どさくさに紛れて拾っていたらしい。

「夢幻界にはミスリルがあるのか……」

「後、ひひいろかねとかも取れるらしいぜ」

「何だつて!？」

魔理沙の言葉に霖乃助は急に立ち上がる。その為、魔理沙とパチュリーは少し驚く。

魔理沙のいう『ひひいろかね』とは緋々色金の事であり、オリハルコンと同一視される決して錆びる事の無い稀少な金属である。

ちなみに、ミニ八卦炉には緋々色金が使われている。魔理沙にミニ

八卦炉の修復を頼まれた際、霖乃助は魔理沙からのリクエストで錆びない様に全体を緋々色金にしたのだ。

当時は、代わりに魔理沙が集めた鉄屑の山と交換する事で承諾したが、この鉄屑の中には、かの『草薙の剣』があった。草薙の剣は緋々色金で出来ている為、霖乃助も稀少な緋々色金を三二八卦炉の修復に使ったのだ。ただし、魔理沙は草薙の剣をただのボロい剣だと思ひ、全く気付いて無かったが。

「（そんな稀少な鉱石が取れる世界だったとは……。ほとぼりが冷めたら僕も行ってみようかな……）」

「すまない、と二人に謝りながらも霖乃助は頭の中でそう考えた。『文々。新聞』で夢幻界の事を知っていた霖乃助は、魔理沙の話聞いて夢幻界に興味を持ちはじめた。今は異変発生中なので、異変が終わった頃に行く予定だが。」

「まあいいけどな……次はこれだぜ」

次に魔理沙が取り出したのは、何かの植物が入った鉢植えだった。

「何だい、これは？」

「マンドレイク」

次の瞬間、霖乃助とパチュリーは耳を塞ぎながら鉢植えから離れる。

マンドレイクとは根っこの部分が人間の様な形をしている奇妙な植物であり、薬の材料として重宝される。人を襲う事は無いが、引っこ抜くと絶叫し、絶叫を聞いた生き物を死に致しめる。

このマンドレイクは魔理沙がマリアに頼んで無償で貰ったものである。

「わ、分かった。この二つで手を打とう」

「おお、そうか！ 助かるぜ香霖！」

これ以上凄いものを出されたら困ると、霖乃助は顔を引き攣りながら受け取る。そうとは知らない魔理沙は、これ以上自分のコレクションが減る事を防げてよかったと安堵する。

そんな二人を本を読みながら横目に見て、ため息を吐くパチュリーであった。

香霖堂を出た二人が次に向かったのは、『無名の丘』と呼ばれる所である。この小高い丘は妖怪の山から人間の里を挟んで反対方向にあり、鈴蘭が群生している土地である。

魔理沙がここに来たのは鈴蘭を採取する為である。無名の丘には強い妖怪は出ない為、無事採取出来るかと思われたが、そうはいかないようである。

「コンパロ コンパロ 毒よ集まれー」

「……」

黒い洋服と赤いリボンを身につけた大きな人形、メディスン・メラ
ンコリーが何故かクルクルと踊るように回転しながら辺り一面に毒
を撒き散らしていた。

「……パチュリー、頼む」

「……分かった」

パチュリーはスペルカードを取り出し、一応メディスンに聞こえる
よう大声で宣言する。

「火符『アグニシャイン』!!」

「キヤアアアアア!!」

パチュリーは、鈴蘭畑に当たらないように毒とメディスンだけを器
用に焼き払った。

一通り鈴蘭を採取し、メディスンが起きた所で何故毒を撒き散らし
ていたかを訊く魔理沙。涙目になりながらも答えるメディスン。

「うう。妖怪の山の厄神が回りながら厄を集めてたから、私も回
れば毒が集まって強力な猛毒ができるかなと……」

「いや、そんなつもりで厄を集めてる訳じゃないからな、雛は……」

呆れながらメディスンにつっこむ魔理沙。

妖怪の山の厄神、かぎやまひな鍵山雛は厄払いで払われた厄を集め、人間に厄が戻らないようにしているのだ。そういえば、雛は流し雛から神になったものらしい。人形繋がりで参考にしたのか……。

「魔理沙、こんなほつといて早く行きましょ」

「あー、そうだな。じゃあなメディスン、練習も程々になー」

「……というか、スーさんを返してよー」

無名の丘から飛び去る二人に、メディスンは涙目で手を伸ばす。ちなみに、『スーさん』とは鈴蘭の事である。

無名の丘を後にした魔理沙達はある方向に向かっていった。その方向にあるものを思い出し、急停止するパチュリー。そんなパチュリーに気づき、魔理沙は後ろを振り返って呼び掛ける。

「ん？ どうした、パチュリー？」

「魔理沙、あんたまさかあそこに行くつもりじゃないでしょうね？」

「あー？ この方向だと行き先はあそこしかないだろ？」

「……ごめん、帰るわ」

嫌な予感を感じてUターンしようとするパチュリーだが、魔理沙に捕まり無理矢理連れていかれる。

「何を今更。私の研究を手伝ってくれるんだろ？ 行こうぜ」

「……勘弁して。厄介事には巻き込まれたくないのよ！」

「よし、飛ばすぜー！！！」

「ちょ、ま、ムキユウワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！？」

幻想郷の空にパチュリーの悲鳴が広がり、たまたま通りかかったゴスロリ服を着た緑髪の少女、鍵山雛はボソリと呟いた。

「……………厄いわねえ……………」

妖怪の山の反対側、『太陽の畑』と呼ばれる場所がそこにあった。一面が向日葵で囲まれており、この向日葵は皆、花の部分が太陽の方を向いている。しかし、それはここに住み着く妖精達の仕業である。

魔理沙はここにある向日葵を摘みにやってきたのだ。ちなみに向日葵の種は、ハムスターやリスの餌になる他、絞る事でヒマワリ油として利用される。

しかし、パチユリーは浮かない顔で辺りを見渡し、何かを警戒している。そしてパチユリーは、研究に使えそうな向日葵を品定めしている魔理沙に声を掛ける。

「ねえ、魔理沙。まだ決まらないの？」

「あー、もうちょい待ってくれ」

「早くしなさいよ！　こんな所をあいつに見つかったら、ただでは済まないわよ!？」

「……よし、これにするか。たく、心配性だなパチユリーは……」

「あ」

「だったら、あいつに見つからなかったらいい話じゃないかって、あれ？」

向日葵の1つを摘み取ってドヤ顔で振り返る魔理沙だが、そこにパチユリーはおらず、パチユリーは遙か向こうで何かから逃げるように飛んでいた。

「おい、パチユリー？　何をそんなに……っ!？」

疑問に思っ呼び掛けようとする魔理沙だが、すぐに後ろから感じる殺気に気付く。

ギギツ…と壊れたブリキ人形の様にゆっくりと後ろを振り向く魔理沙。

そこには、赤と白のチェックの洋服を身に纏い、日傘をさしてニコ

ニコ微笑む緑髪の女性がそこにいた。一見無害そうだが、彼女の回りから発生する黒いオーラがそれを否定する。

彼女の名は風見幽香。能力は『花を操る程度の能力』。幻想郷の中でも強力な力を持つ妖怪であり、向日葵だけでなく四季折々の花を操る事ができる。故に彼女は植物を大切にしており、彼女の縄張りを侵した者を許さない。

当然、この太陽の畑は彼女の管轄。目の前には自分の縄張りに入り、大切な花の一本を摘み取った泥棒まじさ。魔理沙は滝のような汗を流し、幽香は尚も笑みを絶やさない。

「……すいませんでしたあああああああ!!!」

絶叫しながらパチュリーの後を追って逃げ去る魔理沙。幽香は笑顔のまま、魔理沙を追う。

「うふふふ。私の目を盗んで向日葵を盗もうなんて、いい度胸してるじゃない？」

「パチュリー！ アグニシャインで何とかしてくれー！」

「火に油を注ぐ気！？ 貴女が巻いた種だから、貴女が何とかしなさいよ！」

「薄情者ー！」

黒いオーラを強めながら、尚も笑顔で迫ってくる幽香、めちゃ怖い。向日葵を触手の様に操り、魔理沙とパチュリーを捕まえようとしている。先に逃げたパチュリーに追いついた魔理沙は彼女に縋り付く

が、パチユリーは拒否して魔理沙を引き離そうとしている。本の角で魔理沙の頭を叩いている。地味に痛い。というより、アグニシャインを使って向日葵に引火したら、それはそれで死亡フラグである。どこかの出番待ちの戦闘バカならいざ知らず。パチユリーの言い分が正しい。

「くそつ、これでも喰らいやがれ！」

遂にパチユリーから引き離されてしまった魔理沙は、幽香にミニ八卦炉を向けるとスペルカードを宣言する。

「『マスタースパーク』!!!」

だがしかし、幽香は日傘を開くと盾の様に構えてマスタースパークに立ち向かう。すると日傘は雨を防ぐかの様に弾幕を弾き、マスターパークは拡散して幽香の脇を通り抜けてしまった。

幽香の傘は、雨や日差し、弾幕まで弾き飛ばしてしまう優れものである。その事を今頃思い出し、顔を引き攣らせる。

「危ないわねえ。人がちゃんと話し合いをしようと思っているのに

……」

「嘘つけええええええ！？ 明らかにオーラが殺しにかかる雰囲気だぞ！？」

「あら？ 何のことかしら？」

尚も笑顔で迫って来る幽香に魔理沙はたじたじになっていた。気のせいか、幽香の後ろに黒い笑顔で『少し頭を冷やそうか？』と語りかけて来る白い魔王が見えてくる。

「安心しなさい魔理沙。骨は拾ってあげるわ」

「死ぬ前提！？　せめて負ける前提で言ってくれよ！！」

我関せずと本を読みながら発言するパチュリーに魔理沙はつつこむが、ここで幽香がとんでもない発言をする。

「大丈夫よ。その本を読んでいる紫色と一緒に、みっちり調教してあげるわ」

「ムキユ！？　何で私まで！？」

「私の大切な花が摘まれるのを、見殺しにしたからよ」

「一応止めようとしたんだけど！？　というか、それって、どこの生類憐れみの令よ！？」

ちなみに徳川綱吉が出したこの法令、蚊を叩き殺した男だけでなく、その横にいた男性まで『蚊を見殺しにした』という罪で罰せられたという逸話がある。

「という訳で、覚悟しなさい」

「「イヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！？？」」

ニコニコとした幽香の微笑みがニヤリとした邪悪な笑みに変わり、再び向日葵の触手が二人に襲い掛かってきた。

魔理沙はパチュリーを抱き抱えたまま、弾幕と触手をかい潜り、太陽の畑から脱出しようとしている。

何故パチュリーを抱き抱えているのか。それは、パチュリーがこんな時に限って持病の喘息が発生し、呪文がまともに唱えられなくなったからである。かの紅霧異変の時は喘息の為、本調子ではなかったらしい（Ex中ボスとして登場した時は、調子がよかつたらしい）。

とにかく、捕まったら半殺しにされるかR - 18以上の事をされそうなのがする為、逃げる魔理沙も必死である。

え？ 何で弾幕で反撃しないかだって？

単なるスタミナ切れである。ただし、飛ぶ力は残している。幽香に一撃当てても、逃げる体力が無ければすぐに捕まってしまうだろう。

「だから、太陽の畑は後回しにした方がよかったのに……………ケホッ、ケホッ！」

「今となつては後の祭だぜ……………」

まさに、後悔先に立たず。

しかも、遂に触手が魔理沙達を捉え、箒から叩き落としてしまう。

「ぎゃああああああ！！？」

触手は二人の体に巻き付くと、幽香の目の前まで持ち上げた。魔理沙はギャーギャー叫びながら暴れるが、パチュリーは諦めたのか抵抗せず成すがままにされている。しかもパチュリー、目がいんでいる。

「ぎゃあああ！！！！ ヤメロー、シニタクナイシニタクナイ！！！！」

「…魔理沙、諦めなさい。どうせ、どう足掻いても絶望しかないんだから……」

「諦めるなパチュリー！！！！！！ 希望を持ってえええええ！！！！」

チャキッ

「あ……」

涙目になりながら尚も目がく魔理沙だが、幽香に傘を突き立てられ、大人しくなる。幽香は先程と変わらない笑顔で、照準を魔理沙の胸部辺りにロックオンする。傘の先端に光が集まり、周囲の空気を震わせる。

ところで、噂では魔理沙のマスタースパークは、幽香の弾幕を参考に編み出したスペルカードらしい。そこで一部の者は、マスタースパークの元となった幽香の弾幕を、こう呼ぶようになったという

『元祖マスタースパーク』、と。

皆さん、考えてみてください。

身動きできないこの状況、至近距離で高威力なレーザーを撃たれたらどうなるのかを。

死にはしなくても、ただでは済まないだろう。

さて、ここで今の状況を纏めてみよう。

パチュリーは喘息で呪文が満足に唱えられない。魔理沙はまだ戦えそうだが、元祖マスタースパークに対抗できる弾幕を撃てるかどうか微妙であり、仮に撃てたとしても幽香から逃げられる確率が低い。しかも、二人共触手に捕まり身動きがあまり取れない。

では、この状況の中で幽香から逃げるにはどうするのか？ 次の選択肢を選びなさい。

？ ハンサムな魔理沙とパチュリーは、突如反撃の方法を思い付く。

？ ここで咲夜かアリスが助けに来る。

? 逃げられない。現実是非常である。

だが今の状況、どう考えても?が濃厚である。

「さあ、覚悟しなさい」

「嫌だああああ!!!」

魔力が溜まり、後は発射するのみ。ニヤリと邪悪な笑みを浮かべる幽香に、魔理沙は泣きながら手足をバタつかせる。

ゲシッ

「「「あ「「「」

ブオオオオン

ところがバタつかせた魔理沙の足が幽香の傘に当たり、マスターパークは真下に向かって発射される。

今魔理沙達がいるのは、太陽の畑の上空。

太陽の畑には、幽香が大切にしている向日葵がたくさんはえている。

元祖マスターパークは、傘が魔理沙の足に当たり、下に向かって

発射。

その結果

ドガアアアアン

「あああああああああ！！？」

元祖マスタースパークは向日葵畑に直撃。爆発と共に、向日葵の花びらが空を舞う。まさかの展開に幽香は悲鳴をあげる。

偶然とはいえ、大切な向日葵を自らの手で攻撃してしまった事で、幽香はガツクリと落ち込む。そして幽香の心境とシンクロして向日葵触手の拘束が緩み、魔理沙とパチュリーは地面に落ちる。

これ幸いと魔理沙はパチュリーを抱き抱えると、箒を拾って太陽の畑から大急ぎでエスケープする。

後日、太陽の畑を訪れた蛍の妖怪リグル・ナイトバグの証言によると、灰の様に真っ白になりながら花の種を植えて水をやる、無気力な表情を浮かべた幽香を目撃したとか……………。

「まったく、一時はどうなる事かと思っただわよ……」

「マジですまん……」

魔法の森 魔理沙宅

そこには、椅子に座ってそっぽ向いて本を読むパチュリーと、その目の前で土下座する魔理沙の姿があった。

「で、材料はこれで全部？」

「いや、実はまだ行かなければならない所が二カ所……」

「……もう、貴女一人で行きなさい」

もう巻き込まれてたまるか、とパチュリーは魔理沙宅で待機する事を決断する。身体が弱い身として、これ以上活発に動く羽目になるのは流石に避けたい。

「え、私の研究を手伝ってくれるんじゃないのかよ!」

「太陽の畑みたいな事になるのは、もう懲り懲りよ。その代わりに、これを持って行きなさい」

と言って、パチュリーは魔理沙にあるものを手渡す。それは、かつて地下から怨霊が湧き出た際に、魔理沙をサポートする為に使ったオプションであった。

「あー？ またこれかよ」

「手助けいららないなら別にいいけど?」

「ごめんなさい。ありがたく受け取らせていただきます!」

「素直でよろしい」

そんな二人のやりとりを尻目に、ビンの中にあるクイーンフングスの一部がまた怪しく蠢いていた……。

第二十話 魔理沙の蒐集大作戦『第二弾：向日葵畑での逃走劇』（後書き）

最後に魔理沙が向かったのは、天界 有頂天。

天界の桃を手に入れる為、魔理沙は不良天子と弾幕勝負をする。

次回、東方双界伝 ｝ Another Fantastic
World .

魔理沙の蒐集大作戦『第三弾：絶壁VS絶壁』

魔理沙&????「サブタイイイイイイ!!!!!!」(怒)

白米「……」 そっぽ向いている

霊夢「というか後者、次回まで待ちなさい!!」 ???を蹴り飛ばす

????「ああん!!/!/」 感じている

白米「あー。実は悲しいお知らせが3つあります」

一同「「「え?」「」」

白米「1つ目、今回出た霖乃助、メディスン、雛、幽香、リグルは……

下手すると、東方双界伝での出番がこれだけになります」

呼ばれた5人「「ええええええ!!?」「」

白米「5人のファンの皆様、誠に申し訳ございません。できる限り、5人の出番を増やすようにしますので……(汗)

2つ目は、六道兄弟の出番が年明け後になります」

武「おいコラあああああ!!!」

勇「orz」

白米「そして最後、クリスマス企画として執筆中でした真壁とフェイのデートの話が……無かった事になりました」(汗)

フェイ「なん……だと……!?!」

白米「代わりに、2月のあのイベントの回は必ずやります」

霊夢「2月? 節分?」

白米「いや、アレです」

霊夢「……ああ、アレね」

魔理沙「アレか……」

パチュリー「アレね……」

フエイ「／／／」

幽香「では、引き続き感想・質問を受け付けるわね

じゃあ白米、覚悟はいい？」（黒笑）

白米「え！？ ちょ、ま（ry」

幽香「零距离マスタースパーク！！」

ピチュドーン

第二十一話 魔理沙の蒐集大作戦『第三弾：絶壁VS絶壁 前編』（前書き）

ニコニコニュースで、東方projectがヒットした理由の1つに『二次創作のしやすさ』があるとありました。

これに対し、ZUN神主は

「二次創作しやすいのには理由があつて、僕の中では二次創作しやすいために作るというよりは、続編を作りやすいように作る。1つで完成させないで、『他のキャラとちよつとこつ繋がりあるのかな』という感じにすると、僕が続編を作りやすい」（ニコニコニュースから抜粋）

と語つたらしいです。

ZUN氏、やっぱり凄いです……。

うん、これからも頑張ろう。

という訳で本編です。

第二十一話 魔理沙の蒐集大作戦『第三弾：絶壁VS絶壁 前編』

迷いの竹林 永遠亭

魔理沙はここに住んでいる赤と藍色の半分こ衣装を身に纏った医者、やじこころえいりん八意永琳と会話していた。

彼女は月から来た者であり、とある理由で月の人々を裏切り、この幻想郷に住み着いたのである。

「……薬品を貸して欲しい？」

「ああ、本の数量でいいんだ。このメモに書かれた奴を分けてもらえないかな？」

永琳は天才的な頭脳を持ち、どんな薬でも作る事ができる。かつて不老不死になれる『蓬莱の薬』をも作り出してしまった事がある。魔理沙は自分で調合できない薬を手に入れるべく、ここに訪れて来たのだ。

「ふーん……いいわよ」

メモを一覧し、永琳は笑顔で答える。

「あれ？ いいのか？」

「どうせ断つても、力付くで奪う気でしょ？」

「失礼な。私は強盗なんかじゃないぜ？」

「まー、やるつもりだったけどな」

魔理沙の疑問にやれやれ、というジェスチャーで問い返す永琳。魔理沙はムツとなって反論するが、事実なので一応肯定する。

「ただし、条件があるわ」

「なんだお前もか……」。

「いいぜ。弾幕勝負ならパチュリーが相手になるぜ」

『無茶言わないで。私は貴女のサポートしかできないのよ?』

オプシオンを指差して自信満々に言う魔理沙だが、パチュリーはオプシオンの通信機能を使ってツツコミを入れる。

「そうね。弾幕勝負という所はあってるけど、相手は私じゃないわ」

「あー? じゃあ、相手は誰なんだ?」

魔理沙が首を傾げた瞬間

チユドオオオオン

外の竹林から爆音が響き、永遠亭がその衝撃で揺れる。

「……………」

「……姫様があの娘と、また殺し合いをしてるのよ。実験の邪魔になるから、止めてもらえないかしら？」

外を見ていた魔理沙が永琳に視線を戻すと、永琳は引き攣った笑みで魔理沙に自分の上司の喧嘩を止めるように依頼する。

『実験』という単語に疑問を持った魔理沙だが、直後に隣の部屋の戸の隙間から視線を感じて隣を見る。

視線の主は、健康に気を使って長生きして妖怪化した白鬼、こなほ因幡てみであつた。

猿轡をされており、魔理沙に助けを求めるかの様に涙目で訴えてくる。

しかし、魔理沙は何も見なかったかの様に視線を無視し、永琳と向き合う。

ま、大方また何か仕出かして、永琳の逆鱗に触れたのであろう。

「大体分かつたぜ。二人の喧嘩を止めればいいんだな？」

「ええ。なるべく殺すつもりでお願いね？ どうせ死なないし。

あ、後パチュリー？ この前借りた本、明日返しに行くわね」

『むきゅ。明日は私はいないと思うから、小悪魔に渡してあげてね』

「よっしゃ！ 行くぜパチュリー！！」

「む、むー（ちょ、私を無視しないでえええええ）！！」

てゐの必死のSOSも虚しく、魔理沙はオプションを引き連れて永

遠亭を後にした。

迷いの竹林 某所

ここで、空中で死闘を繰り広げる二つの影があつた。

1つは、黒い長髪に和服を着こなした高貴な雰囲気を持つ少女。永琳が『姫様』と呼ぶ人物、蓬萊山輝夜ほうらいさんかくやである。

月の姫であるが、ある日興味本位で蓬萊の薬を服用して不老不死になり、月から追放されてしまう。数年後に月から迎えが来た際、地上での生活を楽しい思った輝夜は永琳と共に逃亡を図り、現在は幻想郷に住み着いているのだ。幻想郷では稀に、月から持ち込んだ品で展示会を開く。

暢気で好奇心旺盛だが、部下思いな所がある心優しい性格であり、よく言えば箱入り娘、悪く言えばニートな人物である

もう1つは、白い長髪にリボン、白いシャツに赤いもんぺを身に纏った少女。輝夜のライバル、藤原妹紅ふじわらのもこうである。

元は貴族の娘であり、ある理由で蓬萊の薬を服用して不老不死なつた。過去の出来事で、輝夜に何らかの恨みがあるらしい。

幻想郷に来るまでは、人を避けるように生活してきた為、かなり人付き合いが苦手である。見知った相手だと、気さくに話し掛ける性格である。いつもは永遠亭へ診察受けようとする人の為に竹林を案内をしている。

「神宝『ブティストダイヤモンド』!!」

「蓬莱『凱風快晴 - フジヤマボルケイノ - 』!!」

輝夜は秘蔵の宝を使い、妹紅は不死鳥の様な炎を纏いながら、輝夜に向かつて爆発する赤い弾幕を放つ。

この二人は仲が悪く、出会えば殺し合いに発展する。ただし、二人とも不死身なので問題無い。案外、小猫の喧嘩の如く戯れ合っているだけかもしれない。

しかし、今回の殺し合いは単なる戯れ合いとは違うようだ。

「輝夜あああ!! てめえ、あの場でトゾーはねえだろうが!!」

「うるさいわね!! あんたもキーで谷底まで吹き飛ばしたじゃない!!」

つまり、珍しく平和的にマリカートで対戦をしたのだが、互いを妨害し合った為、リアルファイトに発展したらしい。

てか、その程度で殺し合うなよお前ら……。

この戦いを、竹の陰から呆れて見守る人物がいた。

白い長髪に藍色の服、弁当箱と例えられる帽子を頭に乗せている。

妹紅の友人のワーハクタク、上白沢かみしろさわけいね慧音である。

堅苦しく生真面目な性格をしており、歴史に詳しく、歴史を無かった事にしたり、創ったりする事ができる。人間に好意的であり、普

段は人間の里で寺子屋を開いている。

竹林の方で騒がしい気配を感じたが、様子を見に来てみればくだらない事で喧嘩している二人を発見し、頭が痛くなったらしい。

「まったく……さつさと止めないと、また竹林が火事になるな……」

首を大きく回し、慧音は二人の仲裁に入ろうと一歩踏み出した。

その時

「恋符『喧嘩両成敗マスタースパーク』!!」

「ぎゃああああ!!?」

上空から発射された極太レーザーにより、輝夜と妹紅が撃墜された。

『いきなり撃つのね……』

「話し合い持ち掛けても、あの二人止まらないだろ？ 撃ち落とす方が、手っ取り早くて楽しいな」

『それもそうね……』

つつこむパチュリーだが、魔理沙の言い分を聞いて思わず同意する。

「ちょっと、何をするのよ!?!」

「いやー、永琳に頼まれてな。『実験』に集中できなくなるから、喧嘩を止めるってな」

「うっ……」

実験という単語を耳にし、魔理沙につかみ掛かってきた輝夜は動揺する。

「くそっ……まだ終わって」

「何をやっている、妹紅？」

「あ」

頭を振り、立ち上がる妹紅に後ろから声がかけられる。聞き覚えがある声に、冷汗を流しながら恐る恐る振り返る。

「け、慧音……」

「たかがゲームで、竹林燃やすつもりだったのか？」

「あ、いや、その……」

コキコキと首を鳴らしながら歩み寄る慧音に、思わず後ずさりする妹紅。慧音は笑顔だが、目は笑っていない。

恐怖の余りに妹紅は涙目になり、ガクガクと震える。そんな妹紅の肩をガツシリと掴み、慧音は頭を大きく後ろに振りかぶる。

「反省しろ馬鹿者おおおおー！！！！」

古事記ではイザナギという神が桃を投げ付けて鬼や化け物を退散させたと謂われている。

魔理沙は、地上の桃より天界で育った桃の方が効果があるだろうと思っていた。まあ、同じ植物でも育つ場所によつては違うらしいので、あながち間違つてはいない。『鋼の錬金術師』の原作者が描いた『百姓貴族』によると、『北海道産の芋の苗を東京で育てても、東京の芋になる』らしい。

そこ、『どうせ嘘だろwww』と言つな。あの本に描かれている事は、大概マジだ。北海道はどうかは知らんがな。

何故、そう言えるのかつて？

知り合いに農家やつてる人がいるからだ。というか、私の近所に住む人の大半は農家だコンチクショウ。

まあ、そういった作者の出身事情は置いといて、有頂天にたどり着いた魔理沙は、何かを探している人物を見つける。

緋色の羽衣を身に纏い、鈴仙から『ぱつっんぱつっんの衣装』と例えられた服を来た人物。竜宮の使い、永江衣玖ながえいくである。

魔理沙はそんな衣玖に近付き、話し掛けてみる。

「よう、竜宮の使い。何やってんだ？」

「あら、魔理沙さん。こんにちは」

魔理沙に気付いた衣玖は丁寧にお辞儀し、苦笑しながら魔理沙の問いに答える。

「実は総領娘様そうりょうむすめを探しているのです。そろそろお勉強の時間なのですが……」

「あー、成る程」

総領娘とは、比那名居天子ひななごてんしという天人の事で、一応衣玖の上司である。彼女の事を知っている魔理沙は、衣玖に同情する。ちなみに、衣玖の言う『お勉強』とは礼儀作法の勉強である。

「ところで、魔理沙さんは何故この天界に？」

「あー……ちょっと、ここの桃を貰いにだな……」

衣玖の能力は『空気を読む程度の能力』。場の空気を読み、すぐに馴染む事ができる。また、大気の流れを感じ取る事で天変地異を事前に察知する事ができ、下界にそれを知らせ回るのも彼女の仕事である。

つまり嘘についても、気まずい空気を読まれて怪しまれてしまう可能性を、魔理沙は感じていたのだ。ならば、いっそ開き直った方がいいだろう。

「そうですか……では、こうしましょう」

衣玖は何か考え事をした後、何かを思い付いた。魔理沙は少し嫌な予感を感じながらも、衣玖と向かい合う。

「一緒に総領娘様を探していただけたら、いくらでも差し上げまし

よう」

ああ、やっぱりな……と、魔理沙はため息を吐くが、研究の為に衣玖の条件を飲む事にした。

とはいえ、魔理沙は天子が何処に行ったか大体見当付いていた。天子はかつて、退屈の余りに緋想の剣を勝手に持ち出し、幻想郷で異常気象を起こす異変を行った事がある。この時、確実に博麗の巫女が来るように、博麗神社を倒壊させてしまった事がある。

この異変以降、博麗神社の家計が火の車となり、霊夢のがめつさが更に上がったのは言うまでも無い。

ともかく、退屈凌ぎにとんでもない事を仕出かした彼女である。夢幻界に興味を持たない筈がない。

魔理沙と衣玖は、博麗神社に向かった。

博麗神社に着けば、案の定そこには桃が付いた黒い帽子を被った青い長髪の少女、天子の姿があった。しかもその手には、かの緋想の剣が握られている。

「総領嬢様！」

「げっ、衣玖！？ それに魔理沙まで！？」

衣玖に呼び掛けられ、イタズラした所を見つけた子供の様な表情をする天子。

「やっぱり夢幻界に行こうとしたんだな……」

「そうよ。聞けば幻想郷にいない妖怪や妖精、それにロボットがいるって話じゃない。そんな面白そうな所、私も行ってみたいのよ！」

呆れた様子を見せる魔理沙の予想を、天子は大声で肯定する。

「総領嬢様。お気持ちは分かりますが、八雲紫から博麗の巫女不在の時は、夢幻界に行かないよう忠告された筈です」

「そんなの知ったことじゃ無いわよ！」

衣玖は天子を説得しようとするが、魔理沙は衣玖の台詞の中にある疑問を抱き、衣玖に話し掛ける。

「待った。どういう事だ？ 霊夢がいないと天子が夢幻界に行けないなんて……」

「それは……」

魔理沙の疑問に衣玖が答えようとした、その時

「きゃあ!？」

突如、天子の足元にスキマが開き、天子はスキマに飲み込まれてしまふ。
啞然とする魔理沙と衣玖の目の前に、紫がスキマから上半身を出して現れた。

「まったく、油断も隙もありゃしないわね……」

「紫……」

「霊夢が不在の間は、幻想郷を覆う博麗大結界が少々不安定になるの」

何処からか、魔理沙の疑問を聞いたのだろうか。紫は魔理沙に説明し始めた。

博麗大結界は霊夢と紫、もしくは藍が管理している。この結界は幻想郷を外の世界から隔離する際、紫と当時の博麗の巫女が張ったものである。その為、幻想郷を維持する為には、紫と霊夢が幻想郷において結界を維持しなければならない。紫が不在時は藍が代わりに結界の管理をするが、霊夢の代わりはいない。

今は西行寺幽々子を始めとし、守矢神社の神である八坂神奈子と洩矢諏訪子、魔界の神である神綺、命蓮寺の僧侶である聖白蓮等ひじりびやくれんの協力により結界は何とか維持できている。しかし、所詮は応急処置の為、安心できない。魔理沙やアリス等ならいいが、強力な力を持つ天子が夢幻界に行ってしまうとバランスが崩れ、幻想郷が崩壊しかねない。緋想の剣を持ち出しているのなら尚更である。

幻想郷が崩壊してしまうと不便になるのは明確だと、レミリアや輝夜といった幻想郷の屈指の実力者達は大人しく幻想郷に留まり、部下に夢幻界の調査に向かわせているのであった。

「なら、何で霊夢を呼び戻さない？」

「最初は、あまり大した事無い異変だと思って送り出したの。でも後で、この異変が一筋縄では行かない事を知ったの」

魔理沙の的確な疑問に、紫は首を横に振る。白玉楼で神綺によってある人物の伝言を聞いた紫は、改めて事の重大性を知ったのだった。「呼び戻そうにも、私は幻想郷を離れる訳にはいかないし、今回の異変は霊夢が行かなければならないの。」

それが『あいつ』との約束だから」

「『あいつ』？」

魔理沙は『あいつ』の事について訊こうとするが、紫は答えなかった。

「魔理沙、天子を止めなさい。ここで戦ったらまた神社が倒壊するかもしれないし、戦いの場はこちらで用意させてもらったわ」

と言つて、紫は天子が落ちたスキマを指差す。

「そして、また夢幻界に行くなら霊夢に伝えてほしい。」

『『約束の時』が近付いて来ている』と……」

「『約束の時』？ 何だそれは？」

「時が来れば分かるわ。じゃあ、よろしくね」

何時になく真剣な表情をしながら、紫はスキマへ消えていく。魔理沙は、紫を引き止める事無くそのまま見送る。紫の真剣な表情に、紫の強い信念の様なものを感じて……。

『成る程、近頃フランが妙に大人しかったのはそのせいだったのね……』

思い当たる事があったのか、オプションからパチュリーの納得したような声が発せられた。

フランとは、レミアアの妹フランドール・スカーレットの事である。『あらゆるものを破壊する程度の能力』を持ち、以前はレミアアによって紅魔館地下に閉じ込められていたが、紅霧異変後は紅魔館の中をふらつくようになっていた。

「何で天子はああなのに、レミアア達は大人しくしてんだ？」

「紅魔館の主とその妹である責任があるんじゃない？ その代わりに、咲夜はレミィの相手をしないといけなくなったけど……」

余談だが、咲夜とレミアアのやりとりは……とてもR - 15の範囲内では表現仕切れないので割愛。

「ま、それは置いていて、さっさと天子の奴を大人しくさせるか」

『むきゅ』

「本当に申し訳ございません……」

悩んでも仕方ないと魔理沙は天子が落ちていったスキマに飛び込み、オプシオンもそれに続く。そして自分の上司が責められてやや意気消沈気味な衣玖が飛び込み、スキマは閉じていった。

スキマを抜けると、そこは天界の有頂天。しかも、かつて霊夢達が天子と戦った場所であった。

そこでは要石に腰掛けて、膨れっ面になっている天子が待っていた。魔理沙達が着地したのを確認すると、天子は立ち上がる。

「まったく……貴女達が邪魔しなければ、今頃夢幻界に行けたのに……」

「ま、紫にも考えがあるんだろうな。『約束の時』ってのは何なのか分からないが、お前を幻想郷から出す訳にはいかないな」

『懲らしめた後は、レミィの爪の垢を煎じて飲ませてやるわよ』

「総領娘様、これ以上の我が儘は他の天人の皆様の迷惑になります。失礼ながら、私も本気で参ります！」

魔理沙はミニ八卦炉を取り出し、パチュリーはグリモワールを開き、衣玖は羽衣を閃かせ、天子と対峙する。

天子はため息を吐くと、緋想の剣を抜き払う。

「……邪魔するなら、誰であっても容赦しないわ。例え衣玖、貴女でもね……」

「……諦める気は無いのですね」

何処か哀愁漂う天子の目を見て、衣玖は天子の意志の強さを汲み取る。理由はどうあれ、お互い引く訳にはいかないようだ。

「さて、お仕置きの間だぜ」

魔理沙と天子は同時に駆け出し、ぶつかり合う。

紫の言う『約束の時』。

果して、その時が来るとどうなるか。それは、紫を始めとした数人しか知らない……。

第二十一話 魔理沙の蒐集大作戦『第三弾：絶壁VS絶壁 前編』（後書き）

次回、東方双界伝 } Another Fantastic World.

魔理沙の蒐集大作戦『第四弾：絶壁VS絶壁 後編』

白米「長くなりそうなので分けます」（苦笑）

霊夢「案の定ね」

魔理沙「てか、ここでの天子の奴はMじゃないんだな」

白米「シリアス展開では流石にマゾスイッチOFFになっております。

そして、今回紫が言った『約束の時』。これがこの小説の重要な伏線になります」

霊夢「本当にそうなるでしょうね？」（疑）

白米「これに関してはマジです」

紫「では、引き続き感想・質問を受け付けるわね。

次回も、また見てゆかりん」

白米「似合わん事を……」(ボソッ)

紫「ボツシユート」

白米「ぎゃあああああああ!?!」 スキマ送り

第二十二話 魔理沙の蒐集大作戦『第四弾：絶壁VS絶壁 後編』(前書き)

白米の噂話

魔女は箒に乗って飛ぶイメージがありますよね？

中世ヨーロッパでは、魔女はサバトという悪魔のパーティみたいなもので悪魔達と性行為を行うと考えられています。

そこで魔女達は箒に魔法薬を塗り、それを股に挟んで……

後は、分かりますね？

ちなみに中世の魔女達は、その感覚を『空を飛ぶような気持ち』と例えたそうです。

霊夢「魔理沙……」

早苗「不潔です……」

魔理沙「誤解だあああああ！！！！」

あくまで噂です。信じる信じないかは貴方達次第です……。

第二十二話 魔理沙の蒐集大作戦『第四弾：絶壁VS絶壁 後編』

「乾坤『荒々しくも母なる大地よ』！！」

天子は要石に乗って地面に落下、要石が地面に当たると周囲の地面が盛り上がり、魔理沙と衣玖を吹き飛ばそうとする。しかし、魔理沙と衣玖は慌てず空を飛んでこれを回避、天子に向かって弾幕を放つ。

「魔符『スターダストレヴァリエ』！！」

「光珠『龍の光る眼』！！」

天子は、二人が放った弾幕を緋想の剣で振り払い、更なるスペルカードを宣言する。

「霊想『大地を鎮める石』！！」

宣言したと同時に上空から光が降り注ぎ、要石となって魔理沙達に向かつて落ちて来る。

魔理沙と衣玖が要石を避けるが、天子は要石を足場に跳躍し、魔理沙に斬り掛かる。

「やあああ！！」

「うおおっ！？」

魔理沙は咄嗟にミニ八卦炉で緋想の剣を防ぐ。緋々色金で出来たミ

二八卦炉は緋想の剣の刃を弾き返し、魔理沙はスペルカードを取り出す。

「星符『ドラゴンメテオ』!!」

「ぎゃあああああ!?!」

魔理沙は天子に向かってマスタースパークを発射し、天子を地面に叩き付ける。

「更に、『ブレイジングスター』!!」

ドラゴンメテオの反動で宙に浮いた魔理沙は、そのままマスタースパークを推進力に使って大きく旋回、超高速で天子に向かって突撃する。

しかし、天子は慌てずスペルカードを取り出す。

「気符『無念無想の境地』」

宣言した瞬間、天子の周りに赤いオーラが現れる。天子はそのまま、魔理沙のブレイジングスターに立ち向かう。

ゴウッ

高速に飛行する魔理沙の体当たりが直撃し、天子は吹き飛ばされ後方に発射されたマスタースパークに身を焼かれ

「ふっ……」

しかし、天子は火傷どころか痣や焦げた箇所が見当たらない。余裕
そんな笑みを浮かべている天子に、魔理沙は顔を引き攣らせて呟く。

「く……ドープングタイプのスペルカードか!?!」

ドープングタイプとは、弾幕使い自身の身体能力を上げるタイプの
スペルカードである。最もこのドープングタイプとは、魔理沙が勝
手に名付けたものだが……。

「『エレキテルの龍宮』!?!」

『日符』『ロイヤルフレア』!?!』

「無駄よ!?!」

衣玖は雷撃、オブションのパチュリーは光の爆発で攻撃するも、痛
みを感じない今の天子には効果が無かった。しかし、スペルカード
ルールの関係上、時間切れでオーラが消えてしまう。

天子はそれを確認するや、次のスペルカードを取り出す。

「地震『先憂後楽の剣』!?!」

「うおお!?!」

「うつつ!?!」

天子は緋想の剣を力一杯大地に突き刺し、大地震を起こす。オーラ
が消える瞬間を狙って着地していた魔理沙と衣玖には、この地震か
ら逃れられず吹き飛ばされる。

『魔理沙！！ 衣玖！！』

「言った筈よ、邪魔するなら誰だろうと容赦しない、てね……」

パチュリーは魔理沙と衣玖を心配するが、天子は鼻で笑って倒れている魔理沙に向かって剣を構える。

「止めよ！！！」

天子は、魔理沙に止めをさそうと緋想の剣を振り下ろそうとする。

しかし

「どうかかな？」

「！？」

突然、魔理沙が起き上がり、天子の腹部にミニ八卦炉を押し付ける。天子は慌てて離れようとしたが、魔理沙が足を掴み逃がさない。

「は、放しなさいよ、このお！！」

「嫌だね」

魔理沙を振り払おうと天子は暴れるが、魔理沙は両足で天子の身体を挟み、左手で緋想の剣を持っている天子の右腕を掴む。ミニ八卦炉を天子の胸に再び押し付け、魔理沙はスペルカードを発動させる。

「恋符『零距离マスタースパーク』!!」

「きゃああああ!!?」

魔理沙は至近距離で、天子に向かってマスタースパークを発射。魔理沙は天子を拘束していた手足を放し、マスタースパークの反動を利用して天子から離れる。天子はマスタースパークに飲み込まれ、吹き飛ばされる。

「へっ……。土壇場であいつのスペルカードを真似する羽目になるとはな……」

魔理沙はそう呟いて太陽の焔での出来事を思い出す。

あの時、幽香が自身に向けて放とうとした零距离でのマスタースパーク。魔理沙はこれをヒントに、この反撃方法を思い付いたのだ。

『まったく、無茶しちゃって……』

魔理沙の無事を確認し、安堵するパチュリー。

「待ってください！ 総領娘様がこの程度で倒れる筈がありません！」

ドゴオッ

「『!?!?』」

衣玖の忠告と共に、天子が吹き飛んだ方向の地面が限りなく盛り上

がっていく。

「 天地『世界を見下ろす遥かなる大地よ』！！」

盛り上がった地面の頂上には、緋想の剣を地面に突き刺した天子の姿があり、魔理沙達を見下す様な眼で睨みつけていた。

「やれやれ、頑丈だなお前」

「甘く見ないでほしいわ。私と、この緋想の剣をね！！」

そう言うと天子は1枚のスペルカードを上空に投げると、緋想の剣を両手で握り大きく振りかぶる。

「受けて立つぜ、全力全快で！」

魔理沙も1枚のスペルカードを取り出し、それを地面に落とすとミニ二八卦炉を両手持ちに構える。

緋想の剣とミニ二八卦炉、2つの武器に魔力が集まっていく。

「『全人類の緋想天』！！」

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』！！」

緋想の剣から放たれた超高速・超高密度の気弾の集まりと、ミニ二八卦炉から発射された極太のレーザーがぶつかり始めた。

「くっ……！！」

「っ……！！」

二人の弾幕が拮抗し合い、中央で爆発を起こしてしまう。この爆風で二人の体勢が崩れる。

「今だ、衣玖！」

「!?!」

魔理沙の掛け声に、天子は驚いて上を見る。

煙の中から衣玖が飛び出し、スペルカードを宣言する。

「魚符
」

衣玖が纏っていた羽衣が右腕に纏わり付き、螺旋状に回転しドリルの形状になる。衣玖は風を纏ったそのドリルを天子に向かって突撃する。

「『龍魚ドリル』ウ!!!」

ギューイイイイイイイイイイ

「うわああああ!!!」

ドリルの直撃を受け、天子は意識を失った。

「う……?」

天子が目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。天子はベッドから起き上がると、深くため息を吐く。

「負けちゃったわね、衣玖と魔理沙に……」

意識を失う直前に衣玖のドリルにやられていた為、天子は自分が負けた事を悟った。

「……」

しかし、いつまでも落ち込んでばかりじゃいけない為、帽子を被って自室を出ると

「あ。御目覚めになられましたか、総領娘様？」

「おおー。起きるの早えーな、天子」

ドラム缶大のカゴに沢山の桃を入れている衣玖と、それを受け取る魔理沙がいた。

「何やってんの、貴女達……」

顔を引き攣らせながら、天子は目の前の状況につっこむ。

「何って、お前を探してくれれば天界の桃をやるって、衣玖と約束

したんだがな？」

「……………」

「……………」

魔理沙の発言に天子は衣玖の方を見るが、衣玖は即座に目を逸らす。

「ま、別にいいわ。結構楽しめたし」

しかし、天子は途端に笑顔になると、傍にあつた椅子に座る。

「ボロ負けしたのに楽しめたって、どんだけマゾだお前」

「……………今すぐ貴女の家を破壊してやるうか？」

『やるなら合図してよ？　すぐ避難から』

魔理沙の皮肉に、要石を持ち上げながらキレる天子。それに若干焦りながら、天子に呼び掛けるパチユリー。

「弾幕バトルが楽しかったって事よ。おかげで退屈じゃなくなったし」

「夢幻界には行かないのか？」

「八雲紫が見張ってたなら、容易には行けないわ。

仕方ないから、霊夢が戻って来るまでは我慢するわ」

あっさり潔く諦める天子に、魔理沙は苦笑する。

こうして魔理沙は天界の桃を手に入れ、夕日が傾く空を背景に自宅へ戻っていった。

「衣玖、ちょっとお願いがあるのだけど……」

「はい？」

魔理沙が帰って行くのを見届け、天子は衣玖にある事を頼みだす。

「」

「……分かりました。その御命令なら喜んで」

「頼むわね、衣玖」

魔法の森 霧雨魔法店

「ただいまだぜ！」

「お帰りなさい。本を受け取りに来た小悪魔が、夕食を持ってきて

くれたわよ」

パチュリーが指差す先にはラップで封をしてある皿の中にあるサンドイツチだった。

サンドイツチはサンドイツチ伯爵が作ったから名付けられたという説があるらしいが、他には『砂（サンド）』と『魔女（ウィッチ）』以外は挟んで食べられるからサンドイツチと呼ぶという説があるらしい。

「よし、じゃあ飯を食ったら早速実験にするか！」

「……今夜は徹夜になりそうね。むきゅ」

それはともかく、魔理沙は桃が入ったカゴを置くと、パチュリーに提案する。人間である魔理沙と違い、根っからの魔法使いであるパチュリーには食事や睡眠は必要ない。しかし、誰かと一緒に食べる食事の楽しさを知っている為、魔理沙の夕食に同席するようにしたのであった。

夕食後、魔理沙は巨大な鍋を用意し、その中に天界の桃を放り込む。次に太陽の焔で採取した向日葵で作った油を入れて、パチュリーが唱える呪文と合わせて掻き混ぜる。そして、永琳の所から貰ってきた薬、香霖堂から物々交換して得たアイテム、魔法の森や夢幻界で採取した材料を鍋に入れる。そして掻き混ぜる。

何？ 材料を詳しく？

これで真似されて、とんでもない事になったら責任を負いかねないので未公開である。

少なくともクリーパーの一部らしきものが見えたが……。

「よし、最後はこれだな」

そう言っつて、魔理沙が取り出したのはクイーンフングスの一部。フングスの一部は長時間放置した為乾燥し、毒の胞子を出さなくなっていた。魔理沙はビンを開けて、クイーンフングスの一部を鍋の中に投入。掻き混ぜる。

しばらく掻き混ぜ、パチュリーの呪文が唱え終わると、鍋の中身は紫色に変色する。

「術者の身体の一部を入れて……」

魔理沙は自分の髪の毛を一本抜くと、鍋の中に入れて蓋をする。

「後は一晩煮込めば完成だぜ」

「カレーかよ……」

得意げになる魔理沙に、パチュリーは静かにつっこむ。

「でも、これで完成するのかしら……」

貴女の使い魔なんて」

魔理沙が作るうとしてしているのは、自分のしもべになる使い魔である。ただし、小悪魔みたいな召喚や、藍や橙みたいな式神ではない。ゴレムの様に自分が調達して来た素材で一から作る使い魔を、魔理沙は作り出したかったのである。

「ま、朝になつたら出来てるだろうし。どうする？」

「むきゅ。アリスの家に泊まっていくわ。アリスに貸す本を届けないといけないし」

「いや、何で私の家じゃダメなんだ？」

「埃っぽいし、喘息が悪化しそうだからよ」

「オイ」

こんなやり取りをしながらも、パチュリーは何冊か本を持ってアリスの家に向かう。魔理沙は適当に風呂を済ませ、朝に備えて就寝する。

翌日早朝

魔理沙は、度重なる弾幕バトルの疲れでまだ寝ていた。

その時、鍋を煮込んでいた火が突然消えてしまう。そして独りでに蓋が開くと、中から何かが見え鍋からはいずり出た。

その何かは立ち上がると、寝ている魔理沙に近付いていく……………。

魔理沙はそれに気付かずグッスリと熟睡していた……………。

第二十二話 魔理沙の蒐集大作戦『第四弾：絶壁VS絶壁 後編』(後書き)

次回予告は、ネタバレになりそうなので今回は無しです。

霊夢「ふざけるな馬鹿白米!!」 夢想封印

白米「ぎゃああああ!!」(ピチューン)

早苗「では、引き続き感想・質問を受け付けます。次回もお楽しみに。」

霊夢さん落ち着いてえええ!!」(汗)

霊夢「おらあああ!!」 逆海老固め

白米「ギャー!!」 ギャー!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9845v/>

東方双界伝 ~ Another Fantastic World.

2011年12月11日22時50分発行